



素描

あの人 あのこと



pinokopapa

またあの夏がきました 1

今年は公私共に忙しく、妻に言われるまで蝉の声がしないことに気付きませんでした。確かに今も蝉の声は少ないように思いますが、下の写真は気持ち悪いぐらい 蝉 蝉 蝉 といった感じです。この木の足元には蝉が抜け出した穴が沢山開いています。蝉の抜け殻も、この他に木一面にぶら下がっています。でも蝉の声は去年のようではありません。どこへ行ったのでしょうか。そしてこの時期に ひぐらし が鳴いています。



善通寺は、善通寺祭りが終わるとすぐお盆が来ます。そしてすぐ さぬきの宮護国神社の 万灯夏祭り が行われます。それには、戦没者の家族の献灯した幾百の提灯が、広い神社内の参道に掲げられます。その提灯には戦没者の名が書かれており、夜、その参道を歩きながらそこに書かれた名前の一つ一つを読んでいきますと、心がしんと冷えて重くなってしまいます。私は戦後生まれの人間で、戦争のことも戦後の混乱のことも知りません。今思えば子供時代は何もなく、ただ貧しかったこと、そしてそれは誰しものことであったということ — そんなことしか解りません。しかしそれは今思うからであって、その時は貧しいともつらいとも思いませんでした。

今大マスコミの中で、典型的にして類型的な、そしてかつてのような古めかしい右翼的発言 が横行しております。

国旗と国歌を愛せない者は 愛国者ではない

えっ？日本人はすべからく国旗と国歌を愛さなければいけないの・・・と、そんなことを言うと

非国民

といわれる時代がまたくるのでしょうか。

国家のために死ぬことは名誉なことであると教えなければならないと言います。しかし私は

命はひとつ 人生は一回だから命を捨てないようにね
あわてると ついふらふらと お国の為なのとね言われるとね
青くなって 尻ごみなさい 逃げなさい 隠れなさい

と いう方に共感します。弱くて、覚悟もなく、時代の中で親の後をただ働いて生きてきたものとしては、なんとこのしられようとこんな風に生きてきました。私達に貼り付けられた最大の レッテル は 団塊の世代 です。

他にも 戦争を知らない子供達 トロツキスト 新左翼 全共闘 ベ平連 . . .
そうです、私の精神は今でも、かの山本一太氏が与謝野氏の言ったこととして国会の質
問のなかで連呼した 新左翼の全共闘くずれ です。もっと格好良い言い方があり
ました。 ノンセクト ラジカルズ -私達は右翼の人たちのように、もうすでに用
意された美しい言葉も論理も様式も持ちません。庶民として生き、何も残せず、戦時中
であれば お前達は赤紙一枚でいくらでも補充ができるんだ といわれる側の人間
です。それ故自分が生きてきた実感の中から自分の言葉を掴み、生きております。敷島
の 大和心を と美しく言えません。何せ、ノンセクト なんですから。しかしもう
ラジカル にはなれませんが。

参議院自民党の女性議員の主張を聞いていると、幕末の遊説家なるものを思い出
しします。かつては 尊王攘夷 でありました。今は あなたには国家観が
ないっ！ です。過激な論を精一杯声高にわめいて他人をののしり、一方的に決め付
けることが国家観と関係あるのでしょうか。

今の日本人は 一番駄目だね
と、かつての芥川賞作家の都知事は言います。その首都で 3・11 に帰宅難民9
万人が粛々と、整然と、暴動も起こさず、じっと我慢して帰りました。戦後モラルの第
一番目の破壊者は 太陽族 ではなかったかと、かの知事にいつてやりたい思いに
駆られています。

今の風潮に、私は マリオと魔術師 を思わざるを得ません。そして今、大マ
スコミも、評論家なるものも、世論調査の数字も信じられません。私は神にも国家に
もよって立つことのできない ノンセクト ですから。しかし私はまだ今も マリ
オ で居続けていられてますでしょうか。

しかし、かつての大野党の主張のように、憲法9条があるから日本は戦争から逃れら
れているのだとは思いません。しかし日本が戦後一度も海外で鉄砲を発射した事が無い
ことを、何故誇りとしてはいけないのでしょうか。常に膨大な軍備を用意し、他国と戦
う体制を準備するのではなく、かの中国で日本の災害救助隊が遺体を発見した際、きち
んと整列して黙とうを捧げた、その態度を貫くことの方が、誇り高く、世界に凜と立つ
日本を示す方法だと、私は思っています。

山陰の地方大学で私は、あの学舎と大学本部を全共闘が封鎖しているさなかに、京都大学文学部助教授にして著名な作家であった 高橋 和己氏 の講演会の開催に加わったことがありました。あの時代、こんなことも出来ました。確か、昭和44年ごろであったと思います。バリケードの中で、どんなきっかけからそんな話になったのか解りませんが、高橋氏がこの大学が旧制高校の頃の出身であることを頼りに、講演会を依頼しようということになり、図々しくも直接出かけて行って頼み込んだのでした。私自身は貧乏学生でしたので京都までの旅費が辛く、一度だけ朝早く京都に着く夜行列車に乗り、初回だったか二回目だったかの依頼に同行しました。その頃は京大もバリケード封鎖されていましたが、その整然と積み上げられたバリケードの規模の大きさに、圧倒される思いがしたのは地方大学の学生のひがみだったのでしょうか。そしてそのバリケードも割合なんと言う事もなく通ることができたこと、高橋氏にもすんなり会えたこと、加えて氏が講演依頼にちょっと考えただけで直ぐ応じてくれたことに拍子抜けしたような思いがしたことを覚えております。更に講演には、氏のほかに東大の 最首悟氏

も加わってくれることになり、講演を依頼したこちらの方がびっくりしました。この面会の後、何度か打ち合わせがあり、講演会の日時も決まって、私は謂わば宣伝のために読書会を開きました。メンバー6人で、まるで目立たない小さな立看を書き、学生会館の前に立てました。たったそれだけでしたが、その集会には、色分けすれば右から左まで、日共、反日共、ノンポリ、ノンセクト、ちょっと過激な高校生、右翼学生、そして英文科の助手まで、まるで休戦協定を結んだかのように集まってきました。

先生 スパイにきたんかな

誰が スパイじゃ ここへ来たことが学校にばれたら こっちの

首が あぶないわ

そんな会話が飛んでいました。そこは、占拠されている大教室で、そんなにも人が集まるとは思わなかったもので、あわててマイクを用意し、それから集会を始めました。

会に先立ち 云々

と会の開催の挨拶が出来るまで大分のこと、手間取りました。

そして、その時私が選んだ高橋和己氏の著作は 憂鬱なる党派 でもなく 我
が心は石にあらず 邪宗門 悲の器 でもなく
散華 と 暗殺の哲学
でありました。

高橋和己氏の二つの作品

散華

暗殺の哲学

は、共に大いに議論が発展するだろうし、いかにも新左翼好みと言う作品を選ぶのはどうかと考えたからでした。会の最初の基調レポートは私が行いましたが、もう40年以上も前のことで、おぼえておりません。しかし高橋氏は、体制に言葉と思想で挑んで行き、極限での人間の思想とそこに表出される行動との落差を、透徹した論理で展開したものが 暗殺の哲学 だと私は思う、とか言ったと思います。どんな高邁な革命思想も行動であらわすと、ただの殴り合いでしかないと言った積りでした。そして散華 は、戦争には参加していなくとも自分の目で戦争を見てきた高橋氏が、戦時に踊った思想と、戦争が終わった後もそれを抱え続けた人を描いたものと紹介しました。どちらも思想を抱え込んで生きている人間を論じ、描いた作品であるというようなことが私の基調レポートでありました。

しかし会は何時の間にか、

暗殺是か非か

一人一殺 近代の超克

いやテロリズムは何も生み出さない

暗殺 や 蜂起 が歴史に悪と書かれるのは

歴史が勝者によって記述されるからだ

明治の元勳達は殆ど皆テロリストだった

と、今にも殴り合いが始まりそうになりました。

待って、待って、この会は暗殺自体を論じるのではなく、極限状態に追い込まれた人間の思想と行動についてと、人間の心の闇の部分までさらけ出すように描いた高橋氏の文学作品について考える会ですよー、 あんたら、彼の小説読んでるんですかー・・・

、主催者としては無責任ですが私は散会宣言もせず、そろっと教室から逃げ出しました。そして後で見知らぬ人に、あちこちで睨まれることがありました。

当の講演会の日、バリケード封鎖された学内に学生が戻ってきました。彼らは普通に学生会館で昼食を食べ、講演会の行われる大講義室の前の、私達が作った開始時間を知らせる立て看に一瞥をくれ、立ち去って行きます。会場の設営をしながら、私達はそれを見ておりました。あいつ等、来るんだろうか・・・、会は成功するんだろうかという思いがありました。そして、会が成功するって、なに？沢山の人が集まるってこと？と準備委員会の学生と首を捻って考えました。そんな疑問が余りに日常的で、このバリケードの中の異常さとはかけ離れたものだと解っていたからです。しかし、あの

高橋和己氏 が来るのですから、沢山の聴衆に聞いてもらいたいとも思いました。人が集まらなければ、面目が立たない — なんて日常的な考えでしょう。しかし、そんな思いに駆られたことも事実です。そんな私達の横を、普通の、ごく普通の学生が談笑しながら通ります。そこにはごく在り来たりの日常が普通に流れておりました。それを間近に見た私は

ああ 革命は 成らない

と突然解ってしまいました。このバリケードの中の、熱いほどの高ぶりや異常さが馬鹿馬鹿しく見えたのです。私達の闘争は、彼らの日常を変えられていない — そう思い、ずっと心が引いて行きました。

高橋氏と最首悟氏は、タクシーで大講義室の前までやってきました。私は会場の入り口で入場料500円を貰いながら、それを見ておりました。人は会場に立ち見が出るほど集まっており、なお入場しようとやってきております。

1000円にすればよかったなあ

実行委員長が近寄ってきて小声で言います。

革命は 金か！

そう言いたくなりました。

講演が始まったとき、私はまだ外で入場料を貰っておりました。

＊＊大全共闘の諸君に、連帯の挨拶を送る！！

最首悟氏の第一声が聞こえました。私の後ずさりしていた心が、ほっと暖かくなったのを覚えております。そしてその後も笑い声が時を置かず拳がり、最首氏の講演の巧みさが解りましたが、入り口の私には内容までは聞き取れませんでした。

その後高橋氏に替わったのでしょう、柔らかな声がし始めました。場内から声も拳

がりません。張り詰めてじっと聞き入っているのが解ります。まるで大学の講義を聴いているようです。私も聞き耳を立てていましたが、高橋氏の声は弱弱しく、聞き取れませんでした。思えば、その時はもう相当に体を衰弱させていたのかもしれませんが。この講演は、私こそ聴きたかった！文学をするものの責任 — 多分そんな思いに駆り立てられて、大学も辞し、田舎大学で講演会を開き、ただ生真面目に学生達に語りかける、私はその姿を垣間見ただけでした。作家が時代の良心であるならば、彼こそ真の意味での良心であると思います。私のようなものが論評するのは余りのも僭越ですが、深い教養に裏打ちされた最良の良心であったと思います。我が解体 にあったと思いますが、母親に勧められて踊る宗教の踊りまで踊ったのは、高橋氏の母親に対する優しさであったのでしょうか。彼はその時39才でありました。彼にはもう少し人生が必要でありました。

高橋氏と最首氏は、翌日広島大学に講演に向かいました。何も知らない、何も解らない私達に、高橋氏は山道を松明を持って駆け連なってゆく邪宗門の門徒の姿を見ていたのでしょうか。少なくとも、私は 盾の会 ではなく、邪宗門門徒でありたいと、当時は思っていました。

あれから40年ほども経っております。

今にも雪を降らせそうな重い雲が、皆の上へのしかかかっておりました。朝、仕事に急いで車を走らせ、交差点を曲がると、そのすぐ向うを何台もの車がそろそろ走っておりました。渋滞？事故でもあったの？舌打ちしたくなる気分でした。車はまだ温もっておらず、時間も急いておりました。通勤時間帯でしたから、他の車も急いでいるんだろうと、首を伸ばし、前の車の先を見ようとしましたが見えるはずもなく、ブレーキとアクセルを交互に踏み、焦り、苛立つ心を抑えながら進みました。

何台か前の車が反対車線に膨らみ、何かを追い越して行きます。そして、対向車が来て徐行に戻ります。何かが邪魔しているのでしょうか。しかし、誰もクラクションを鳴らしたり、追い越すときにけたたましく走り抜けたりしません。ゆっくりと、本当に遠慮がちに追い越し、元の車線の戻ってもまた遠慮がち速度を上げ、走り抜けて行きます。なんだろう、何が邪魔してるんだろう、そう思っていると先の先の車が追い越しました。そして、その邪魔しているものが半分だけ見えました。横付け と言います。これは高松の人が作ったもので、全国的なものではないようですが、自転車の横にリヤカーをくっつけた形をしており、昔はこれで大きなものを運んだりした、自転車のサイドカーのようなものです。最近は何も見かけたことがなく、よく残っていたものだと思います。油気のない髪のある男の人がハンドルに身を預け、力を込めてペダルを踏んでおります。雪花が舞い始めてるというのに、古びたジャケットを着て、前を向いてゆるゆると進みます。ああ、なんか運んでるんだ、大変なんだと、私も皆と同じく焦る気持ちが消え、後を付いて行く気になりました。そして、前の車がゆっくりと進む横付け を追い越したとき、目が釘付けになりました。おばあさんがタオルを頬っ被りし、体に布団を巻きつけて、後ろ向きに荷台に座っておりました。まるで年取った雪ん子 でした。何を見るでもなく、寒さに耐えている風でもなく、じっと後ろ向きに座っておりました。横付けは進んで行きます。すぐに私も追い越せるようになり、ゆるゆると、二人を驚かさないようにそっと追い越しました。その先が国立善通寺病院です。おばあさんを病院に連れて行ってるんだろうかと思いながらバックミラーで二人を見、後の車がミラーに入ってくるのをみておりました。そして、どっと涙があふれてきました。

宮崎県椎葉村は秘境といわれる山の中です。そこに住む椎葉クニ子さんの物語が先日NHKで放送されました。また年寄りの話かとおもわれるでしょうが、87歳の おばば のドキュメントでした。縄文の時代から日本人は焼畑をやっていたそうですが、今はもう椎葉村にあっても焼畑をする人は クニ子おばば だけだそうです。夏の雨模様の日を選んで、前回より30年経った森の木を切り、火を放ちます。山の斜面一体が火に舐められ、雨に静められます。そして1年めは蕎麦を作り、2年目3年目それぞれに草も生えっぱなしで大豆や何かを作り、最後に高粱を作って、後は森に返します。昔の人が言っていた通りにしないと上手く行かないと おばば は言います。昔の人が育ててきた 知恵 だということです。そして6年前に亡くしたおじいさんと、ずうっと一緒に焼畑をやって来れて幸せだったとおばばは言います。

今の世、焼畑農業だけで生きてきた人の、殆ど自給自足の生活からは学ぶべきものがあるとか、森に神聖な木を見つけ、普段は立ち入らない聖域とし、お正月にのみお供えをして神のご加護を祈る生活に、自然とともに生きる日本人の原点をみたという意見などを、番組の最後に紹介していました。知恵も、日本人の忘れかけている姿も、ここにはあります。しかし私は おばば が大きな木に寄り添い、寄りかかって座る姿が今も心に残っています。それは亡くなった おじいさんに、もたれかかっているようです。そして、その姿は美しいと思いました。

そうですね・・・。

赤ちゃんは未来であり、守るべきものであるゆえ、いとおしく美しい。

幼い子は、幼さゆえ、美しい。

若い人は若さゆえ、美しい。

でも、それは与えられたもの。

ところが老人は、その与えられていた未来も幼さも若さも失い、顔に刻まれた皺と老残のみが残され、美しさからは遠ざかって行くばかりと扱われます。過ぎ去った時間は容赦なく、人から色々なものを削り取って行きます。しかし、年老いたものには、今まで生きてきた時間が刻み込まれ、来し方の記憶が残されております。悲しみだって人生をいろどる花と、聞きました。

老人は、生きてきた時間と、身に刻まれた来し方の記憶を背負って、美しい。

私はそう思っておりますし、そうありたいとも思っております。

昔私は本屋さんになると言っておりました

大学の頃です。そんなことでと言いたくなるような論争がありました。

ドフトエフスキー

ドフトイエフスキー

正しい表記の仕方はこっちだと言い争った、別にどっちでもいい論争でした。今はどう
なんでしょう。ネットで ドフトイエフスキー と入力すると ドフトエフ
スキー ではありませんかとか親切にも直されます。ですから今は、なんの疑いもなく
ドフトエフスキー なんでしょう。

さて、このドフトエフスキー氏の本ですが、唯一 カラマーゾフの兄妹 を持つ
ております、大学のころから……。読んでおりません。私が読破したのは、 罪と
罰 地下室の手記 悪霊 そんなところでしょうか。ところがそれらの一作も持って
いませんので、 罪と罰 上下二巻を古本屋で買いました。学校の頃も同じでした
。というよりも、学生の頃を思い出して、古本屋に行ってみたのです。お金を持ってな
い学生は古本屋さんで先ず本を売り、それに足してお目当ての本を買います。話が逸れ
ますが、そうして買った本に、 芥川龍之介 の書簡集がありました。なんでそんな
ものを買ってしまったのか、よく覚えておりません。しかし、小さな古本屋さんで本棚
をじっと見詰め、一冊一冊吟味し、手に取ったのがこの本でした。すると私のしていた
ことを見てたのでしょうか、店主が 本が好きなんやねえ と、つい口をついて出て
しまったという風に声をかけてきました。本を選ぶのに相当に時間を掛け、しかも選ん
だものが 書簡集 ですから、たとえそれが芥川のものであっても、ついそう言っ
たのだということが察せられました。私はふいに恥ずかしくなりました。時間をかけた
こと、書簡集なんてものを買ったこと、その両方が恥ずかしかったのです。後で大学の
先輩にその古本屋の話をする、その店主がかつて 芥川賞候補 にもなったことが
ある人だと教えられ、びっくりしました。聞いた途端、 ああっ と声が出たのを
覚えています。

大学のときの 罪と罰 はハードブックでした。よくある世界文学全集だった
とおもいます。今回は文庫本の上下2冊で、紙が焼けて茶色くなっているのは昔のまま
です。しかし……。私はこれがかつて読破したのでしょうか。なんという饒舌と無駄
話 一 登場人物がよく喋ります。そのおしゃべりの内容がよくわからなかったとい
う記憶が思い起こされました。

今回もそうです。年を重ねれば少しは知恵もつくだろうと高をくくっていましたが、なんと無駄な時間を費やしたものです。この本の登場人物の話すことに追いついて行けません。何度か読み返して投げ出しました。小さな活字で見にくいことと、ずっと頭に入ってこない台詞に我慢できず、忍耐とか辛抱強さとかが無くなってきていることに気付かされました。まるで山登りのように一語一語読んで行き、読み終えたときは何か重大なことを成し遂げたような気分になったものです。同じロシア文学でも、ショーロホフ氏は理解も共感も出来て読みやすかったのですが。

私が大学生の頃、ドフトエフスキー氏は隠れたブームでした。ドフトエフスキーを読まずして文学を語るなかれといった風潮だったと思います。そしてそんな風潮と時代の流行からか、彼の文学まで 実存主義

のレッテルが貼られました。サルトルとボーボワール、社会主義は 構造主義へ、右翼思想は近代の超克 . . . 昔貼られたレッテルとかスローガンが復活したりして、跋扈しました。今思っても、ドフトエフスキー氏は実存主義でしょうか。ロシアの偉大な文学者でいいんじゃないかとおもいます。ロシアの大地に根付いた、ロシア正教の教義が身に染み込んだ大文学者と私は思っています。

そして私は、あの古本屋さんのことを知り、チラッと僅かに心を揺らせた作家への思いを何の後悔もなく放り捨て、本の好きなだけの一般人の生活を当然のように歩んできました。まあ、そんなもんです。

私は子供の時、母に なんになりたい？ と聞かれた時、

ほんやさん

と答えておりました。今はその本屋さんにも成りそこねました。

グリーンゲールズのマシューとは赤毛のアンに出てくる、寡黙なお年寄りのことです。マシューは無口でよく働き、心優しく、アンの成長を誰よりも喜んでいる人でした。その マシュー が突然の心臓発作で亡くなります。働き続けてきて、自分が老いてゆくのを忘れていた、 アン、お前は私の誇りだ と言い残して逝ってしまいます。

国の基準で言えば、もうすぐ私も 前期高齢者 ということになります。ええ、確かに私は今でも現役で、若い時と同じだけ働いております。自分が年取ってきていることなんか、考えもしません。しかし鏡を見ると髪は薄くなり、頬や額に皺がより、それゆえ マシュー の言葉を思い出してしまいます。それででしょうか、私は毎日の仕事に追われ、未だ何も成し遂げていない、とってしまいます。かつて私にも、成し遂げたい何かがあったはずなのです。しかし気が付くと、そんなことは忘れてしまい、目の前の 仕事 に追いかけて 時 を潰しています。私の成し遂げたかったことは何だったのかさえ、忘れてしまっております。

以前、ほろほろと涙を流してしまった小説がありました。主人公の女性は
五十年前 私は いなかった 五十年後 私は もういない
と思い定めて、今の苦難を耐え忍びます。山本周五郎氏でありました。

世の中の一隅を照らす人が、尊い
と教えたのは、道元禅師でありました。

ふたりの桃源境 最後まで山で 最後まで夫婦で というドキュメントがありました。子供を育て、子供が巣立った後も最後まで夫婦で暮らしてゆくドキュメントでした。

何かを成し遂げるなんて、もうどっちでもいいことかもしれません。

重苦しいグリーンゲールズの マシュー は文章になりました。そして、結局本屋さんになりたかった子供のなれのはての文章になってしまいました。

先日車で移動中、NHKのFM放送を聴いておりますと、懐かしい曲が流れてきました。ニール・セダカ、ポール・アンカ、コニー・フランシス、他にも悲しき雨音・・・と言えば確か、カスケーズだったでしょうか、それにパット・ブーンの 砂に書いたラブ・レター、それからシルビー・バルタン。それらを聞いていると曲名、歌手の名前など次から次へと思い出します。私はリアルタイムで聞いてきました。それが今はオールディズですから、私がオールディズなんでしょうか。そうですねえ、 オールディズ 3丁目の夕日 は私達の時代ですから。

第一、ラジオも FM が出来て、音質が格段によくなりました。しかしそれも大分経ってからの事で、 オールナイト 日本 は真空管ラジオで聞きました。受験生のころです。そして、部屋を暗くし、電気を点けたり消したりすると、遠くの家の方が合図を返すなんてことが、受験生の中で喧伝されたりしましたが、私にはそんなこともありませんでした。受験生は独りで、味気ないものです。それは今もかわらぬことなんでしょうが、何故かこの時期のことは思い出しません。思い出したくないことを頭の中の奥隅に押し込んで、忘れた振りをしているのかもしれませんが。

さて、オールディズの話でした。私達は父の世代とは違ってアメリカに敵愾心は余りなく、むしろ憧れの国のように思っていたのではないのでしょうか。明るさ、自由、繁栄、それらがアメリカという国を飾っておりました。その国から流れてきた 洋楽 に、子供だった私達は魅了されていたと思います。ラジオもテレビも、洋楽とそれをカバーした日本人の歌ばかりでした。

しかし、そのアメリカが崩れる日がありました。アメリカからの初のテレビ中継がつながった日、ニュースは ケネディの暗殺 を伝えました。朝の七時前の事だったと思います。ただただ楽しみで、わくわくしながらテレビをつけ、アメリカからの中継を待っておりました。それが、アメリカという国の現実を伝えることになりました。その後は大量の情報が流れ込み、アメリカだけでなく、世界の現実を知ることにもなりました。

それからです、今はオールディズになりおおせた曲たちを忘れてしまいました。ですから、私は プレスリー を知りません。いきなりビートルズになりました。古き、良き時代のアメリカでありました。

アメリカという国は、何かというと国旗に頭を下げ、愛国心をアピールします。しかし元は沢山の人種、民族、他の国民だった人たちの寄せ集めです。文化も伝統も、神話さえも共通のものを持ってはいない若い国です。それが壮大な力を持って、二十世紀を支配してきました。そのアメリカに真の意味での ナショナリズム はあるのでしょうか。私達は今、アメリカという、歴史上の壮大な実験を見ていると私は思っています。

中国も、その成り立ちはよく似たものだと思います。ですから、その歴史は先代の文化の徹底的な破壊でありました。今中国に見るべき文学は、三国志などの史書に漢詩、金瓶梅、水滸伝、聊斎志異、西遊記ほどです。孫文氏の現れるのを待たなければ近代文学もありませんでした。その国家形態が今からどこへ向かうのか、これも壮大な実験だと思っています。

子供に、お父さんのエッセイってブログみたいといわれました。妻には、堅っ苦しくて読めないわ、もっとアハハって笑えるように書いたら と。また、父さんの書いたものは、座り直して正座して読まなきゃいけないから構えるわぁ と、子供にも同じようなことを言われました。元々無趣味な人間で、大して語るべき内容も持ち合わせておらず、第一お酒が全然飲めないのでバーなるものには一度も行った事がなく、これは学生時代喫茶店やら映画館に行くのは不良のすることと教えられたせいではないかと・・・。ところが大学生になり、監視されることがなくなると、北松江一今の松江温泉へ行く途中の、入ると いらっしゃいませー と声を掛けてくる、学生に人気の喫茶店に入り浸るほどお金もなかったのですが、時々行って、少年マガジンを読み耽った覚えがあります。そこはお父さんと娘さんがやっており、接客は娘さんの係りでした。そこへ、学校を卒業して数年後訪ねてみると、入って直ぐに矢張り いらっしゃいませー と同じ声が掛かります。黙って座り、同じように少年マガジンを取ってきて読み耽ります。水が置かれ、コーヒーを と告げ、ページを捲り、ふっと気になって顔を上げると、娘さんがまじまじと私を見ていました。私など、時々しか行かない、それもコーヒー一杯で漫画雑誌を何冊も読み耽る、目立たない厄介者でしたのに、覚えていたのでしょうか。そして彼女は嫁にも行かず、ここで父親と喫茶店をし続けていたのでしょうか。髪型こそ前と同じにしていますが、ちょっと老けてやつれて見えました。私はコーヒーを飲み、早々に逃げ出してしまいました。このお店の前が、かつて芥川賞の候補にもなった人のやってた古本屋でした。店は閉まっておりました。何か病気をしやめたと聞きました。もう戻れないところ、と知りました。

松江は豪雪地帯というほどではありませんが、よく雪の降る寒い所でした。この暖かい四国から行った私は、十分な防寒着を持っていなくて、ダスターコートといたたでしょうか、ペラペラした薄い生地、受験のとき間に合わせに買った、黒いコートが一枚切りでした。また、雪が降っても傘はそうそう差さなくていいものだとも思い込んでいたくらいですから、防寒対策なんか、親さえ解っていませんでした。しかし寒いのです。私は他の学生よりも贅沢に、コタツの上に石油ストーブを親から送ってもらいました。勿論灯油ですから、近くのガソリンスタンドから買うことになります。11月始めに大雪が降って震え上がり、一キロ余り先のスタンドまで買いに行ったことがありました。表のガラス戸を少し閉め忘れ、そこから扇形に雪が吹き込んでいた朝でした。

その年だったか、友人がコートを買うのに付きあわせられ、松江の町をうろうろ見て回りました。その頃はデパートか専門店しかなく、お金の無い学生はデパートなんか行けなくて、大売出しの張り紙をした専門店のショーウィンドウを覗くばかりでした。結局友人も気後れしたのか、帰郷したときに買うわあ という事になり、半日寒い思いをして自転車でうろうろしただけでした。勿論、私は買う積りなどなく、男二人が服屋の店先覗いて回るなんてかっこ悪いぞと言いながら、辛抱強く付き合いました。そんな時、・・・松江のどこだったでしょうか、川の向うの橋を渡った先に小さな店があり、友人は通りすぎたのですが、ひょっと目に付いたコートがありました。私は、マネキンが来たそのコートを横目で見、大売出し、半額の文字も見てしまいました。着るものとかおしゃれとかには全然関心のなかった

私が、その見たこともないデザインの、あったかそうで機能的に見えたコートが気になって仕方なくなったのでした。

翌日、私は意を決して張り紙で見た金額を胸に、その店に渡る橋を自転車で渡りました。そして、出てきた女の店員さんに、あのマネキンの着ているコートを見せてください とドキドキしながらいいました。えっ、あれは・・・と言います。その時気付いていれば、二十年以上の勘違いはなかったのです。そうは言いながら、店員さんはマネキンからコートを脱がせてくれました。淡いベージュのダッフルコートでした。少しウエストもしぼってあり、前を止めるのもボタンとかではなく、紐の輪に反対側の紐に付けた木の留め具を通して前を合わせるようになっておりました。そんなもの、見たこと

もありません。お洒落で、とても素敵に見えました。贈り物ですか？そう言ったと思います。いいえ、と言いながら、私はそれを試着してみました。着心地のいい、肩も落ちず、腕も楽に動きます。丈も袖の長さもぴったりで、私はフードを被ってみながら、買う決心をしました。店員さんも肩の辺りを手で押さえ、ちょっと戸惑いながらぴったりですねえと勧めます。多分売れ残りで、なんとか売りたいかったのでしょう。これ、ください。半額ながら、私には大金を払って、それを買いました。私はダッフルコートに入った紙袋を自転車の前かごに入れて、意気揚々と帰りました。そして雪の降った日、初めてそれを着て帰省しました。駅へ向かう途中友人に会いましたが、私の着ているものを見て、なんとなく反感を抱いているのに気付きました。男が服で、そんなに競い合うような気になるものなのでしょうか。私はこれが気に入っただけでしたのに。

親もちょっとびっくりしておりました。高かったんでえーとちょっと自慢しましたが、身の丈に丁度合ってて、よく似合うと言ってくれました。それから何年か、私はこれ一つを着て冬を過ごしました。京都、大阪、その他旅行にも、また東京で別の勉強のため四年ほど過ごしたときも、私の冬のコートはこれでした。

それを着なくなっただのは、帰郷して冬にコートを着なくて済むようになってからでした。どこへ行くのも車ですし、外を歩いてもほんの短時間ですから、コートなど必要なくなっただけです。そして、これが衣装缶から引っ張りだされることになったのは、娘がちょっと遠い学校に通うことになったからでした。なんか買ってやらないとねえと妻が言います。じゃ、あれだしてみたら、そう言って着せてみると、ちょっと大きめですが、よく似合っているんです。娘も、お父さんが着てたものだと聞いてびっくりしておりましたが、着心地も良いし、袖が少し長いだけで普通のダッフルコートよりスマートな作りをすっかり気に入って、学校へ通う五年間ずうっと着てゆきました。合わせて約二十年、いやそれ以上このコートは着られてきたのでした。さすがにそれだけになると、生地も擦り切れ気味になり、風合いが落ちてしまいました。しかし型崩れなんかはしておらず、最後まで着られました。そして、娘が学校を卒業するとき、そのコートは捨てることにしました。思い出のあるコートでした。そして、すてる時になって、私はとんでもないことに気付きました。このコートって女物？私はそんなことに気付きもせず、また気にとめて見ることもしませんでしたから、今日まで思いもしませんでした。それを買った当時、私は体重50キロ、身長170cmと本当になで肩のやせっぽちでした。私はコートを手に持って、腰が崩れるように座り込み、笑い転げました。そして、そういえばと当時の事を思い出しました。

そのコートはもうありません。コートを破棄してからも、もう二十年近くになります。娘は今黒いダッフルコートを着て、帰って来ております。

柴田トヨさんの本を読んでいます。詩集なんかは殆ど読んだことがなかったのですが、一頁一頁、大事に読んでいます。かつて買った、中原中也氏の詩集は、ソノレコードが付いていました。その付録に、誰だったでしょう、中也氏の詩を朗読したソノレコードが付いていたのです。ペラペラの赤いシートが回転して、とても安っぽい声が聞こえ、がっかりしました。その後、高見順氏の 死の淵より という詩集を読みましたが、十代だった未熟な人間に太刀打ちできる詩集ではなく、ただ文章を書くのは、いまの体力では無理なので、詩を書くことにした という文章だけを覚えていました。その文章から、私も詩は無理だ、私は散文人間だと思い込み、詩も作らず、読むこともしませんでした。それが、この文章を書き出す動機にもなったのですが、最初は他のサイトで俳句をやっておりました。詩よりももっと短い俳句なら、私の集中力も持つだろうというのが、その理由でした。しかし、やっぱり理屈っぽい私は散文人間でありました。

以前にも引用しましたが、柴田トヨさんは

私 辛いことが あったけれど 生きててよかった

あなたも くじけずに

と書いております。その言葉から、トヨさんの優しい声が聞こえそうな気がします。私もかく在りたい、そう思わせる言葉です。もう哲学も宗教も消し飛んでしまいます。息子に語りかけ、亡くなった夫に、母に語りかけ、今でも涙しながら生きてきた人の言葉はかくあって、かく生きたいとおもわせます。

もう一度生き直せるとしたらとかんがえます

昔に帰ることができるならと、妻が話しかけてきたことがありました。昔に帰ることが出来るのなら、何時のころに帰りたいかと聞きます。何時だろう・・・、そう振り返った途端、一瞬に間に自分の人生を振り返っておりました。よく走馬灯のようといわれますが、そんなものじゃありません。邯鄲の夢なんて悠長なことでもありません。一瞬で自分の今までを見てしまった思いでした。

あの時こうであったらとか、こうしておけばどうだったのだろうとの後悔の思いと一緒に思い出したこともありました。たぶんそんなことの方が多かったと思います。自分は全力を尽くしたか、努力を惜しまなかったか、怠け心に流れなかったか、そう思うと全てにそれが当てはまってしまいそうです。

今回の大河ドラマですっかり有名になってしまいました、梁塵秘抄の

あそびをせむとや うまれけむ

たわむれせむとや うまれけむ

の一節は、いつも私の脳裏にありました。もっとも

あそぶこどものこえきけば、わがみさへこそ

ゆるがるれ

の解釈は、外であそぶ子供の声を聞くと子供でなくなった自分も遊びたくて体がゆるぎ出す思いだと言われておりますが、私自身は 人は遊びをするために生まれてきたのだし、なにをどうやり過ごしても たわむれ ほどのこと。

世間はちろりに過ぐる ちろりちろり

憂きも一時 嬉しさも

思い覚ませば夢候よ

何ともなやなう何ともなやなう

うき世は風波の一葉よ

何しようぞくすんで

一期は夢よ ただ狂へ

こんな歌も脳裏に響いたりします。

ところが我が善通寺に生まれた弘法大師さまは、同じ遊べでも

迷いを捨てて大慈悲界に 遊べ と教えておられます。

話が遠くなりすぎました。しかし梁塵秘集、閑吟集は歴史に現れてこない 民 の声だと思えます。以前にも紹介しましたがご一読を。

しかし一生の中の、ここという転換点で自分はなにを選んだんだろうと思いました。選んだのですから、何かを捨てたのでしょう。そのときは何も思わずこれしかないと思いついて選び、捨てたものの事など振り返りもしませんでした。それが、妻の昔に帰れるならの一言で、それぞれのときに選んだものと捨ててきたものの全てが見えたように思いました。選んだ結果は今の自分ですから解ります。じゃ捨ててきたものはどうだったのでしょうか。そちらを選んでいたら、今の人生とは違ったものになっていた筈です。そしてその後の自分の人生も、なにか見えた気がしました。

誰を主人公にした小説だったか・・・確か、織田信長だったかと思いますが、彼の人、あの時はつい怒りに任せて、あのようには振舞ったが、もしあのときに帰れるならば、あんな酷いことはもう決してしないだろうといひます。それで、誰かが彼をその瞬間に帰してやると、彼の人には矢張り同じこと、馬引けえ と叫びます。なにか 芥川好み ですが、人は何かを選んでいるようにみえても、実は一つしか道はないのかもしれない。人は自分の生き方を生きて行くだけで、可能性などない、と言ひ切れなないかもしれませんが、自分で自分を縛っているのでしょうか。こうしていたら、仮定だけの話です。そして結果が今の自分です。

それでも一瞬、夢見ました。それこそ無数にあった転機で、違う方向を行つたときの自分を。まるで白昼夢です。宝くじで三億、いや一億当たたらと思つた途端、当たつた気になつて色々に想像してしまふようになります。回りが見えなくなつて、現実を忘れて、今の自分が自分ではなくなつていました。そして、その後は可能性だけの夢見心地でした。

豊臣秀吉の 難波のことは夢のまた夢 を教養のない駄作と人はいひますが、時の絶対権力者でも一生は夢でした。どうも、日本人の風土にある人生観に、脚を取られていひるのかもしれない。

私は妻にいいました。

子供が生まれたときに帰りたい

そういったとき、涙が流れました。一番幸せな時でした。

49才の折大病をし、迷惑をかける関係者に断わりをするため一人あちこち巡ってゆきました。全く独りでした。父の時は私がおりました。これも一人息子の勤めと思い、私は父に替わって回ってゆきました。しかし誰も替わってくれるものもない私は、自分で自分の後始末をつけなければなりません。一人車を走らせ、入院の日まで黙って働き、入院が決まると挨拶をして回り、黙ったまま入院しました。

その最後の挨拶に車を走らせていた時、祖母の葬られているお墓のある山の下側を通りかかると、もう何も考えられなくなっていた頭の中に不意に母が出てき、祖母に何かを訴えました。鎮まった姿でそれを聞いていた祖母が

＊＊ちゃんが病気・・・

病院はどこ

急いでゆかなくっちゃ

と立ち上がり、走るように私の入院する病院の方角へ向かいます。その後を母が泣きながら付いてゆきます。私は白昼夢を見ていました。すべるように宙を走る祖母は、巫女の装束を着ておりました。緋の袴に白足袋、白い鼻緒のぞうりが無音でひるがえります。その後を母が追います。祖母は昔口減らしに、ある宗教団体の巫女で愛媛から讃岐に出されていました。車の私の上に、祖母の手の御幣がかざされ、祝詞が唱えられます。御幣の先がちょんちょんと二回私の頭に触り、ざっざっと振られたと解りました。60キロそこそこで走っている車の前方の景色が、白くかすんでおりました。私の喉の奥から大量の唾液とともに大きな丸い肉球が上がってき、ぽこんとなんの苦しさもなく飛び出しました。私を見た、本当に体に感じた、しかし現実ではない 白昼夢 でした。その後わたしは10余年生き延びました。

その祖母が生前、何回目かの入院の時私に言って聞かせたことがあります。

年寄は小さな病気で入院なんかして、そのたんびに見舞い に来てもらって、その度に少しずついろんな人にお別れを言ってるんだよ

力づけようと笑い飛ばしもできず、聞いておりました。人工関節の手術をした膝から、ドレーンを伝って血が滴っておりました。

その祖母が脳梗塞で倒れたと連絡があったのは、朝の7時半ごろでした。夜中高松の大病院に、救急で入院したとの知らせでした。母と一緒に駆けつけると叔父や叔母もやってきており、押し黙ったり話したりしておりました。母や私が声を掛けるとつぶっていた目を押し開け、酸素マスクをした口元で、

＊＊ちゃん あんたは＊＊じいさんの 初孫で

どこに行くのも抱きまくってたんよ

**ちゃんがこんにちあるのも みな ご先祖さまの

おかげ だからご先祖様を敬い 大事にして

生きていかなければいけない

と私に言い残しました。

そして一週間ほどしてでしょうか、祖母が身罷ったと、付き添い続けていた母から知らせてきました。そして、葬儀の後、

わたしはもう役目がおわったんです

だからこんなこと せんといてください

呂律の回らない口でそういつて何度も点滴を引き抜き、酸素マスクを取ってしまったそうでした。私の祖母は、こんなにもすざましい覚悟を持った人でした。

ですからわたしは自分の大病に、思わず亡き祖母にすぎたのかもしれない。そして、こうありたと自分で思うことを 白昼 夢にして見たと思います。しかし私はなんとか生き延びました。父が身罷ったのと同じ病気でした。

父方の祖母が倒れたのはそんなことがあった2年あとでした。なんか歩きにくい、右手がしびれる、口が回りにくい、そういつて4畳半の部屋に寝ておりました。そうは言いながら、始めは手を借りてでも自分でトイレに行けておりました。ところが次第に歩けなくなり、 医者を上げる ことになりました。跡を取った叔父の判断でした。父の実家辺りでは、深い山の事ですから最期と思ったときだけ 医者をあげる ことをしておりました。医者は血圧計一つ下げて登ってきました。そして、入院させたいが、動かすと危険だ と頭を振り、帰って行きました。私は父に言われ、じょくそうマットを医療器械屋から買って持って上がりました。祖母はこれを死ぬまで、 **ちゃん が買ってくれたといい続けたそうです。

この祖母にも、やはり母が父の実家に泊まりこんで見続けました。

あんなに信心しても なんにもならん

お大師さんも助けてくれん

善通寺にくと、必ずおまいりすることを欠かさなかった祖母の言葉でした。祖母の時代、あのあたりでは赤子が早くによく亡くなってたせいもあったのしょう、出生届けもいい加減で、戸籍上は89歳、多分実際は92~3歳だったろうと父が言っていました。それだからといつて、なにがどうといつつもありません。一休禅師も死にとうない といつてゆきましたのですから。

父の実家は、雲が下にたなびく山の上にあります。ごろごろと雷が鳴っても、下の八幡様の辺りを雲が隠して、そこで稲光が走っています。今は知りませんが、昔は夏でもおおぶとんを着て寝ないと寒いぐらいでした。ですから、なんと蚊もおらず、蠅も見ません。ゴキブリも縁のないところでした。ところが最近、叔母がゴキブリを見たのと、とんでもなく珍しいものを見たように言って笑い転げておりました。しかし、蚊と蠅は今でも縁がないようです。

叔父が存命中は、盆はこちらも忙しいのでよくお彼岸に墓参りに行きました。その行く度に、家の様子が変わって行きました。思い立って初めて私達夫婦だけで山を上がった時、家の屋根が茅葺から瓦葺になっていました。室内も屋根の裏側が剥き出しでしたのに天井が張られ、囲炉裏もなくなってしまっていました。奥の間にはクーラーも付き、暖房は温風ヒーターに変わりました。よくテレビで古民家の紹介を見かけます。私はそれを見ません。あまりにも見慣れたものだからです。一年中囲炉裏を焚くのは茅葺屋根を守るための知恵だといいます。囲炉裏の自在鍵の便利さも、火にいぶされた竹の味わいも、柿渋を塗った引き戸の板の黒さ、大黒柱の色、座敷の畳を上げた下に出現する芋壺、谷から引いてくる湧き水、五右衛門風呂、そんなものはみな見慣れて知ってることばかりです。

庭から見る木々の先端に猛禽が見えます。時に道を猿が横切ります。人が捨てた煙草の吸殻を口に啜え、人のするとおりに膝の組み、プカーと吸って見せることまであるそうです。その猿が家の庭先の畑を荒らします。人間が電線を張った中で農作業をしなければなりません。小さな電線の檻の中にいるのは人と農産物、それを狙うのが野生の動物、これが山の暮らしです。去年亡くなった叔父は、このあたりでは一番若かったのです。ですから下のほうの家をいつも眺めて、時々見に行くことをしておりました。都会では 孤独死 と言ったものを 孤立死 と言い換えるようにしていますが、山の上ではそんなこと誰も取り立てて言わないだけで、よくある話です。

香川は うどんブーム で、高速料金が1000円の時は大変でした。今でも うどんブーム を煽ろうと うどん県 に、うどんタクシー と話題づくりをしています。映画 UDON では山の中で熊が出てくる場面がありましたが、お断りしておきます、香川県に熊はおりません。猪、猿、狸、ほか色々な野生動物は確かにいます。香川にはいません。しかし、剣山と高知県には月の輪熊が少数いるらしいです。さらに、狐はいません。それは弘法大師さんが、四国と本州に鉄の橋が架かったら帰って来てても良いといって、追放したからだそうです。なんでも弘法大師さまの話しにしてしまう四国らしい話です。

しかし、その UDON の熊の出てきた場面の、山の中のうどん屋さんには本当にあります。表の車の走る道路から看板に従って鉄道を越え、更に信じられないところに看板があるのを信じて車一台やっと通れる幅の竹林の中の道を山の上へあがってゆくと、カーブの先に車が止まり、なにやらそれらしい煙突の立った建物が見えます。うどんを食べるのはおまけで、うどん屋を探し出すことがメインのゲームのようなうどん屋さんです。かといって、うどんがまずいわけではありません。うどんをゆがくの薪を使うことで有名な名店です。うどんブームがおこる前の、私のブームの始まりの店でした。

私の愛読月刊誌 不動産ニュース** に善通寺の中古物件が載っておりました。どうしたものか、中讃地区、とりわけ善通寺は家の中古物件が出てきませんので、目を引きました。詳しく読んでみると土地が189坪、家は58坪とでかい。そして外観は塀だけですが、シャッターの付いたガレージと立派な銅葺き屋根の門が写っており、場所と言い外回りの構えと言い、一度見てみたいとつい思ってしまいました。しかし番地が解りません。不動産屋さんに関わるとうるさいことになることは経験済みでしたが、電話ならと訪ねてみますと、こちらが名乗らずとも番地を教えてくださいましたので、このこと出かけてゆきました。Google 地図を片手に。

行ってみると、相当迷ったのですがなんとか見つけれられました。確かに写真どおりの塀と門、ガレージでした。しかし案内人がいませんから、中を見ることはできません。外から伸び上がったり、遠くから眺めたりしておりましたが、ここだけの話しです、妻が通用門のかんぬきが外せるのを見つけましたので、図々しく、そっと入り込みました。平屋の二重屋根、その傍らがちょっと洋館作り風の、たぶん中二階か、今風に言うところのロフトのある建物がみえました。そして、びっくりするような前庭です。築山に腕を張った松と屏風のように立てた岩板、その前に池が掘ってあり、石の小橋まで架かっています。昭和48年築と聞いておりました。父が家を建てたのとほぼ同じ頃に立てられた家です。

その洋館風の建物の横を通り、裏に回ってみました。その時窓に映って見えたのは、鍋や薬缶、食器洗剤の影でした。たぶんなにか、なんでしょう、なにか急なことであっても、家の中はそのままに、不動産屋さん売却をいらいされたのではと想像されました。

裏に回ると、表側とはまた違い、少し貧相なつくりの平屋と物置が設えられておりました。さらに回り込み、表の方へ行くと、なんとそこにも石を突いた築山のある中庭がありました。年取って億劫になったのか、草が生え茂っておりました。そういえば、紫欄、洋蘭の鉢が沢山裏に集められていました。

家も古いし、築年が今の私の住んでいるのと変らないのだから見送りかなと、妻とは話しましたが、ただただこの土地の広さには圧倒されておりました。そして妻には言いませんでしたが、口とは裏腹に、なにか重いものが喉を降りてゆくような思いがありました。

それと同じ思いをしたことがあります。鬼無の矢張り中古住宅で、コンクリート造りの平屋住宅を見に行ったときでした。その家の間取り図を見ると、応接間でしょうか

、玄関ホールの先の洋間を通らなければ奥へ行けないようになっているのが気にかかりましたが、兎に角行ってみようとしてかけました。土地も広く、200坪ほどだったでしょうか。事前にその敷地内に、もう一軒、二階建てがあることも解っておりました。勿論それも込みで***万という値段でした。

その時は近くのスーパーに車を置き、地図を持って、歩いて捜しました。多分ここに行くのだろうと4m幅の道路を下がって行き、狭い交差点の先を見るとその家はありました。コンクリート壁に瓦をおいた塀、段を上がって二枚引戸の門、さらに道は下がり、コンクリートで地下車庫のように囲った背の低い車二台分のガレージが見えました。中に一台、古いマークIIが置かれております。ああ、まだ住んでるんだ、じゃそっと覗こう、と妻と門越しになかを覗きました。門から先に天然石の踏み石、その脇に背の低い石灯籠、作り込まれた皐月、そして薄汚れた白壁の建物が見えました。その家の横を通り、裏に回るとコンクリートの門柱が立っていて、何かファンシーグッズを扱っていると解る社名の社章がかかっておりました。しかし、この家は明らかに誰も住んでいません。それを確認して妻と表へ帰ると、車庫に車が帰ってき、バックで入れようとしておりました。少し古いですが、車種はジャガーでした。そして、背を丸め、頭を下げて降りてきたのは、頭頂部が薄くなった、カシミヤのベストを着た老人でした。彼は私達がこの家の品定めに来ているのが解ったらしいです。無言でじっと私を見詰め、少し苦衷を滲ませてさびしそうに門に入ってゆきました。後は、声も出ませんでした。妻と二人、スーパーに引き返し、もう二度と中古住宅は見に行かない、100年経ったら家も古民家だけど、2~30年なら、ただの古屋だよ、コンクリート造りはリフォームが出来ないんだと、胸の中とは違うなにか訳のわからないことを言いながら、一度に年取ってしまったような体の重さを感じておりました。

今回性懲りもなく中古住宅を身に行きましたが、家ってもう世を去り、家が残ると、その家は住んでた人のぬけがらになるんだと知りました。そこに住み、じっと一生を過ごしてしまうと、残された家は、その人のぬけがらなんです。妻は中古住宅は手垢が付いてるみたいで嫌だといいます。家はそんな軽いものではなく、住んでた人の時の積み重ねが積もり積もって残され、そこに主人を待って建っています。私はもう中古住宅は見に行きたくないと思っています。そして・・・私はどんなぬけがらを残しているのでしょうか。それを片付けるのは子供達です。それは頼むしかないのです。

中古の家を見てきました

私の愛読月刊誌 不動産ニュース** に善通寺の中古物件が載っておりました。どうしたものか、中讃地区、とりわけ善通寺は家の中古物件が出てきませんので、目を引きました。詳しく読んでみると土地が189坪、家は58坪とでかい。そして外観は塀だけですが、シャッターの付いたガレージと立派な銅葺き屋根の門が写っており、場所と言い外回りの構えと言い、一度見てみたいとつい思ってしまいました。しかし番地が解りません。不動産屋さんに関わるとうるさいことになることは経験済みでしたが、電話ならと訪ねてみますと、こちらが名乗らずとも番地を教えてくださいましたので、このこと出かけてゆきました。Google 地図を片手に。

行ってみると、相当迷ったのですがなんとか見つけれられました。確かに写真どおりの塀と門、ガレージでした。しかし案内人がいませんから、中を見ることはできません。外から伸び上がったり、遠くから眺めたりしておりましたが、ここだけの話しです、妻が通用門のかんぬきが外せるのを見つけましたので、図々しく、そっと入り込みました。平屋の二重屋根、その傍らがちょっと洋館作り風の、たぶん中二階か、今風に言うとロフトのある建物がみえました。そして、びっくりするような前庭です。築山に腕を張った松と屏風のように立てた岩板、その前に池が掘ってあり、石の小橋まで架かっています。昭和48年築と聞いておりました。父が家を建てたのとほぼ同じ頃に立てられた家です。

その洋館風の建物の横を通り、裏に回ってみました。その時窓に映って見えたのは、鍋や薬缶、食器洗剤の影でした。たぶんなにか、なんでしょう、なにか急なことであっても、家の中はそのままに、不動産屋さん売却をいらいされたのではと想像されました。

裏に回ると、表側とはまた違い、少し貧相なつくりの平屋と物置が設えられておりました。さらに回り込み、表の方へ行くと、なんとそこにも石を突いた築山のある中庭がありました。年取って億劫になったのか、草が生え茂っておりました。そういえば、紫欄、洋蘭の鉢が沢山裏に集められていました。

家も古いし、築年が今の私の住んでいるのと変らないのだから見送りかなと、妻とは話しましたが、ただただこの土地の広さには圧倒されておりました。そして妻には言いませんでしたが、口とは裏腹に、なにか重いものが喉を降りてゆくような思いがありました。

それと同じ思いをしたことがあります。鬼無の矢張り中古住宅で、コンクリート造りの平屋住宅を見に行ったときでした。その家の間取り図を見ると、応接間でしょうか

、玄関ホール先の洋間を通らなければ奥へ行けないようになっているのが気にかかりましたが、兎に角行ってみようとしてかけました。土地も広く、200坪ほどだったでしょうか。事前にその敷地内に、もう一軒、二階建てがあることも解っておりました。勿論それも込みで***万という値段でした。

その時は近くのスーパーに車を置き、地図を持って、歩いて捜しました。多分ここに行くのだろうと4m幅の道路を下がって行き、狭い交差点の先を見るとその家はありました。コンクリート壁に瓦をおいた塀、段を上がって二枚引戸の門、さらに道は下がり、コンクリートで地下車庫のように囲った背の低い車二台分のガレージが見えました。中に一台、古いマークIIが置かれております。ああ、まだ住んでるんだ、じゃそっと覗こう、と妻と門越しになかを覗きました。門から先に天然石の踏み石、その脇に背の低い石灯籠、作り込まれた臯月、そして薄汚れた白壁の建物が見えました。その家の横を通り、裏に回るとコンクリートの門柱が立っていて、何かファンシーグッズを扱っていると解る社名の社章がかかっておりました。しかし、この家は明らかに誰も住んでいません。それを確認して妻と表へ帰ると、車庫に車が帰ってき、バックで入れようとしておりました。少し古いですが、車種はジャガーでした。そして、背を丸め、頭を下げて降りてきたのは、頭頂部が薄くなった、カシミヤのベストを着た老人でした。彼は私達がこの家の品定めに来ているのが解ったらしいです。無言でじっと私を見詰め、少し苦衷を滲ませてさびしそうに門に入ってゆきました。後は、声も出ませんでした。妻と二人、スーパーに引き返し、もう二度と中古住宅は見に行かない、100年経ったら家も古民家だけど、2~30年なら、ただの古屋だよ、コンクリート造りはリフォームが出来ないんだと、胸の中とは違うなにか訳のわからないことを言いながら、一度に年取ってしまったような体の重さを感じておりました。

今回性懲りもなく中古住宅を身に行きましたが、家ってもう世を去り、家が残ると、その家は住んでた人のぬけがらになるんだと知りました。そこに住み、じっと一生を過ごしてしまうと、残された家は、その人のぬけがらなんです。妻は中古住宅は手垢が付いてるみたいで嫌だといいます。家はそんな軽いものではなく、住んでた人の時の積み重ねが積もり積もって残され、そこに主人を待って建っています。私はもう中古住宅は見に行きたくないと思っています。そして・・・私はどんなぬけがらを残しているのでしょうか。それを片付けるのは子供達です。それは頼むしかないのです。

もう直ぐ9月になろうというこの時期、朝の日の出の時刻も次第に遅くなり、5時も大分過ぎないと明るくなっては来なくなった。それでも我が家の犬は散歩をせがんでくる。こちら早く目が覚めているので、犬の言うままこの蒸し暑い中を散歩に出かける。ドアを開けると、少しはひんやりした空気を感じるが、寝苦しい夜をもたらしていた湿度は堪らない。

家から出て、大麻山を毎日見る。昔はそんな余裕もなかったので気付かなかったが、山に架かった空の様子はそれぞれに違っている。昨日のように湿度の低いときは山も全体がすっきりと見える。今日は頂上から東に薄く雲が、正に刷毛で引いたように架かっていた。ところが、日が上がりだして照りつけ始めると、たまらない暑さになる。夏になれば、夏の方が身にこたえる、冬は寒さが、と愚痴が多くなった。

犬は習慣の動物で、毎日同じことを繰り返さないと不安になるらしい。その意味では、私も毎日犬の生活だと思っている。その犬に引かれて、駅裏に向かう。踏み切りのある通りを、車の有無を慎重に確かめ、犬を引いてゆっくり渡る。一度犬を引いていた紐を強く引っ張って、道路の真ん中で首輪が外れたことがあったからだ。あわてふためいて、もう少しで犬も私も、車が止まってくれなかったら大怪我をしていた。

細い路地に入り、そろそろと紐を緩めて犬の気ままに歩かせる。道沿いのブロック塀に絡んだ蔦も、塀の焼け付く熱さの性か、葉先が枯れている。その向うの菊も、全て枯れてしまっている。だが冬にシルバー人材センターから来た男の人が一人で剪定していた無花果は、炎のように高く枝を張り、濃い目の緑に葉を茂らせていた。だが毎年実をつけているのを見たことがない。そしてその向うに、おじいさんの趣味だったのだろう、温室がある。今は中に植木鉢が整理されて置いてある。その配置は一向に変らない。何時だったか、その横の畑の畝が2筋、草を抜いて花が植えられていた。花は咲いた。だが、それを植えた人は、それを見ていない。今は花も枯れ、草がそれを生い茂って隠してしまっている。草が生えたまま放っておくのは恥ずかしい。草抜きが私のしごとですから。麦わら帽子を被って草取りをしていたおばあさん、かえっておいで。草が一杯ですよ。こんにちは、熱いですね。大変ですね。無理せんといってくださいね。なんとなく、そんな独り言が出てくる。

ちょっと坂を上がり、上に出る。向うに桜三姉妹が濃い緑の葉を茂らせている。去年の暑さでこの葉を沢山散らせて、今年咲くのかと思っていたが、例年通り綺麗に咲いて見せてくれた。有難いことだと、そんな風に思うようになったのは年取った性だとは思いたくない。経験を積んで、色々なことが解るようになったからだと言いたい。どう

違うのかといわれそうだが、この年になればわかることですよ。

駅を見ると、通勤客でも未だ早い時間帯の上に、日曜日だから人影はない。それでも

本日は日曜日のため、**時**分発の上り電車は運休ですのでお気をつけください。

というアナウンスが流れている。じっと駅の中を見ても、誰もいない。聞く人もいないのに、律儀なことだ。聞いてますよ、ご苦労さん。そう思いながら、私の日曜日の朝の散歩は帰ることになる。

柄にもなく私は絵が好きで、今玄関先に二枚の絵が架かっています。その二枚とも人が描いたもので、印刷とかシルクプリントのたぐいではありません。一枚は善通寺市美術館で偶然見かけたものでした。もう直ぐクリスマスという日、たまたま見たのが善通寺市の美術館の看板でした。日本画同好会の作品展とあります。アマチュアの日本画です。見に入ってる客も少なからうと、少し時間もあつたので一階の展示室に行きました。人は思ったより沢山いました。しかし中で作品を鑑賞しに来た人は、地味な服を着た老女と私だけ。後は同好会のメンバーと思われました。そんな人たちが少々声高に、仲間内の気安さで自分の作品の話とか、どこの風景を描いたものかとか、あそこの景色は絵になると言い合っております。ちょっと後悔しました。入らなければよかった、見に入ったら、異分子のようにじろじろ見られ、気兼ねなことだと思ったからです。その上、受付の老婦人に記帳しろと言われます。字を書くのは恥をかくことと思って、この年まで生きてきましたが、ここは覚悟を決めて、後悔をいや増しに増して、ましてや筆ペンでしたから、のた打ち回る筆先で住所と名前を書き込みました。恥ずかしさ倍増でした。しかしそこは年の功、何食わぬ顔で会場を見て回りました。大作もありました。丸亀城の大手門を描いたものです。その絵に、ひょっと気になる箇所がありました。門の上部がゆがんでいます。その部分に見入っていると、髪を総髪に撫で付け、大家然とした老人が、痩せた中年の男性メンバーに、先生あれはおかしいよと言われたけど、あそこはあんな風に曲がってたんだからしょうがないじゃないか、と大きな声で話しておりました。いやいや、やっぱりおかしいですよ、実物は実物、東山魁夷はどうなるんだ。対象物は対象物で、そこから美を昇華させるのが絵画じゃないの？と、ちょっと生意気なことを思いました。

他の会員の絵も飾られています。仁尾の海と空の雲、光が波に砕け、船が航跡を後に走っている情景が、淡い色調で描かれた絵には見入ってしまいました。朦朧体は横山大観でしようが、それとは違う諧調の春の絵だと思いました。

そんななか、何枚もある絵の奥にそっと控えているように見えた絵がありました。私はそれをずっと見過ごし、しかし目の端にその絵が残り、次々と見た後気になって見直しました。そしてもう一度その絵の前に立ち、さらにもう一度たちなおし、ふいに受付の、私に字を書けと強要した夫人に、失礼だが、あの絵を譲ってもらうわけにはいかないと申し出てしまいました。高いと買えないが、何とかならないかと、今思っても不躰な事だったと身の縮む思いですが、言ってしまいました。こんな思いを、義之淳之介は、きゃっと首が伸びる、と行ってたはずですが、やっぱり身は縮むでしょう。普段

、目立たぬように生きてきた私が、なぜかこのときは大胆な行動を取ってしまいました。小ぶりの、写真を入れるような額縁に入った絵は、素人くささが見て取れる花を描いたものでした。なんの物好きから譲れなんて言ったか解りません。途端、会場が静まり返りました。大家が黙ってしまいました。どの絵ですか。これです。私が絵の前まで行き、指差すと、老婦人も黙ってしまいました。多分、買いたいなんて申し出は初めての事だったのでしょう。夫人は迷っていました。

いま作者がいませんので。

だめですか。

・・・いや、聞いてみます。聞いてみますので連絡先を。

と言いますので、先ほど記帳した名前の下に電話番号を書き、お願いしますと出てしまいました。大慌てで出ると、外は寒空でした。

翌日、仕事場で仕事をしていると、電話がかかりました。お譲りします、ということで、金額も恐る恐る尋ねると、びっくりするほど小額でした。お願いします。一言で言ってしまいました。翌日だったか、持ってくるというのを、場所がわかりにくいところなので、美術館の駐車場だと約束しました。私も早めに行ったつもりでしたが、車を降りてきよろきよろしてると、何台か先の軽から、先日の老婦人とフードの付いたジャンパーを着た女性が大きな箱を持って降りてきました。あぁと声が出ました。やはり絵は人が出ます。あの絵の通りの、控えめで大人しそうな、ちょっと太り気味の女の人でした。世間擦れしてない仕草で頭を下げます。

すいません。

と名を名のり、図々しいお願いをしてしまいと挨拶しました。そして、この絵でしょうか、と箱の蓋を開けて見せてくれましたが、それこそ、あつと声が出ました。絵にではなく、額縁が所定の金額を越えそうな仕様のものだったからです。

いや、これでは申し訳ない。額縁代にもならない。

と、さらに上乘せして支払おうとすると、強く押しとどめられ、私はその日、自分へのクリスマスプレゼントを手に入れました。

もう一枚は、その絵の反対側に架かっています。地味な木彫を施した額に入った、老学者の手になる油絵です。この老学者は、農学者でしたから華々しく世間に知られたという人ではありません。それこそ百四才まで命を保ち、最晩年まで農学研究を続けた人でした。と言っても、私がお世話になった人ではなく、妻が大学で卒論の指導をもらった縁でした。そして大学卒業以来二十数年立って、その先生のそれまでの研究成果をまとめた書を刊行されたという新聞記事を偶然見つけ、お祝いの意味の果物を送っ

たのが更なるご縁のきっかけでした。先生はとても物静かなお人柄で、何よりもフィールドワークを大切にし、鳴門の海にほぼ腰まで浸かって、妻の卒論のテーマであった鮑の採取を共に行ってくれたそうです。鮑なんて専門外でしたのに、かえって楽しそうに箱眼鏡を使い、海を歩きまわっていたそうです。妻はそれを楽しそうに話します。よほど嬉しかったのでしょう。

先生は愛媛の出身で、北大に進み、長野の農学校教諭として赴任し、徳島にかえって農業高校の校長となり、大学教授として迎えられたそうです。明治生まれのお方ですから、私は直接お会いしたことはありませんが、そのお人柄は偲ばれます。

妻が、他の学生達と先生のお宅に行ったことがあったそうです。徳島市の郊外で、土地だけは広く、そこに沢山の木を植え、色々な柑橘類が実をつけていたそうです。学生達が行くと、奥様がお茶を出してくれ、そっと話されました。

私がこんな体ですから、子供が産めないで離婚してくれといったのですが、子供のいない夫婦であってもいいじゃないかと取り合ってくれないんです。

小さな体の上品な人で、長野での先生の下宿先の二番目のお嬢さんだったそうです。それも婚約が整ったのに、強引に徳島へ引っ張ってきたそうで、想像も出来ないロマンスでした。そのお方が当時結核を患っていらして、しばらくのち亡くなりました。一人になった先生は甥夫婦を養子に迎えたのですが、その後すぐに再婚されました。相手は奥様の看護をしていた看護婦さんでした。どうだったんでしょう、これは。先生はそれで幸せだったと思いますが、ご養子さんたちとは不仲になられたようです。後妻となられた人も、大阪に娘さんがいる人で、こちらも再婚でした。しかし、お礼状の代筆で、しました、と書くところを、仕舞した、と書かれる人でした。そして手紙の最後に、***内、と書き置かれます。***の家内という意味です。万年筆でしたが、見事な筆跡でした。

春には桃、秋には梨を送る、そんなことが何年続きましたか。その度に先生の近況が知らされてきます。最後は目も見えなくなり、ご不自由な思いをされていると書かれておりました。果物の一切れを口に運んであげると、ありがたいことだと、美味しそうに食べたと記されてきたこともありました。庭も歩けなくなり、自分も高齢になって世話が出来なくなったので、どこかの施設に預かってもらった、そんなお手紙をいただいたとき、なぜ会いに行かなかったのかと妻も悔やんでおりました。果物を食べている写真が送られてきて、残っております。

先生がお亡くなりになっての初盆に、妻と二人で徳島へ向かいました。夫人が遺品を整理された中から、今までのご好意に感謝してと、先生が描いた油絵を形見にお送りいただきました。先生は気に入った絵が描けると、やはりお気に入りの額に入れて飾っ

ていたそうです。絵は、その額に入って送られてきました。私達は、やっとそのお礼と弔問に出かけてゆきました。ところがカーナビに住所を入力してもはっきりしません。広い道を行ったり来たりしても、ゴールへ行く道がないのです。それに、妻も回りが変わってしまっており、どんなところだったか解りません。夏の暑い日、私は車を止め、歩いて探しました。そして思わぬ細い道の奥にそれらしいところを見つけ、車を降りて二人でそのお宅に入って行きました。私達は夫人がおいでるものと思っておりました。果樹園と菜園を中年の夫婦とおぼしき人達が手入れしておりました。

こちらは**先生のお宅でしょうか。

そう声を掛けるまで、この闖入者は何者？という目で警戒されておりました。

はい、・・・そうですが・・・。

明らかに驚いています。私が事情を話し、お参りさせていただきに来たと告げました。

すると、それを聞いている二人に動揺が見てとれました。女性のほうが男性の方に、

鍵を持って来るから、待っててもらって。

と、果樹園の向うに急ぎ足で向かいました。男性が私達を手前の家に案内してくれます。平屋の家の玄関の前まで引き返し、私達は待ちました。鍵が来て、戸が開けられ、中にいざなわれます。コンクリートの土間に入って上がりかまちから座敷に入ると、表だけでなく裏も雨戸が立てこめてありました。慌ててあけようしても一枚開けられません。雨戸の開いたところから光が差して仏壇が見えました。部屋には陽に焼けた畳以外何もありません。男性が、ちょっとと言って出て行きました。

こんなに狭かったのだろうか。

と妻が言います。

暗いし、何も置いてないから、そう見えるんだと思うよ。

そういいながら部屋を出、他のお部屋ものぞいてみました。

お父さん、よしなさい。

隣は台所で、お風呂が続いております。その向う、玄関の隣がトイレで、先生と奥様が日向ぼっこをしていた広縁が見えます。家はそれだけ、と私は見て取りました。

もう帰ろうか。

部屋に帰り、妻に言いました。妻もさびしそうにうなづいています。その後、お茶を持ってきてくれたお二人と少し話し、夫人の消息と住所を尋ねましたが、知らないという答えでした。

あの人たちを責める気など、微塵もありません。私は、帰る車の中で泣く妻に、
なんて見事な、

と言いました。私は気が付きました。あの古くてもきちんと片付けられ、そこに何一つ残してなかった家の姿に、先生と夫人の見事な身の処し方を見たと思ったからです。なさぬ仲の人たちへの、なにか意趣があつてそうしたなんて、とても思えない身の処し方でした。のちに、先生の手元にあつた新渡戸稲造氏の墨蹟は、先生出身の北大に寄贈されておりましたが、その寄贈式に着物を着て背筋を伸ばし、礼をする夫人の姿がありました。そんな晴れがましいことが、この人にあつてもいいじゃありませんか。先生はきっと、やさしさでこの人と再婚したのです。もう年齢を重ね、看護婦を続けるのが無理になった婦人でしたが、家政婦を雇った積りで、という雇い主の医師の言葉など、先生の耳には聞こえていなかったはずです。そして、遺品のうち、妻に託された絵は、あなたなら大切にしてくれると思いますとのメッセージが書かれておりました。書籍は徳島県立図書館と農業高校、大学へ整理されて、これも寄贈されています。こんなことは夫人では無理ですから、先生が生前整理して委託されていたと思います。そして、新渡戸稲造氏の墨蹟もその意志に従つてのことだつたと思います。夫人は先生が亡くなって3ヶ月、四十九日を済ませると、再婚して家に入ってきたときと同じように、風呂敷包み一つを抱いて出て行かれたそうです。納骨は姓を継がれた養子さんに託し、私は同じ墓には入れぬ身ですから、と言ひ、お世話になりました、と頭を下げて大阪へ去られました。そのとき、行く先は告げられませんでした。

後世を頼む子もないお二人は、何もかもを自分で整理し、片付けて、二人が生きた痕跡すら残しませんでした。世の片隅にこんなお二人がいたことを私は覚えておこうと思っています。絵を入れた額の中には、夫人が同封された先生の叙勲された時の新聞記事と訃報の記事の切り抜き、そして夫人が妻に絵を託しますと書かれた文と一緒に入れています。

補追

先生は1905年の生まれ、2010年2月19日に亡くなりました。

再婚は、先生が70歳を超えてからでした。

2010年に新渡戸稲造の墨蹟が寄贈されています。

ジュリーロンドンをご存知ですか

若き ソフィア ローレン が野性的な美しさだった 島の女 Boy on a Dolphin って映画をおぼえていますか。その映画のテーマ曲を歌った、あの囁くような、完成された大人の女性の歌声が、ジュリー ロンドン でした。日本ではあまり知られていない、地味な女性ジャズボーカリストですが、学生時代、ほとんど憧れに近いジャズシンガーでした。今はすっかり忘れていました。しかし、他に煩わされず、自分の時間を自分で使えるときになると、こうも昔を振り返り、不意にフラッシュの瞬きのようなひらめきをもって、こんな懐かしい憧れを思い出したりします。忘れていたのにと、かえって思い出したじぶんにあきれます。こんなことを繰り返してたら、昔のことはよく覚えてるんだからといわれそうです。

若い時はお金もありませんから、気に入った歌手など深く追いかけるなんてできません。ですから、いるかに乗った少年 を歌った歌手が誰だったかも当時はわかりませんでしたし、調べる手立てもありませんでした。それが、NHKのFM放送で映画音楽として偶然聞き直すきっかけがあり、またジュリー ロンドンの名も知ることができました。かといって、田舎のレコード屋にそんなレコードがあるわけもなし、気に止めておく程度で忘れました。そして、田舎の本屋でスイングジャーナルでしたか、パラパラとめくったグラビアでこの人の写真を見かけました。ジュリー ロンドンは女優さんもやっていたと思いますが、それだけに美貌でした。そして、その写真を見た時もきれいなひとだなあと思っただけで、ジュリーロンドンの名前とイルカに乗った少年の曲が結びつかず、バラバラに、つまり別個の事として当分意識されて私の記憶に残っていたのでした。それを結び付けてくれたのがジャズ好きの友人で、山陰の小京都と言われた地方都市の、JBLのスピーカーを持ったジャズ喫茶へ連れて行ってくれた時でした。何かリクエストと店員が聞いてくれます。コーヒー一杯で一曲頼めることになってたのでした。二曲目からは一回100円取られます。ちょっと気どりも有りました。通ぶってみたい気がしたのですが、そんな知識もあるはずがなく、ポロリと出たのが、このジュリー ロンドンでした。曲は？と聞かれます。もちろんイルカに乗った少年 と答えましたが、あいにくでした。それで、お任せで聞かせてくださいとなって掛かったのが、ミスティ でした。カウンターの前にレコードジャケットが置かれます。それを見て、三つのものが一度に結びつきました。あのメロディと歌声、歌手の名前、スイングジャーナルのグラビアの写真。一瞬の衝撃でした。

こんなことがあったからと言って、懸命にレコードなりを買ったかということ、そんなこともありませんでした。ステレオも持ってない貧乏学生でしたから。いま、それを思い出す一瞬がありました。あの時の青臭い憧れも一緒に、思い出すのです。若い、二十歳過ぎの自分自身の事も一緒にです。

雛祭

この香川ではこの時期宇多津の雛祭りとか、引田の雛祭りが喧伝されます。徳島の勝山の雛祭りに習ったのでしょうか。ほかにも掬月亭のひなまつりとか讃州井筒屋敷のひなまつりなど、地域おこしに雛祭りはよく催されます。何度か私も出かけてみました。宇多津は二度、井筒屋敷も二度。掬月亭は栗林公園のなかにあり、一昨年まで商工奨励館で民芸品のお雛様を集めておりましたが、いつのまにかそれがおわって、掬月亭でほんの二体おいてるだけになり、去年は詰まらないことでした。

今日の地方ニュースで、高松天満屋が閉店と伝えておりました。宇多津VIVREも閉店しました。そんな沈んでゆく町をもう一度活性化できるのであれば、おひなさまの祭もいいのじゃないかと思って二度出かけ、赤く色づいた日本酒を町屋の通りの造り酒屋で買い求めたことがありました。若いお嬢さんが一生懸命売ってました。そこのお嬢さんだということでした。いや、直接聞いたわけではありません。そこまでなれなれしくはできませんから。宇多津の雛祭りのニュースで見かけただけです。若い人が一生懸命なのはさすがしく見えます。でも、私は酒が飲めません。全く一滴も飲めない体質なのです。飲むと背中一面ジンマシンが出ます。それでも妻はいける口なので買ってやりました。甘めの、香りのいい酒だとのことでした。またまた、飲んべになってしまった娘もほめ、その娘婿の大酒飲みがちょっと目を離れたすきに、それこそあつという間に一本全部開けてしまっていました。惜しいとか思ったりはしませんが、もうすこし味わってと言いたかったところです。楽しみに買って、じっとしまっておいて、帰省したから自慢して出してきたのですから。いい酒でした。飲みやすかったです。甘い酒でしたがおいしかったです。お父さん、またお願いします。とおねがいされてしまいました。しかし、宇多津のひなまつりに今年はいきません。宇多津の塩で栄えた町並みと、すっかり小ぶりに見える六角館の西洋造りの館、松の枝振り、越高壁の塀のなかの玄関の暗さ、それはいいのですが、もうシャッター街はいいのです。寂れた八百屋もタバコ屋も、豪勢な、かつてさかんだったと思わせる屋敷の中内の古びた細長い顔をしたお内裏様にお姫様、それを囲った御殿飾りも、ああ昔の事と思わせられます。これが終わるとまた何も変わらない日常が戻ってくるとわかっています。解決策のない日常が覆いかぶさります。造り酒屋のお嬢さん、それでも頑張ると言っておきたい。だから、今年も行かないのです。

これも私の新しもの好きな父の話になります。いつ頃だったかは覚えていませんが、奇妙なものを父が買い込んできました。表題のスーパーカブではありません。原付自転車です。スーパーカブも原付自転車ではありますが、それは後の事で、父が得意そうに買い込んできたのは、まさに自転車に2サイクルエンジンをくくりつけた自転車でありました。そのころオートバイなんてものはみたこともありませんでしたから、自転車に何かくっ付いているのが不恰好でおかしくもありました。

この原付自転車、エンジンをかけるのに、懸命にペダルをこぎます。それも相当勢いよく漕いで、搦んでいたレバーを離すとエンジンが回され、バリバリバリと回りだします。多分そんなことだったと思うのですが、まだ小学校低学年だった時のことで記憶が定かではありません。そんな原付自転車を、私は狙ってました。父のしていることを十分に観察し、あれならエンジンをかけることが出来ると、わたしは確信しておりました。だから、親のいない昼間、学校から帰ってくると玄関先からその原付自転車を、重くて大きいのも構わず、引っ張り出しました。倒れそうになるのを何とか持ちこたえ、自転車のスタンドを二台を引っ張って立て、じっと見つめます。かけてみるんです。座席にまたがるのも大変で、高くてそれだけで自転車が倒れそうになります。それでもやっと座席に座り、前を見るとさすがに高くて垣根の向こうまで見えたのを覚えています。それから気持ちを固めて、ペダルを足で探ります。私の短い脚では、ペダルが上のほうにいるときだけ回せる状態でした。それでも回してみます。前半分を足で回し、後ろに帰ってくるのを足で追いかけ、力が入るところだけ回します。何度か回し、意を決してレバーを直結にしました。足に反発が帰ってきたように思います。パスっといって跳ね返ります。そこで考えました。サドルからお尻を外し、立漕ぎの要領でペダルを踏めばいいんだと思ったわけです。それをやってみます。空転する間は軽くまわります。思いっきり回転を速め、レバーを離して立漕ぎになり、力いっぱい踏み込みます。そうすると回ったんです。エンジンが掛かりました。大きな音を立て、勢いよく回ります。うるさいんです。すると、隣家のおじいさんが眼を三角にして出てきました。怒っていたのでしょうか。しかし音の主が子供とわかると、じっと見てぷいっと引っ込んでしまいました。それが何故かはわかりません。わたしはそれで後ろめたくなり、よじ登った自転車から降りて、また懸命に原付自転車を玄関先に引っ張り込みました。このことは親は知らないはずですが。聞いてもおりませんが。

この原付は非力で、平らな道路はそれなりに走りますが、ちょっと坂になっていると途端に減速します。ましてや人をのせたりしてれば、止まりそうにもなります。じゃあどうするかというと、ペダルを踏むのです。ペダルで漕いで上がります。父に原付の後ろに乗せてもらい、これを経験しました。得意絶頂の父が何か苛立ち、不機嫌になります。今思うと、あまりの非力さに怒ってたのでしょうか。母に、原付の自慢を聞かせていたものが、手のひらを返してののっていましたから。ほどなく、それは消えてしまいました。どうなったか、母に訊いてみましたが、忘れていました。そうやったかなあ、そんなもんあったかなあ。まあそれぐらいの期間しか我が家にはありませんでした。

それやこれやしていると、今度はスーパーカブを買ってきました。じつはこれも原付とほぼ変わらない扱いでしたが、まあ父の新しいものの好きは行き着くところまで行きます。この後ベンリー125へと向かいます。

カブは見た目にかっこよかったです。今見ると配達用の足ほどにしか見えませんが、それはあとから付け加えられた印象からではないかと思います。新聞配達、郵便さん、出前の人、みんなこれを使ってましたから。しかし、父がこれを買って来た時は町にもそう見かけませんでしたので、先入観なしで見られましたから、子供心にはカッコよく見えました。あのブルーの車体カバーと風よけが良かったのです。

しかし父はこれを家に置きっぱなしでした。通勤に使うとか、買い物に追ってゆくとかして多りませんでした。何故だかわかりません。ですから、つい原付の時と同じように悪戯し宅で外に押し出すこともできました。今度は家の奥の小屋に置いてありましたから、それをまた玄関先まで押し出しました。やはり子供ですので大きくて重かったです。キーはチャーンと持ってきました。当時のカブにセルモーターはついてませんから、キーをひねり、キックペダルのバーを横に起こし、力をこめ、体重をいっぱいに乗せ、押し下げます。グルグルっと音はします。冷えたエンジンはそう簡単にはかかりません。二度三度蹴ってもかからず、アクセルグリップを捻り回します。確か父がそうしてたと思ったからです。体重ののせ方が悪いのか、キーの回し方が違うのかと思案し、それもいじくり、再度そしてもう一度試みると、何の間違いか、小学生の力でエンジンが掛かりました。今思えば、相当ガソリンを吸い込んでたのでしょう、マフラーから真っ白な排気ガスがもうもうと出ました。アクセルグリップを回せばよかったのでしょうが、もう怖くなり、キーを回してエンジンを止め、また懸命に倉庫へ返しました。男の子ってこんな悪戯はするもんです。というのはいいわけでしょうか。そして、このカブも、どう使ったという覚えもなく、家からなくなりました。原付ですから二人乗りは出来ません。それゆえか、後ろに乗せてもらった記憶もありません。そのまま無くなってしまいました。

テレビが来た時

戦後の昭和を語る資格が、我々にはあるはずです。私たちがまるっきり生きてきた時代だからです。私達団塊の世代は、まさに昭和そのものだと思います。平成は知っています。あの小淵氏が、記者会見で平成の書を掲げ、年号は へいせい でありますといったのも覚えています。それさえ26年を数えました。しかし今年は昭和89年と考えたほうが、私には飲み込みやすいのです。わたしたちの子供は昭和の生まれですが、その青春時代を平成で過ごしています。下の子が大学に進学したのは平成10年代の始めだったことを思えば、もう昭和の子とはいえますまい。

その子らが大学に行くとき、私たちはさもそれが当然と思って、テレビ、ビデオ、電話、冷蔵庫、ベッド等をもたせました。じゃ、自分はどうかだったかというと、机は座り机でありましたし、布団も一重ね、そしてちょっと贅沢にトランジスタラジオを持たせてくれました。同宿の下宿人たちもほぼ同じでしたから、我々の時代はこんなもんだったんでしょう。しかし私たちが自分の子供に用意したものは何だったんでしょう。嫁に行くみたいだと言ってやりました。着るものは上から下まで、寝具も春夏の全部に間に合うように。電話まで申し込んで、高い設置料をはらいました。もちろんビデオ付きのテレビを買ってもたせました。ゲーム好きの息子でしたから。ちょっと大型画面のテレビを買ってやった覚えがあります。そんなことをしても、彼らにとっては当たり前のことだったでしょう。大学へ行くと言っても、一人暮らしではありますが、それでも家に居るときの生活の延長としか思っていませんから、テレビだって在って当然、電話もあって当然と思っていたと思います。そのうえ、ねだられてわたしのMACさえ持っていかれました。しかたありません。下の子にも同じことをしてやりました。そんな彼らですから、テレビが初めて家に来た時の興奮や嬉しさなんか、解らないと思います。

私もねだってねだって、テレビを買ってもらいました。わたしも親ばかなら、私の親も親ばかです。そのころテレビは高価でした。たぶん親の給料の3か月分ぐらいだったと思います。支払いは月賦です。いまならローンというのでしょうか。なにやら沢山の書類を書き、あとで本籍地まで聞き直されました。よく街頭のテレビがプロレスをやっているのに群がるシーンがでてきましたが、テレビはそれほど新しいものでした。箱から声が出てくる、と驚いたのがラジオ、絵と声が出てくるのがテレビで、家に居て映画が見られます。ご飯を食べながらスーパーマンが見られます。白馬童子、ハリマオ、月光仮面、鉄腕アトム。早明期のテレビには、それまでにないヒーローであふれました。映画の鞍馬天狗ではなかったのです。白いマフラーをなびかせて、本田のN125でしたかに乗って走ります。近所中で一番にテレビを入れた我が家は、夕方から悪ガキどもが座り込んで帰りません。夕飯さえまともに食べられない事になりました。ただ私には、それまでいじめられていた悪ガキが私を避けるようになり、いじめられなくなったという良いことがありました。

このテレビに限らず、当時は三種の神器というのが出てきました。テレビ、洗濯機、冷蔵庫の3つでした。これらで私たちに生活は飛躍しました。炊飯器は、ごはん焚きを私の仕事にしました。内釜にコメを入れてとぎます。目盛りまで水を張り、炊飯器に入れて、内釜と外釜の狭い

隙間に、カップのメモリ分の水を入れます。蓋をし、スイッチを押し下げると炊き上がればポンとスイッチが跳ね上がります。バイメタルという新しい素材がそれを可能にしたというのが、新しい知識でした。

私たちにとっての、この最初の衝撃はテレビでした。しかしその以前の人にとっては何だったでしょう。ラジオ？わかりません。しかし技術革新がもたらす新しいものが私たちの生活を変えます。最近びっくりさせられたものと言えばスマートフォンとタブレット、その前はマイコン、そのまえは……。それぞれの世代でも違うとは思いますが。生まれた時からそばにあるものにはびっくりしませんから。じゃ、これから何が生まれてくるんでしょう。たのしみです。

ここからさきは、表題と趣旨は異なるかもしれませんが、これも昭和史です。あの日米テレビ宇宙中継がありました。調べてみると昭和38年の事で、テレビ自身はまだ白黒だったと思います。朝7時前、アメリカから画像が送られてくると楽しみに待っていました。そして送られてきた第一報がケネディ暗殺でありました。衝撃でした。撃たれて前に倒れこむ画像が流れたとおもいます。私がまだ中学生の時でした。

いまオバマ大統領が訪日しております。あの大統領専用車両で移動しています。確か重量が13トン、戦車並みの頑丈さと聞きました。そして在日大使は娘さんのキャロライン・ケネディさん。今夜のニュースを見ながら、あの国は大統領を暗殺する国なんだと思い返しました。新しいものはなんでもアメリカからやってきました。そんな国なのに暗殺のある国なのです。テロと大統領暗殺は違うと思います。オバマ氏は暗殺を恐れて、あの専用車を日本まで運んで身を守っています。その横で日本人が携帯を構え、アイドルを迎えたように熱狂し、うれしそうに写真を撮っています。たぶん日本は世界一安全な国なんです。

善通寺の駅を出ると、昔ラーメンのチェーン店があり、電光看板で店名を明々と浮かび上がらせておりました。そのラーメン店の入り口の横の狭い階段を上がると、駅の正面が見える喫茶店がありました。今は考え込まないと、この善通寺に喫茶店がどこにあるのか、何軒あるのか、急には思い浮かびません。総本山善通寺の南大門前にあるあの店も、たしか喫茶店だと思うのですが、本当？と考えてしまいます。赤いネオンの看板があり、あかっちゃけた板壁がレトロっぽい雰囲気たっぷりで、あまりの古さにマニアック過ぎて、物好きな私も入ったことがありません。同じ軒先に骨董品屋さんが大皿や陶器の人形を出しています。そんな大皿の価値など私に解るはずもなく、そこもただ眺めて通るばかりです。

むかし、本郷通りといったたところにカリキュダムという喫茶店もありました。以前紹介したかもしれませんが、かつての善通寺町郵便局で、明治三十三年建築の旧善通寺町役場だったところが喫茶店になっておりました。ここは惜しくも、最近取り壊されたこと書いた記憶があります。

もちろん善通寺は田園文化都市を標榜しているぐらいですから、昔から学生の多いところでした。それゆえ、四国学院の前あたりは喫茶店は何軒かありました。そうです、四軒思い浮かびます。四国学院正門真正面の、おばちゃんが一人でやってる店、薄暗くて汚れた感じを演出していた、パイオニヤの大きなスッピーかをでーんと据えていた

634、そしてもう市民会館のほうにまで離れたところになってしまいうけれど、花きゃべつ、それから路地をはいってロダン。いやまだありました、郵便局まで行くとその前に、旅館がビジネスホテルになったところが一階をきっさにしておりました。そして最近、市役所裏に偕行社が耐震補強をかねて改築され、上品な喫茶が併設されました。

しかし最近まで私は郊外の喫茶店へ車で出向いたりしておりました。国道11号線沿いの三軒の店、319号線のほうの1軒、多度津に寄って1軒、・・・そう思い返すとこの年になって、なんで喫茶店へ行ってたんでしょ。いまの若い人にはスタバが当たり前でなんの抵抗もない店の形態らしいというのにです。善通寺の町中にディアというイタリアンの店の出してる、スタバ方式の喫茶があります。店に入るとまずレジの前で頭の上のメニュー表から注文するものを一つ一つ選び、口頭で伝え、先ず代金を支払います。ショッピングセンターなどでしってはいるものの、この方式にはどうも馴染めない、というのが我々世代の正直な感想です。それをこの善通寺の町の真ん中であることになるとはおもっていませんでした。いやいいんです。時代の波ですから。これが

スマートでカッコよく、何も抵抗のないのが今日の若い人ですから。・・・、しかし、なにか効率だけの味気なさに違和感を感じるのは、私だけでしょうか。ましてやセルフで、トレーに乗せられたコーヒー、それもプラスチックの蓋をかぶせた紙コップ入りのコーヒーを自分で取りに行き行って美味しく飲むことは出来ないですよ。事実まずいし。だから私は、缶コーヒーで辛抱してもスタバには行かない。

さて、お断りしておきますが、これはショッピングセンターのコーヒーショップの話。京町のディアの話ではありません。スタバ方式で注文して、席について待っていると軽く二杯分のコーヒーのはいった小型の魔法瓶とミルクの乗ったトレー、それと今日はモーニングを頼んだのでゆで卵とサラダ、果物のトレーが別に来ました。魔法瓶はコーヒーが冷めないようにとの心遣いでしょう。最初すこし気分を害してたのは事実です。しかし後の事できげんが直りました。年取ると精神に柔軟性がなくなって来るんだ、時代遅れだと妻に批判され、そっちの方が気に障りました。

しかし、私達夫婦が朝喫茶店に行くのはモーニングがめあてです。仕事をしてるときは、日曜日ぐらいゆっくりしたいと出かけました。いつもどこでも食パン、サラダ、果物、コーヒー。朝から漫画や週刊誌を見ながら時間を過ごします。すると、日曜日なのに一人暮らしの高齢者が集まり、なにか仲間内の話をしながらモーニングを食べています。私達が一番若輩とわかります。皆退職した人たちばかりなのでしょう。喫茶店はお年寄りの社交クラブになってました。若い人などは行ってきません。先日私達もこの喫茶店モーニングにデビューいたしました。馴染みの店、妻が若い時、子供のピアノの発表会の集まりに入っていた店。子供が出て行ったあと、朝やって来てた店。そこへ仕事を辞めての喫茶店デビューです。

クリスマスケーキ カレー ホットケーキ

まだ幼かったころ、それでも母の勤め先に御用聞きに来る店へ早々と、それこそ12月になるうかどうかの頃から、こっそりクリスマスケーキを頼んでくれてました。子供に食べさせたい一心からでした。もちろん母の世代にクリスマスなんか縁があったわけではなく、知りもしなかった目新しい行事であったとおもいます。それでも商店街にはジングルベルが鳴り響き、クリスマスをあおります。クリスマスにはサンタさんがプレゼントをもってきてくれる、だからいい子にしてなくちゃいけない、プレゼントは靴下に入れてくれる、そんな知識を私はいつ知ったのでしょうか。たぶん幼稚園の時には知っていたように思います。それというのも、サンタが父であったことを知り、夢破れたのもその頃でしたから。

当時、サンタはいるかいないかは、子供の中で大論争でした。そんななかに、サンタを押し入れの中に閉じ込めたと言いつ張った男の子がおりました。それなら、是非にも見せてくれと頼むと、なぜか明確な答えは帰って来ず、私も強く言い続けられず終わります。そして翌年も彼は子供たちの中で、夜中にやってきたサンタを押し入れに閉じ込めたと言いつ張ります。それなら僕にもサンタをみせてくれと、前回と同じやり取りを繰り返して、なんだかんだとごまかさされ、それは何故かと考えました。そして、そのことについて、母に訊いた覚えがあります。確かに尋ねはしたのですが、どんな答えが返ってきたかは覚えていません。ただ、判然としない、納得のいかない答えだったという感じは覚えています。そして、ある年から、もうそんな疑問は持たなくなりました。

その次は自分の番でした。12月になると、スーパーだのテレビニュースにクリスマスソングがかまびすしく流れます。その時期に、子供に何が欲しいか探りを入れます。その当時、ステレオラジカセが流行って、子供もそれをほしがっておりました。じゃ、成績が良ければ、サンタさんが持ってきてくれるんじゃないかと、つい口を滑らせてしまいました。それが困ったことを引き起こしました。ラジカセを持ってきてくれるということではなく、成績がということからです。クリスマスの晩、上の部屋のお兄ちゃんのところへ持ってあがります。ついで下の部屋の妹のところへ持ってゆきます。まあ、兄が頑張って成績を上げたことは確かでした。しかし、小学生低学年の妹は何で判断していいのかわかりませんし、もともと成績の良し悪しでラジカセをサンタさんが持ってくることになるはずもないと思ってましたので、兄と機種こそ変えてはありましたが枕元に、同様に置きました。

あさ、階段が鳴り響くほどに音がして、兄がラジカセの大きな包みを持っておりてきました。よほどうれしかったのだと思います。サンタさんがサンタさんがと連呼しておりました。急ぎ包み紙を引き破き、箱から中身を出してました。そこへ妹も大きな紙包みを胸に抱えて起きてきました。やったあ、ラジカセだあが妹の第一声でした。途端に、私にあまり口答えしたことの無い息子が、なんで？なんで？を繰り返します。自分は頑張って成果を上げた、妹は何もしてないのにラジカセをもらう、なんで？というのです。ああ、そこまでかんがえなかった私は後悔しました、やはり、兄の気持ちを考えてやるべきでした。子供可愛さのあまり、どちらも甘やかせてしまった、考えが浅はかだった、と今でも思います。それはサンタさんが、両方とも頑張った

と思ったからだと思うよと、苦しい言い訳をするしかありませんでした。それからどうなったかを思い出さないのですが、いつの間にか子供たちにクリスマスプレゼントは直接渡すようになっていました。サンタがクリスマスにプレゼントを持ってくる、そんな夢を、今度は孫が見るのでしょうか、何時の年まで信じていてくれるのでしょうか。しかし、これも戦後の一ページだと思います。

カレーは衝撃的な味でありました。一時期、ごちそうと言えどカレーでありました。牛肉を炒め、ジャガイモを投入し、玉ねぎで甘みとうまみを出す。最近でこそ、まず玉ねぎを色が付くほど十分に炒め、と言いますが、はじめてカレーが我が家に登場して以来、玉ねぎなんぞはざっと炒め、すぐさま牛肉を投入し、これも十分に火を通して水を加え、あとは人参ジャガイモを入れてコトコト炊き込むという手順でした。しかし、ここで肝心のカレールーがありません。というより、今のような形の、ブロックになったカレールーというものが存在しなかったのです。ではどうするかというと、空の鍋に小麦粉を入れ、これを1時間ぐらい炒ります。母も最初は一体どうなるのか解りませんし、どうなればいいのかも知りませんから、ただ父に言われるままに、まだじゃ、もう少しの指示通り炒り続けます。そうして、小麦粉が茶色く色づいてくるまでその作業をつづけると、いい香りがしてきます。そこへSBの小さな缶のカレーパウダーを加え、ざっとまぜて、今度は先の具のスープを少しずつ加えて、ダマにならないように溶いてゆきます。あんな少しの量のパウダーでかれーなんかできるのだろうか、子供心に思いもし、母もおもったらしく、父に問うておりました。父も自信はなさそうでしたが、行けると言うておりました。適当なところでその作業を終わると、なんだかぼったりとしたカレーが出来ております。そこへ具を加え、こがさぬように混ぜ続けて炊き込んでやっとな完成でした。たぶん2時間余りかかったと思います。私が小学生低学年だったと思いますから、父も母も20代後半で、30にはなっていないはずで、その父が母の知らないカレーの作り方をなぜ知っていたのでしょうか。たぶん海軍だったからだだと思います。

それから本の1~2年でカレーのブロック状のルーが出てきました。最初はそれでも、そのブロックを包丁で切れと書いてありました。わたしも何故か切った覚えがあります。しかしそれも最初のうちだけのこと。次にはチョコレートのように割って放り込めばよくなりました。それから量が少ないと不満たらたらにおもった、大塚のボンカレー。レトルト食品の走りでした。しかしこれがおいしかった。お湯にパックを入れてあたためて食べる、これも新鮮でした。あの大塚のボンカレーの箱に印刷されていた女優さんが、善通寺の五重塔の入り口から出てきて、立ち回りを演じるのも見ております。雪姫七変化と言ったのでしょうか。カレーだけでこれだけ語れます。これも昭和なんです。

そしてホットケーキの話です。

高松にデパートが2軒、ありました。今はそのうちの一軒が潰れて、昔からある一軒だけに戻ってしまいました。残っているのは三越です。ここへ行くのは憧れでした。用があっても楽しみでしたが、なくて立ち寄るのもどこかわくわくするものがありました。子供時分はこ

の建物が大きくて、それも天井が高くて、エレベーター前の大理石張りの壁は、高級とはこういうものと思わせるものでした。ところが思い出さないのです。私が子供時分、この三越にエスカレータはあったのだろうかということ。当て推量でいうなら、エスカレータはなかったはず。私の子供時分といえば昭和30年を挟んでその前後ですから。ところが階段で上がり下りした覚えはないのです。どうだったんでしょう。あのエレベータ・ガールがガードアを手で押さえ、上に参ります、上でございます、と手の指をピンと伸ばして案内していたのを、今もまじまじと思い出します。いやあ、あか抜けて美人というのはこういう人だったのではないかと思います。時代の最先端の職業だったはずですから。ついこの前までの スチワーデス さん、今のキャビンアテンダントさん ぐらいのもんだったんですから。

それがいつの間にか、エレベータは自動運転。自分で降りたい階のボタンを押して、止まれば勝手に降りることになりました。できますよ、私だってボタンを押すことぐらい。そして目的の階が来れば、押し合いへし合いしていてもずうずうしく奥から降りることぐらいできる厚かましきは、この年ですからもう身についております。しかし、ひょいと、これでいいんだろうか、エレベータガールさんに、*階ですと告げて、はい、承りました、*階でございます、紳士服、ネクタイ売り場はこちらでございますと案内されて、降りなきゃいけないんじゃないだろうかと不安に駆られたりすることがあります。勝手にボタンを押したら、危険ですのでご注意ください。もういないのに言われそう・・・と、つい思ってしまいます。

デパートへゆくと、子供にとっては一番の楽しみは屋上でした。屋上へゆくと、10円で何分か上下に揺れ動く電動遊具がありました。コーヒーカップだの回転木馬、メリーゴーラウンドとかもあるのですが、幼い私のお気に入り象の電動遊具でした。叔母といっても、年は4歳しか離れていない叔母とその同級生の女の子たちに連れられ、屋上に行ったことがあります。小学3年生ぐらいではなかったかと思えます。その叔母の友達が、私が象の電動遊具にまたがっていると、乗りたいのかと10円玉を入れてくれました。グインと音を立てて動き出し、ゆらゆら揺れて楽しいのです。コーヒーカップや回転木馬には乗せてもらったことがありませんでしたから、この象の電動遊具が一番楽しいものと思い込んでおりました。わたしは10円を入れてくれた叔母の友達に感謝しておりました。しかし、降りた後叔母は妙に不機嫌でした。すこし年取った後になって、そのわけがわかるような気がしました。象の電動遊具と言いましたが、その頃は ダンボ といったたとおもいます。

親とデパートに行った時もやはりそのダンボに乗るのが楽しみでした。そして自分が子供を連れて行くようになって、そのデパートの屋上には電動遊具が2台並んでありました。ダンボではなく、パトカーになり、オートバイになってたと思えます。二人の子供を遊ばせるのは父親の役目でしたから、私も一番最初にこの電動遊具に乗せました。ちょっと怖がりの長男をパトカーに乗せ、大胆な妹はオートバイに乗せます。どちらもコインは100円になっておりました。ところが、同時に乗せてもどちらかが早く止まります。すると子供のどちらかが不機嫌を決め込みます。で、しかたなく、ゴーカートに乗せようとするのですが、それは嫌。一人で乗るのはどちらも怖がります。仕方なく、妻を待ち、下の子は妻と、上の子は私と乗って走らせました。しかし、実際に走る車は未だ怖いのです。ぶつかりますし、加速度も体感じますから。そんな

怖がってた時期の子供が後どうなったか、覚えていません。父親の怠慢かもしれません。もうすぐにそんな電動遊具には乗らない年になっていたんでしょう。父親がスーパーマンだった時期は、すぐ終わります。

そんなことに飽きると、デパートの食堂へ行きます。父や母、妻と私に子供全員でデパートの食堂に行くのが贅沢でした。その頃はもうその贅沢感も薄れておりましたが、私が連れて行かれた昔は大の贅沢でした。そして子供の私がそこで頼むのがホットケーキでした。あたたかいミルクとバターの香りがして、メイプルシロップを全部かけ、十分にしみこむまで待って、ナイフとホークで切って食べる、それは日常とは遠く離れた特別なできごとでした。甘くておいしいこと以上に特別なことに思えたのでした。子供たちにも同じ次元の感慨があったとは思いますが、やはり私同様、デパートではホットケーキが好きでした。しかし当の子供にとっては、日頃あまり甘いものをふんだんに食べさせてもらえない代わりに、ここでは羽目を外しておもいきり食べられるという解放感とホットケーキのおいしさへの満足感だったと思います。それに加え、日頃の箸を使うことではない、ナイフとフォークを使うことの新奇さだったかもしれません。私のハイカラなケーキへのわくわくした思いとは早や違っていたことでした。

いまま高松三越には食堂があります。近年余り行くこともなくなりましたので、確かにとは言い切れませんがあると思います。そこから見える景色も変わってはいますが、私を伴ってここへ来た若い父と母は、孫を連れて白髪交じりになってましたし、余り行かなくなったこの頃は父がもういません。それでもホットケーキは懐かしいと思えます。

夢で会いましょう シャボン玉ホリデー

夢で会いましょうという番組を知っている人は、若い人じゃありませんよね。知ってますか、このNHKの初めてのバラエティ番組。最初に同名の曲とともに出演者の名前が流れていきます。この文章を書くために、この番組の映像を捜すと、あるもんです、YouTubeで久しぶりに見ることが出来ました。その前に思い出していたのが、

夢で会いましょう

夢で会いましょう

という最初のテーマ曲の一節でした。しかしその歌声と歌詞は覚えていても、歌ってるのが坂本すみ子さんだったことはすっかり忘れてました。当時私は小学校から中学生になるという時期でしたから、そこまでしっかり見ていなかったのかもしれない。しかし、ごきげんよう、と首をかしげて挨拶をした人の名前が中島文子さんだということは、すぐに思い出しました。いまでも子供心に、大人の女の人というのは、あんな人だと思ったからだとおもいます。

番組が白黒で、カラーでなかったことはわかってました。当時のテレビの画面の大きさは、普通14インチでした。寡聞にして解らないのですが、それ以上とかがあったのでしょうか。今思えば小さなものですが、その小さな画面に、こんなしゃれた番組が流されていたとは驚きです。そこまで印象的だったこの番組ですが、YouTubeで見たタイトルバクに並んだ名前は、さらに驚きでした。誰から上げればいいのかわかりませんが、中村八大、永六輔、越路吹雪、水原博、坂本九、フウテンの寅さん、ではなかった、渥美清、由利徹、ポニージャックス、などなど、並べきれないほどの、綺羅星のごとくといえいいのでしょうか、今思えば、たいへんな人たちの集まったお化け番組だったことがわかります。後の事を思えば、大変な才能が集まってたんだと言えましょう。NHKもたいしたもんです。そしてこれがビデオ編集を使わない、一発勝負の番組だったことにも感心します。

それからおくれてだったと思います。シャボン玉ホリデーが子供の私の楽しみでした。なんてひねた子供かと、と思いますが、てなもんや三度笠もすきでした。大村崑のミゼットのコマーシャルは覚えてます。俺がこんなに強いのも当たり前前田のクラッカーも忘れてはいません。この前田のクラッカー、どこかで見ました。つい最近、買って食べました。それが近くのスーパーではなく、イオンのお菓子売り場のどこかで買ったのではと思います。あのころのおいしさではありませんでした。ただ塩っぴいクラッカーでした。あのころはあんなにおいしかったのにとおもいます。そういえば、明治と森永の板チョコは、いまも同じデザインで在ります。森永ミルクキャラメルも、カンロ飴も同様です。しかしカンロ飴が、飴の生地には醤油で味付けしたものとは知りませんでした。チャイナマーブル、ゼリービーンズの事は触れたことがあったと思います。それでも、おまけつきグリコキャラメルが、子供の時分に無くなったのは残念で仕方ありませんでした。

シャボン玉ホリデーは土曜の午後6時半に始まったはずですが。子供らしくない、でも白馬童子も好きなひねた私は、夕飯時分であっても母に叱られながらテレビの画面にくらいついて見ておりました。双子のデュオ、ザ・ピーナツのホーリデーホーリデーは今でもテレビの画面から聞

こえるようです。こじやれたアメリカのショー番組を見ているようでした。後に出てきて、この番組を駆逐した、当時低俗番組とPTAが騒いだあの番組とは違って、大人の趣味の番組だったと思います。これも結構低俗なふうにやってましたが、この番組が品を失わなかったのは、クレイジーキャッツが一流のジャズバンドだったからでしょう。その実力の裏打ちが、あれとは違ったと思っています。

NHKでさえ今 おわこんテレビなんて番組をやっています。音楽番組はなくなってます。ときおり、これもNHK・BSですが、男の子のアイドルが飛んだり跳ねたりしてるようです。それを見てるのは女の子でしょうか。おじさんは苦り切ってすぐチャンネルを変えます。もうあんなしゃれた番組は見られないのだと思います。黎明期にこそ一流が生まれます。文学も絵も。さびしいもんです。そんな結論しか出てきません。

言い忘れしました。上を向いて歩こう は 夢で逢いましょう から出てきました。後にNHKを追放された、若い美輪明宏氏の姿も見ることが出来ます。最近子供にカラオケに連れていかれた時の私の曲が、黄昏のビギン、です。覚えているもんです。

私も戦後生まれですから、戦前は知りません。しかしこの軍都であった善通寺には、戦前の名残りがあちこちに残っておりました。調べてみると、今の善通寺駅から西は、善通寺を越えるあたりまでなにかしらの軍の施設がありました。ついこの間まで片原町と言っていた、今の文京町には輜重隊に並んで騎兵隊があり、大通りを挟み、歩兵隊と兵器支廟が南北に、そして監督府、司令部、工兵隊、砲兵隊、さらには監獄まで整っておりました。勿論遊興施設もそれぞれにあったわけです。そして、あの日露戦争で何万人もの兵隊が突撃しては無駄に死んでいきましたが、この善通寺から出発していった人たちだったことは誰も言いません。乃木將軍の率いた第三軍は第一師団と第十一師団でありました。

昭和はいい時代だったでしょうか。司馬遼太郎氏によると戦前の昭和こそは、この日本史にない異常な時代だったそうです。それに賛成しない意見も読みましたが、私はそうだと思います。明治維新とその後は、混沌の中に新しい時代を自分達で切り開いて行ける可能性がありました。そして、幕末までに積み重ねた人と文化が基盤になって近代国家を築きあげ、日清、日露の戦争に勝利しました。しかし、司馬氏は、藩閥になかったものの立身出世は 軍人 しかなかったといえます。坂の上の雲はその物語だったと思っています。あの兄弟は陸軍大将、海軍中将にはなれても、 大臣 首相などの政府高官 にはなれず、 財閥の長にもなれなかった時代でした。そしてこの二つの戦争に勝った成功体験が海軍の大艦巨砲主義、陸軍の突撃、一人一殺の万歳攻撃を生みました。大東和戦争期の参謀はどういうひとたちだったのでしょうか。彼らは朝定刻に出勤し、夕方また定刻 五時に帰っていったそうです。どこかで玉砕があったときも。さらに、敗戦後我々は国家機構の大きな改革がGHQによってなされたはずと思っていますが、実は陸軍省と海軍省が廃止されただけで、あとの官僚機構は何一つ傷を負わず、存続しました。憲法こそ改変され、国体は変わったように見えますが。戦前に始まった 年金 が今も存続していることを思えば、お解かりとおもいます。国家は変わったわけではありません。官僚機構も官僚自身の意識も戦前のまま、官尊民卑、民は管理されるもの のままです。

敗戦後、日本は元外務官僚と、満州鉄道の巨魁にして巢鴨プリズンから米国の都合で特赦された昭和の妖怪によって方向付けられました。かの人は満州の地で 東条英機と利権で繋がり、甘粕大尉に資金の援助をし、蒋介石との親交も厚かった人でした。そしてこの人が牛耳っていた満州鉄道では、満州軍が各地で略奪してきた物資を、三井の社員が指揮して積み込んでおりました。

日本人は自分達の意志で国家体制を決める機会を失いました。もっともそんな自立した国民性ではありません。ただ従順に上からの誰かの号令に従うだけ、管理されて安心するばかりだけのものです。と、悪口ばかりになりましたが、自分もその一人であることは自覚しています。ですが、かつて私と私達は、体制に逆らい、これを打破しようとした経験がありました。そしてその後も終わってしまったとは思いましたが、敗北したとか、転向したとは思いませんでした。忘れた振り、そうです、忘れた振りをして、あとは懸命に生きてきただけです。

戦後の昭和は、私達が生きてきた時代でした。ただもう良いとか悪いとかだけの時代ではなく、私達には昭和しか生きた時代はないという事です。平成の後は知らないかもしれません。戦争にも行くことなく、侵略されることもなく、そう考えると良い時代だったのでしょう。戦後の巨魁妖怪も、あの時はそれしか選択肢がなかったと思います。

一気に駆け抜けた一時代でした。平成は、ここまでその余力で流して走った時代でした。もう戻ってもいいんじゃないじゃありませんか。最近私はそう思っています。

私も戦後生まれですから、戦前は知りません。しかしこの軍都であった善通寺には、戦前の名残りがあちこちに残っておりました。調べてみると、今の善通寺駅から西は、善通寺を越えるあたりまでなにかしらの軍の施設がありました。ついこの間まで片原町と言っていた、今の文京町には輜重隊に並んで騎兵隊があり、大通りを挟み、歩兵隊と兵器支廟が南北に、そして監督府、司令部、工兵隊、砲兵隊、さらには監獄まで整っておりました。勿論遊興施設もそれぞれにあったわけです。そして、あの日露戦争で何万人もの兵隊が突撃しては無駄に死んでいきましたが、この善通寺から出発していった人たちだったことは誰も言いません。乃木將軍の率いた第三軍は第一師団と第十一師団でありました。

昭和はいい時代だったでしょうか。司馬遼太郎氏によると戦前の昭和こそは、この日本史にない異常な時代だったそうです。それに賛成しない意見も読みましたが、私はそうだと思います。明治維新とその後は、混沌の中に新しい時代を自分達で切り開いて行ける可能性がありました。そして、幕末までに積み重ねた人と文化が基盤になって近代国家を築きあげ、日清、日露の戦争に勝利しました。しかし、司馬氏は、藩閥になかったものの立身出世は 軍人 しかなかったといえます。坂の上の雲はその物語だったと思っています。あの兄弟は陸軍大将、海軍中将にはなれても、 大臣 首相などの政府高官 にはなれず、 財閥の長にもなれなかった時代でした。そしてこの二つの戦争に勝った成功体験が海軍の大艦巨砲主義、陸軍の突撃、一人一殺の万歳攻撃を生みました。大東和戦争期の参謀はどういうひとたちだったのでしょう。彼らは朝定刻に出勤し、夕方また定刻 五時に帰っていったそうです。どこかで玉砕があったときも。さらに、敗戦後我々は国家機構の大きな改革がGHQによってなされたはずと思っていますが、実は陸軍省と海軍省が廃止されただけで、あとの官僚機構は何一つ傷を負わず、存続しました。憲法こそ改変され、国体は変わったように見えますが。戦前に始まった 年金 が今も存続していることを思えば、お解かりとおもいます。国家は変わったわけではありません。官僚機構も官僚自身の意識も戦前のまま、官尊民卑、民は管理されるもの のままです。

敗戦後、日本は元外務官僚と、満州鉄道の巨魁にして巢鴨プリズンから米国の都合で特赦された昭和の妖怪によって方向付けられました。かの人は満州の地で 東条英機と利権で繋がり、甘粕大尉に資金の援助をし、蒋介石との親交も厚かった人でした。そしてこの人が牛耳っていた満州鉄道では、満州軍が各地で略奪してきた物資を、三井の社員が指揮して積み込んでおりました。

日本人は自分達の意志で国家体制を決める機会を失いました。もっともそんな自立した国民性ではありません。ただ従順に上からの誰かの号令に従うだけ、管理されて安心するばかりだけのものです。と、悪口ばかりになりましたが、自分もその一人であることは自覚しています。ですが、かつて私と私達は、体制に逆らい、これを打破しようとした経験がありました。そしてその後も終わってしまったとは思いましたが、敗北したとか、転向したとは思いませんでした。忘れた振り、そうです、忘れた振りをして、あとは懸命に生きてきただけです。

戦後の昭和は、私達が生きてきた時代でした。ただもう良いとか悪いとかだけの時代ではなく、私達には昭和しか生きた時代はないという事です。平成の後は知らないかもしれません。戦争にも行くことなく、侵略されることもなく、そう考えると良い時代だったのでしょう。戦後の巨魁妖怪も、あの時はそれしか選択肢がなかったと思います。

一気に駆け抜けた一時代でした。平成は、ここまでその余力で流して走った時代でした。もう戻ってもいいんじゃないじゃありませんか。最近私はそう思っています。

先日朝の連ドラを見ていますと、主人公が歩いていく後ろで子供達が頭に白い切れをターバンのように巻き、サングラスを掛けて パーン パーン と言いながら遊んでいる様子を映していました。上も下も白いものを着て、背も白いマントをしているように見えました。まさに 月光仮面 ごっこ ですね。月光仮面の乗っていたオートバイは ホンダ ドリーム C70 という、当時はもの凄くカッコいいものでした。ターバンの額には三日月が光っていたと思います。・・・ しかし、最初は ホンダ ベンリィ に乗ってませんでしたか？そんな気がしたんですが。

ともかく月光仮面は ドクロ仮面 や マンモスコング サタンの爪 と決死の闘いをし続けました。武器はピストルとオートバイ、それだけで危うい勝利を拾っておりました。

この後が確か、怪傑ハリマオだったと思います。これはいまでも主題化が歌えます。小学校の同窓会で、カラオケで大合唱しました。しかし、内容は覚えておりません。

鉄腕アトムは先ず第一のヒーローでした。でも、リボンの騎士って覚えていますか。そして、このモデルが 淡島千景 さんだったことは知ってましたか。手塚治虫氏は天才でした。

昭和のヒーロー達を懐かしもうと思ったのですが、今はもう黄金バット、鞍馬天狗、スーパーマンの時代ではありません。

わあるい 奴をやっつけろ 赤胴 鈴ノ助

とどろきわたる おたけびは ただしいものに みかたする

月光仮面のおじさんは 正義の味方だ よいひとだ

彼らは皆、正義の味方 でした。あの時代は 正義 があったんです。

力道山を知っていますか。ある時若い子に、力道山の話をしました。私が40代半ばの時でした。聞いてる子は20代でしたが、当然知ってるものと思っはなしてますと何か雰囲気が違う。そのことに気付き、力道山って知ってるよね、と改めて聞くと、これが果たして首を横に振り、知らないと言います。そうなるとう度はこっちがびっくりしてしまい、今まで話してたことの土台が崩れて、はしごを外されたような気分させられました。ああ君たちは若いんだ、わたしは君たちより倍、生きてきたんだ、と思ひ知らされました。第一、プロレスがゴールデンタイムから消えて久しくなります。それゆえプロレスなるものを知らないというか、意識にない世代が当たり前になっています。これにはもう勝てません。話にならないという事態になったのがこの時代です。

しかし、私たちはアニメ、アニソンなどと今頃騒いでいる今より、あの鉄腕アトムの白黒アニメ、実写のアトムをみてきてるんだぞお、と言ってやりたい。そして実はアトムより、鉄人28号の方が売れてたんだとか、ソノシートでラララ、空を越えて、ラララ、海のかなたと聞いてきたのです。そして、この作詞が、かの若き谷川俊太郎であることも、知ってるんだぞと言ってやりたい。もちろん先ほどの力道山は自伝映画も作られたし、やくざに腹を刺されて腹膜炎でなくなったことも知ってます。しかしそれがどうした、というのが昨今です。

しかし福島の事があった後、アトムと言ってもなにか後ろめたい気持ちになります。10万馬力だ、鉄腕アトムと歌っても、その馬力のもとは、アトムの名の通り、胸の奥の超小型の原子炉でありました。兄の名はコバルト、妹はウラン、胸の奥の原子炉からの放射線量は10分で人を死に至らしめる被爆量だと計算されています。これが夢のエネルギーの正体です。

鉄人28号を開発したのは、だれだったか覚えていますか。太平洋戦争末期の帝国陸軍でありました。これを操縦するのが金田正太郎君。28号は陸軍の秘密兵器でありました。昭和30年代でも戦後でした。戦後が色濃く残っていたのです。

あの力道山もグレート東郷というヒーローがおりました。汚い真似をして善玉をいたぶり、反撃されると跪いて許しを請う役回りです。ですから名前も東条であり東郷でありました。

今韓国も中国も、アメリカさえ、日本にその役を割り振って、うまく演じるように強要してきています。それに反撃しようと、戦争をすることのできる国に変えようと、つまり、まんまと挑発に乗ってヒーローになろうとしているのが今の政権の有り様に見えます。政治感覚、センスのなさで、やってはいけないときにことを構えて相手に口実を与えてしまい、味方さえ怒らせるおぼっちゃん首相。今また硬性憲法の硬さに負けて、正面から憲法改正を言い出せず、裏口入学のような姑息な手段で自分の考えを実現しようとするわがままさ。自分は絶対正しいと思ひ込んだ人間ほど、罪深く、始末に悪いものはありません。どうどうと憲法改正を主権者に問いなさい。日本が法治国家であることを思い出して、それで改正されれば、私も従います。危うい、あやうい。

私が小学校高学年の頃、ブームになった子供の目新しい遊びと言えば、フラフープとダッコちゃんでした。どちらも今思えば大したものでもないのですが、子供は欲しがる、親は手に入らないといった具合で、だから仕方なく高い金額を払って親は買って与えました。私も買ってもらった子供の一人でした。もちろんダッコちゃんではなく、フラフープの方です。プラスチックの管を丸くしただけの遊具が、当時300円以上してたと記憶しています。なんと高価な！しかし、当時私は我慢させられ、買ってくれるまで想到時間が経っておりました。どんな具合だったか忘れておりましたが、春先にブームになり、夏を迎えるころが最高潮で、夏休みになるとフラフープで遊ぶ子だらけになり、それが学校へ持って行ってはならない禁止令が出て、急速にブームが静まったように思います。

私が買ってもらえたのは、ブームも終わりかけた時期でした。ですから父が近隣の町で、聞いた値段より相当安く買えたと、得意そうに肩に丸いわっぱを入れて帰った姿を覚えています。かってきたフラフープは水色でした。それがただ嬉しくて、夜の座敷でおなかの高さで構え、手で勢いをつけて回し出します。ですがそう簡単に回せるはずもなく、フラフープは足元へ回って落ちます。先に買ってる子は得意そうに回して、見せつけるような顔をします。最初からそんな風に回せませんから、落としては拾い、何度もやっていると母が、父ちゃんやってみせて、といいます。俺だってできるわけないよ、と言いながら、輪を通し、回してみますが、結局私と大差なく、フラフープはおちてしまいます。母は、他の子はこうやってたと、子供に回させてやろうとアドバイスしてくれます。しかしそう簡単なわけもなく、わっぱは足元に回り落ちてゆきます。考えてみるとその時が一番楽しかった。ある瞬間、わっぱは私の腰のところで落ちることなく回り出し、あれほど力いっぱい体をよじることもなく、輪は私の腰でとどまっているようになりました。そうなる、私も学校へこれをもっていきたくなくなります。そしてこれを私が持ってゆくと、周りがわっと沸き立って、昼休みは輪を持っている者が運動場で回して一心不乱でした。それがほんの一瞬の絶頂でした。持ってる子と持っていない子が出来て、学校がそれを心配し、禁止になってしまいました。おなかによじれて腸ねん転をおこす、なんてデマも、さも本当のように評論家なるものがのたまひ、ブームも終わってしまいました。たぶん今でも私はフラフープを回すことが出来ると思います。体で覚えたことは忘れません。近年、ウエストを細くすると、フラフープの再燃がほんの一瞬ありました。腸ねん転を起こすんじゃないのかと言ってやりたくなくなります。もうそんなことは誰も言いませんでしたが。

このフラフープと同時期にでてきたのがダッコちゃんでした。そのころ映像でニュースを見ると言えば、映画館のニュースだけでしたが、その画面の中で銀座を闊歩する女性の腕にダッコちゃんが、蟬がくっつくように止まっていたのを見た記憶があります。あんな空気で膨らませたビニールの黒い人形が、なぜあおももてはやされたのでしょうか。見る角度が変わるとウインクしてるように見える仕掛けを覚えてはいるのですが、お医者さんの娘二人が母親に、ダッコちゃんしていかないのと言われ、忘れてたと得意そうに腕にひっかけて出かけるのを見て、妙に反感を覚えた事がありました。にもかかわらず、ダッコちゃん自身は可愛いところもありました。

そのころから、ブームという言葉が言われるようになりました。フラフープ、ダッコちゃん、ホッピング、ミルク飲み人形、とブームはありました。

以前鞍馬天狗の事も話題にしました。私が知ってる映画スターはこの鞍馬天狗の嵐勘十郎と近藤勇訳の大河内伝次郎で、坂東妻三郎ではありません。懐かしの映画で、おろち をみたくあることがあります。そんなばかな、というぐらいの人数相手に大立ち回りを演じておりました。これが剣戟ブームを生んだと言われていますが、私が生まれた時には、昔話になっておりました。

私が解るようになったころの時代劇スターと言えば、長谷川一夫でしょう。雪の渡り鳥、忠臣蔵、雪之丞変化、銭形平次、瞼の母、と調べなくても映画の題がでてきます。母が映画好きでしたから、多分私も見ていたのだと思います。しかし、本当に身近に見るようになったのは、NHK大河ドラマ、忠臣蔵で、例の、各々方、討ち入りでござる、の名台詞はやはり言葉になりました。ですから長谷川一夫なんてそんなにいい役者だなんて思いもしませんでした。子供の評価なんてそんなもんです。しかし、自分に必要になり、調べたり思い出したりしてみて、長谷川一夫は名優だったと思いました。なんとおこがましいとは思いますが、最近では再評価もされない、忘れられた存在になってはいても、長谷川一夫は名優です。私なんか言われなくとも、そうであることに間違いのないのです。片岡知恵蔵、中村歌右衛門、太川橋蔵、中村錦之助、と名前は浮かんでいますが、圧倒的な存在感で、長谷川一夫は思い出されます。映画も今の様じゃなかった。

その変節の一步は、石原裕次郎に因るものだったと思います。兄慎太郎のデビュー作も相まって、太陽族は不良の代名詞でした。ですから、わが家ではその映画を見ることはありませんでした。陽のあたる坂道を見る機会はあるが、それを見た時これは不良の映画と、素直に見ないように決めていたのですが、つい好感を持ってしまいました。あの育ちのよさそうなカッコよさは、時代のスターになるはずです。そして、不良の映画を学校から見に行くようにさえなりました。黒部の太陽でした。変わるものです。いや我が家の父母が偏狭だったのかもしれませんが。美空ひばり、石原裕次郎は新しい流れをつくった、昭和最後のスターでした。たぶん高倉健より別格のスターでした。じゃあ、吉永小百合はどうなんでしょう。あとから彼女を凌駕する美女はでていませんが、まだ現役ですからおいておき、美女スターの代表は山本富士子としておきましょう。しかしながら、年取ると今の事はすぐ忘れるが、昔の事はちゃんと覚えていると言われるが、取り立てて思い出そうとしなくてもこういった人の事は思い出します。今の人はいさほど記憶にありませんのに。年取った証拠でしょうか。いいや、今的人是小粒なんだと思います。さほどの人はいないのだと思っています。映画とテレビの、媒体の違いからかもしれません。たぶん映画の背負った時代と、テレビが切り開いた地平の違いです。ですから、映画は今でもテレビとは違った映像文化で今も生き残って存在し、重みもあるのだと思っています。

私はうらやましい。映像の中で彼ら俳優や役者の演じるものは、たとえば再生ボタンを押すと前回と全く同じことを繰り返します。途中で前回とは違う、予期せぬ動きに変わったりしない繰り返しです。彼らはその絵空事の中で、同じことを寸分たがわず繰り返して演じます。動画は写した影ですから当たり前のことですが、その同じことのなかに、ふいに見えてくるものがあり

ます。ひょいと動かした眉の動き、視線の先、伏せた顔の影、その新しい発見に絵空事を演じる役者の空恐ろしさを覗いたような思いをさせられることがあります。。あんなくどくどしく仰々しい顔芸ではなく、何気な目姿に役の深さを演じきれる、それが名優と思います。そんな見方をさせられたのが長谷川一夫でした。しかし、14インチの中の銭形平次は淡島千景の切り火を背に出かけてゆくただの岡っ引きになってしまっていました。なにかが違ってしまいました。テレビの薄っぺらさの性かと思います。

昭和の映画の事と思うのに、長谷川一夫の話ばかりになってしまいました。じゃ、女優は誰でしょう。それを考えてはみましたが、これという人が出てこない。女優は花ですから、たくさん出てきて、すぐいなくなる、其れの繰り返しです。これは今も変わりません。原節子さんは坂東妻三郎氏と一緒に、終わった人でした。岸恵子さんも、私たち世代にはちょっと上の人です。そう思いながら、高峰秀子さんとは思いました。二十四の瞳、名もなく貧しく美しく、浮雲、カルメン故郷に帰る、そして喜びも悲しみも幾年月は学校から見に行きました。あの、アプレガールの代表のように言われた女優さんだったと思うのですが、これも皮肉なもんです。しかし、山本富士子さんの日本的な面立ちとか原節子、岸恵子のちょっと洋風な感じとも違った、実にすっきりした顔立ちの、背もそう高くない、しかし真珠のような可愛さの女優さんだったと思うのは、私が今年取って振り返るからでしょうか。いい役者さんだったかというとわかりません。私は女優さんがわからないからです。芸の深さから言って、森光子さんは好きというほどではないけど、いい女優だったとは言えます。高峰秀子さんは今見ても可愛い。こんな愛らしさと強さを表現できる女優さんは今いませんね。私は女優論は語れないのに無理したところが、こんなもんです。いい女優さんの話を聞かせていただけると幸いです。浪花千恵子さんとかは勘弁してください。

記憶を辿ってみると、子供の頃の私が一番興味を持った映画は 新諸国物語、笛吹童子でありました。調べてみると、この題材は昭和28年にNHKのラジオドラマとして始まっています。しかしそれなら私は未だ4～5歳でしたから、ラジオの事は十分覚えていないのも当然かもしれません。

映画は、その一年のラジオ放送の後制作されたそうで、新諸国物語は大変な人気シリーズでありました。その内容は忘れきっていますが、紅孔雀、髑髏仮面、火独楽水独楽などの言葉が思い出されます。なるべくネットなどで下調べなぞせず、自分自身の生の記憶だけで述べ綴りたいと思い、いろいろ思い出してみましたが、この程度でした。しかし鮮烈な印象と胸躍る思いで見た記憶はあります。その切れ切れの記憶の端に、面を作るために山中を探し歩き、格好の木を見つけて面を彫るが、悪人の策謀でその髑髏面をかぶらされると、面が顔に張り付き取れなくなるという筋があったと思います。また、火独楽水独楽については、いつも子供がその独楽を回して戦うという設定でした。ですが当然、いつも火独楽が水独楽に負け続けます。しかし映画の巻を跨いで最後の戦いでは、火独楽を回す相手に、勝てると思っているのかと嘲笑して水独楽を回しますが、水が吹き出して火を消しにかかっても、いつものように火を消せはせず、逆に水独楽を焼いてしまいます。母にねだってわくわくしながら見に行った映画でしたが、そんな事しか今は思い出せません。出ていた俳優も、中村錦之助と東千代之介であったと思います。

以来、母に連れられ見に行った映画は三益愛子さんの母物、化け猫映画などでしたが、特に化け猫映画は母が好きで、入場料の要らない年の私を連れてよく見に行きました。いまでも母がなんであんなものを見たがったのか解りません。しかし映画の最中、子供の私でも幽霊と化け猫が出てくるタイミングはわかりましたので、耳をふさぐか目をふさいで見ないようにしておりましたが、子供にも怖い物見たさってあるんですね、指の隙間からちらっと見たりします。すると口の裂けた、髪ふり乱した恐ろしい形相が目に飛び込んできて、慌てて指をふさぎます。それがおかしいと母が映画から帰って、父にわらって報告するのを私は恨めしく聞いておりました。もう化け猫は見ん！と宣言したりしたこともあったと思います。が、それでも連れていかれたのじゃなかったか・・・と。ですから、今でもあの手の映画は苦手です。

母もの映画は殆ど立て続けに見た記憶があります。いつも息苦しい内容で、それも三益愛子さんの顔がどこか祖母に似たところがあって、いつも重苦しい思いを感じておりました。もう残っていない映画なんでしょう、テレビの方で見たことがありませんから。そしてゴジラです。しかし私は見ておりません。もちろん、後のモスラ、キングギドラ、ラドンなどは知っていますし、見た映画もありました。それはそれで、地球防衛軍と言う映画もあったんです。この映画の印象はまた違ったものがありました。それはそれなりのこじつけがあって、そのこじつけの新兵器が発する光線が画面を走り、敵の円盤をやっつけるという奇想天外を絵に描いたような映画でした。これも日本なりのサブカルチャといえ、そうなんでしょう。私たちなりの正当ではないものの、いかがわしい文化でありました。それがクールと今主張されています。市民権を得たいかがわしい物って、変だと思っているのが間違っているのでしょうか。キャリアパニユパニ

ユも、いかにもいかがわしい。このいかがわしさが世界に日本を認識させるとは。

映画はテレビの登場で、世の隅に追いやられてゆきました。そんな中、勃興してしてくるのが漫画でした。私達世代はその漫画を受けとめる中心であったと思います。

漫画雑誌は通常一カ月に一回発行されるものと思っていました。少年、ぼくら、冒険王という名前が即座に出てきます。しかし、そんな雑誌で何を読んでいたのかは、よく覚えていません。鉄腕アトムはその時代で、鉄人28号はアトムに遅れて掲載されていました。雑誌は少年でした。これは調べるまでもなく、はっきり覚えています。

ところが、この月刊誌の売れ行きが低調になってきて、各雑誌は、10大付録とか12大付録と、付録の数で競うようになりました。ですから本は、本来の雑誌に挟み込まれた付録で膨れ上がっており、その厚みの大きいほうを買うと言う風潮でもありました。その付録も、読み切りの短編漫画とか、ポウル紙を折り曲げて糊付けし、何かを作る組み立て付録というものもありました。それが薄いボール紙に切れ込みを入れてある物で、こどもがいくら丁寧に切り抜こうとしても、ほんの少し残っている部分がうまく切り離せないで破れてしまい、結局失敗してしまう事ばかりでした。あながち、わたしが生来不器用だったからということだけじゃなく、それが貧相なものだったからと言うこともあったと思います。しかしそうは思いたくなくて、完全にできるとどんなに面白いものが出来たんだろうと、いつも悔しい思いをしておりました。

そんな付録の中に、少年探偵団手帳と言うものがありました。少年探偵手帳だったかもしれませんが。少年探偵団ですから、江戸川乱歩氏の怪人20面相と明智小五郎、少年探偵団の攻防のシリーズから来たもので、子供心にわくわくしました。といっても、実際そんな犯罪と関わるなんてあるはずもないとわかっておりましたし、尾行術なんか知って使うはずもないものともしておりました。しかし、一見警察手帳のような体裁をして、夜人を付ける時、手を視線の先に水平にし、手よりも上に動けば遠ざかっており、下がってくれば近寄ってきているなんて知識を、子供心に感心して読み漁ったものでした。表紙から一ページをあけると、少年探偵団の歌詞があったと思います。そして怪人二十面相も大人気で、本が10冊のシリーズでした。しかし高価で自分では手にできず、どこかで人間豹と透明人間の二作を読んだだけでした。人間豹は覚えておりませんが、透明人間では保護色とか、黒い色の衣裳は闇の中では見えないというトリックを知りました。大人であれば当然の常識であったことのように、子供はこんなことから知識を得て、それが得意だったのです。何も書かれていない紙を火にあぶると字が浮かび上がってくるとか暗号の事とか、秘密の事が書かれている手帳は、子供には大事な秘密のアイテムでした。

鉄腕アトムはその連載当時、追いかけて読めてはおりませんでした。毎月買って読めませんでしたから。ですから、その最初が天満博士の子供のエピソードから始まっていることなど、どうして記憶にあるのか解りません。また、アトムをヒーローとは思っておりませんでした。アトムより、後からの鉄人28号のほうが正直面白かったと思います。それでもアトムの中に描かれる高層ビルや、はるか高いところを走っている高速道路と疾駆する車などの未来都市は、これが本当に実現する未来かと思いました。そして、科学者はお茶の水博士も天満博士も必ず天文台に居ました。そのことから、最先端に行く科学者は天文台に居るものと思いこみました。そのこと

は別として、まるで宙に浮かぶように作られた高速道路網は、すぐそのあとの東京オリンピックには東京に作られました。手塚治虫氏には、もう未来都市が見えていたのだと思います。

しかし、手塚治虫氏は漫画に当然冠（かんむり）されていた、こっけいを取ってしまいました。天満博士の息子を失った悲しみを漫画に取り込みました。その点鉄人28号は従来の漫画から半歩前へ出ただけでした。そしてこの前へ踏み出したところから、漫画は全くちがった物になってゆきます。その最たるものが カムイ伝 と、それを掲載していた ガロ ではないでしょうか。割と高価な漫画雑誌でした。そのガロの、ほんの2～3ページの漫画に描かれていた一節 - 泣いて生きよか 笑うて生こか 死んでしまえばそれまでよ - がいまも残っています。つげ義春でした。それが、朝の連ドラでもう一度巡り合おうとは思いませんでした。水木しげる氏のプロダクションの一員として登場したのです。このとき漫画は頂点でした。文学が大江で終わったように、漫画もあとは 下り坂最高 と、疾駆して下っていただけです。もはや、いかがわしさも枠を外れたところもなく、子供の読めるものに成り果てたのでした。そう思うのは、勃興期の熱気を知り、漫画と言う表現手段を使った様々な実験をみてきた、つもりの我々のおごりでしょうか。

漫画雑誌が週刊誌化し、少年マガジンが、とか、明日のジョーが、とかも思い出されますが、巨人の星もむしかえさなくともいいと思います。特筆すべきではあっても、名を挙げるだけで解ってしまう程度のものですから。

善通寺 千年昔の話です

昔からの善通寺の町の道筋は変わったりしてません。一本、本郷通りの北に、庄内線と呼びならわしてきた道が、昔増えました。そういえばそれにつながる道も出来たんです。しかし、変わっちゃいません。変わりようのない町です。

その本郷通ですが、これは、善通寺の西門を赤門、そこへ続く道を本郷通と新しく呼ぶことにして、新將軍を歓迎したことの名残りです。とくに、中通は今のようになすすぐ伸びていたのではなく、本郷通から斜めに走り、途中から他と並行して走るようになっておりました。これを第11師団が来ることになり、新しく直したのです。

今の善通寺駅から先に、広い野原に兵舎と訓練のための練兵場がそれぞれに作られていたことは以前紹介しました。ですから、普通の民家、商家はこの片原町より北、中央小学校辺りからあったようです。特に、赤門筋が主な商店街でした。

その道筋に小さな神社が点在しています。日頃見てはいても、それがどんな神社か、関心がなくて知りませんでした。町々の神社は栄えた町衆がそれぞれこぞって建てたものでした。ですから町の端に立ってたりします。

そんな中で、鎌倉神社は町衆が建てたものではなくて、相当昔からあったもののようです。ついこの前、由来を書いた看板を読んで、びっくりしました。

鎌倉神社の由来 （社殿由来書き写す）

前九年の役に続いて、一〇八三年（永保三年）より八七年（寛治元年）に奥羽の清原家衡・武衡とその一族の真衡との間に戦乱が起こり、朝廷では、陸奥守八幡太郎源義家に平定させた。

これが俗に云う後三年の役である。

後三年の役に義家の臣、鎌倉権五郎影政は、金沢柵の攻防戦で戦に右眼を射たれながら、その敵を射殺し三浦為嗣が影政の面を踏んで矢を抜こうとすると、その無礼を怒って自分で目玉諸共引き抜いたと云う豪の者であった。

生没不詳。

時代は降って、南北朝時代に至り、一三六二年（正平十七年）七月南朝方に帰順した。

細川清氏討伐に向かった細川頼之に従軍し白峰合戦で功績のあった香川氏は、西讃三郎を賜り天霧山に牙城を築き多度津の本台山（桃稜公園）に居館を構え、一五八五年（天正十三年）豊臣秀吉の、四国征伐迄此の地方を支配し、祖先鎌倉権五郎影政を氏神として此の地に祀った。

当時は、鳥居、参道、本殿と鎌倉町一帯の広大な境内であった。

因みに、市内宮東にも権五郎さんが祀られ片目の魚が棲んでいると伝えられる。

と、あります。この鎌倉権五郎の逸話は、以前から知ってはありました。しかしそれがこの香川の地の、ましてや善通寺の関わった話とは思いませんでした。もう千年昔の話です。

この寒い時期はお遍路さんも少ないのですが、うるう年に逆打ちすると順打ちしているお大師さんとすれ違えるといわれており、今年は近年になく多くの方がまわっているようです。また順打ちして逆打ちすると、亡くなった人に会えるともいいます。いま観光化した四国遍路は、昔の遍路の謂われ言い伝えを覆い隠し、暗いイメージをなくして人を呼ぼうとしているようにおもいます。

何年前でしたか、**抱月と号していた遍路がおりました。その気迫に満ちた巡礼姿を地元のテレビが伝えました。最初にこの抱月さんを見つけたのは、地元の写真家でした。テレビ番組の中で紹介された抱月さんの写真は、確かに人をうつ迫力がありました。遍路ころがしといわれる急進な雪の坂を上がっていく時の顔が撮られていました。それこそ何かに取り付かれているような雪の中の顔です。写真家の人は彼を 賛美していたわけではなかったようです。ただ抱月さんの、悲しみに押されているような巡拝姿を追っていたようでした。

昔のお遍路さんの全部がそうだとはいいません。今でも真言宗以外のお坊さんも、修行のため四国遍路をしていますし、供養をしたいと回る人もおります。しかし、海をへだて、隔離されたこの国に逃れて、行く当てもなく巡礼遍路をして回る人たちがおりました。ハンセン病の人、村を追われた人、罪を犯して逃げてきた人、そしてその罪の贖罪のために回り続ける人、彼らは遍路道のどこかで野垂れ死ぬことを覚悟し、回っておりました。四国の人はこちらの人に おせったい をし、旅の途中で、もし亡くなくてもこの人を丁寧に葬ってきました。遍路道に今もその人たちの葬られた無縁仏の墓が数多く残っています。

そして抱月さんもその一人でした。それが判明したのが、彼を放映したテレビ番組からでした。ローカル番組でしたから、どんな風な経過からかは知る由もありませんが、大阪の警察から内偵が入り、結局松山の警察が身柄を拘束、大阪へ送り、逮捕されたと聞きました。その内々の捜査で抱月さんの支援者であり、写真を撮っていた人に問い合わせがあったそうです。彼が今どこにいるのか、どういう事情で遍路をしているのか、そして実は妻を刺して殺そうとした犯人であることも支援者に話し、協力を要請したらしいです。この辺りを、なんとなく抱月さんが気付いたようで、彼は一時行方をくらまし、逃亡を図りました。しかし支援者の方が彼を見つけ、説得して松山警察に出頭させたと記憶しております。間違っているかもしれません。

抱月さんは妻を殺してしまったと思い込んでいたようです。しかし、死んではいませんでした。そのことで彼は逃亡を図り、十年余り四国を回っていたそうです。そして

うかつにも松山の写真家の被写体になり、有名になってしまいました。始めは怖いほど拒絶していたそうです。しかし気のゆるみでしょうか、支援が欲しかったのでしょうか、多分八十歳を超えて人の温かさがほしかったのでしょうか、気を許し、写真を撮らせて最後はテレビ番組にまで出てしまいました。そして、殺してない、死んでない、罪を償いなさいという説得に応じて、逃げようとしていながら出頭して行きました。これが四国遍路です。なぜこんな話を隠そうとするのでしょうか。明るいことばかりではありません。人を救ってくれるのが遍路だと思っています。私達四国のもは遍路旅をする人たちの中に、こんな辛い人もいるのだと知っていて、なお何も聞かず おせったいをし、手を合わせておくります。世から隠れている人もいるんだ、お大師様に救われます様に。抱月さんの魂も、お大師さんの奇跡ではなく、お大師さんに代わって支援者の人が説き、心に訴えて納得させ、出頭させることで救ったと思います。

私も抱月さんが金蔵寺に来ていると聞き、会いに行きました。すると金蔵寺の駐車場の方のベンチに座って色々な人と話していました。幾たび回っていても彼は修行僧ではありませんでした。しかし千円札一枚彼に渡しました。

チェ、また抱月が ヘンド （乞食） しよる
汚い言葉が聞こえました。自転車の前後に生活用品を括りつけた 抱月氏 と一緒に
回り遍路 の人でした。

池の土手で遭遇したものは

歩くことが健康に良い、一番手軽な運動と信じ、ひたすら歩き続けてあちこち巡っていると、ああ自然が帰ってきていると思うことがあります。ただやみくもに歩くのですが、近ごろは気になることが増えて、自動車の排気ガス、それもディーゼル車の排気ガスはあの東京都知事が振って見せたペットボトル以来気になりますし、即今は例のPM2.5という厄介者もあります。しかしそういった予報が最近ではNHKのデータ放送で見られますので、逆に今日はいかんとこか、になってしまいますこともあります。厄介なことになったもんだと思うのですが、気にしないわけにもいきませんので、空の様子に気を使いながら、ひたすら歩くことを続けております。健康のためと思ってやることが、健康を害することになったのでは何のためやらわかりませんから。

そうは思いながら歩いていると、あちこちで退職老人に出くわします。中には完全防備で頭にサイクリング用ヘルメットをきっちりかぶり、自転車もあの ころ旅 のより高そうな自転車に乗って、下半身をぴっちりタイトを身に着けて、惜しむらくは顔だけ老けたサイクルライダーにも出くわしました。背中リュックもまぶしいくらいです。しかしそんな凜々しい年寄りも稀で、暇に任せてただだらだらと歩く姿を見ます。そんな人はおはようございますと挨拶しても、無表情を装って通り過ぎます。もちろんほとんどの人は、声は出なくとも頭を下げる、きちんと挨拶を返してくる、そんな人ばかりです。

挨拶というと、朝のさわやかさをいや増しに心浮かせてくれるのが、小学生たちのおはようございますの声です。子供たちは朝礼で声を出すように挨拶してくれます。女子中学生も自転車で走り去りながらおはようございますと、この年よりに言ってくれます。言わないのが中学も上の方の学年の子から高校生の男子です。無視する、横を向く、携帯を眺めて行きすぎる、仲間内だけで話をして通ってゆく、などなど様々ではありますが、それを今非難しようというのではありません。昔、私もそうだったと思うからです。妙に何か意識して、声をかけられても横を向いてしまうのです。男の子はいつかそんな風になっちゃうのでしょうか。女は群れて、男は孤立してと、それを社会性とか言い切って納得するわけではないのですが。しかし年とっても声が出ない、挨拶が返せないなんて、みっともないとは思いませんか。話す相手は連れ合いだけなんて、ぼけちゃいますよ、ご同輩。

そんなこんなで歩いていると、自然、メイン道路は避けたくなくなってきます。大きな道は歩道もあり、歩きやすく距離も合理的になっています。細い旧道とかを歩くのは骨が折れます。狭い路肩を歩かされたり、排水溝の上の蓋の並んだところを歩いて躓きそうになったり、ときに行きどまって腹立たしくて仕方ないけど引き返さざるをえなかったりと、ところがささくれ立ってきます。まあ、そこまで焦る必要なんかさらさらないんですが、習性です、急ぎ帰り着きたいと思ってしまいます。そうやって歩いて、ため池の土手に道を変えると、池の水表に、春先カイツブリだの水鳥が群れておりました。池辺は、まだ寒い時分は長いものも出てこず、車も通らず、安心して歩けます。脇道から土手に上がり、寒風に吹きさらされたときでした。ふいに目の前を風が宙に浮くように、大きく両の羽を広げ、明らかに猛禽類が風に乗って浮いてゆくで

はありませんか。おもわず手を伸ばせば、そしてそれにちょっと飛び上れば、そこに浮いてる猛禽の足か羽を掴めそうな距離を、飛んでいるのです。しかし私は片手を胸まで上げて、寒風を見てただけでした。猛禽は風に乗って、向こうの土手の上まで流れてゆきました。あれは何だったんだろうと私はしきりに考えましたが、元の知識がたかがしれてるのですから解るわけがありません。しかし、ついこの前、林の上か裾野の空で、ピーヒョロヒョロという懐かしい鳴き声を聞きました。ですから、高い山頂の木にとまってた鷹とかハヤブサではなく、鳶、とんびではないかと思いました。おなじ猛禽でも鷹ほど強くもなく、隼ほど素早くもなく、食は雑食で、かならず生きた小動物を餌食にするのではない、少々ユーモラスな、大型の猛禽類が、トンビでした。子供の頃よく空で聞いてた鳴き声で、さいきんは聞かなかった鳴き声ですが、今復活していると思います。猛禽類は鳥の食の頂点ですから、彼らが戻ってきたのなら、彼らも食えているのだと思います。とのさまガエルが絶滅危惧種になる時代、彼らが帰ってきてるなら、自然はもう心配ないのかもしれない。歩くと違った景色が広がります。

浅川マキ、この歌手、ええ、歌手なんです、1942年生まれの、渴いたジャズ・ブルースを歌わせたら右に出る者はいないと言われた女性歌手なんです。1969年デビュー、1998年急性心不全で名古屋のホテルにて死去。実はニュースで亡くなったとは聞きました。思わぬ動揺を感じました。しかし、だからって、そう好きな歌手でもなく、とはいえど、深く印象に残っていた歌手でした。それは、魅かれるとか、素直に聞き惚れるとか言うのではなく、真正面に置いておくと目を逸らしたくなる感じです。一枚だけLP盤を持っています。買うきっかけは何だったか、覚えていません。よく聞きました。おいらが愛した女は、と始まるかもめは、寺山修二の作詞でした。夜が明けたら、と繰り返して始まる曲も、今でも歌えます。

かといって、追いかけて聞くことはしませんでした。あのLPを出した後、どんな歌手活動をしていたのかも知りません。アングラではなくアンダーグラウンドだと、その違いを主張したり、ビリー・ホリデーを目指していたりと、やはりジャズボーカルの女性歌手たらんとしていたのでしょうか。ちょっとしたヒットになったその後、消息はしれませんでした。アンダーグラウンドですから、表で活躍することはあり得ない、ご法度だったんでしょう。調べてみれば、CD音源には懐疑的で、もっぱら地方のジャズクラブ、ライブハウスを回っていたそうです。作詞家作曲家でもありました。ちあきなおみの歌った朝日のあたる家は、実は今回調べてみるまで知りませんでした。その訳詩を浅川マキがしていたそうです。しかし、この暗さは何なんだといたくなります。そしてその死に方は歌っていた曲そのままじゃないかと、言ってやりたくなります。

この人も、同じ時代の人だったと思い出しました。。

今更の追悼文 高橋和己氏へ

その70年を前に、東大安田講堂が陥落し、事態は沈静化してゆく中、我々の敗北は目に見えました。そんななか、一人の文学者が逝ってしまいました。彼の母の懇願で、直るやも知れぬと新興宗教の輪の中に加わり、踊ってさえみた人でした。もうその人の文学をどこの書店でも見ることは出来ないが、記憶だけは私の身内に残っています。彼は何故長編を書くのかと語っています。憂鬱な党派、邪宗門、火の器、我が心は石にあらず、墮落、と長編は切りがなく並びます。しかし、私の好きな作品は散華、孤立無援の思想。彼の亡くなったのは39歳。葬儀委員長は埴谷雄高。思うと、今の私の半分ほどの年齢です。私の手元に残した本、マックスウエーバー、芥川龍之介全集、丸山真男、宇野弘蔵、そして高橋和己。本が時代を現しているからではなく、かつてそれを懸命に読んだ私がそこに残っているから、と今気づきました。

昭和を語っていたのでした

昭和を語っていたのでした。

漫画を劇画と言ったのは、ゴルゴ13のさいとうたかをでした。ビッグコミックは創刊号から知っていますから、この大長寿連載漫画も初回から知っていることになります。ですから、このさいとうたかを氏の、漫画ではない、劇画だという大げさにも聞こえる物言いも、リアルタイムで聞いています。亀有のりょうさんは私の子供の時代のもので、ちょっと違うかと思ったりしますが、これも昭和の長寿漫画です。要するに、私たちは少年マガジンもサンデーもジャンプも、さらに、廃刊になったキングも創刊の時から知っています。

漫画から離れると、平凡パンチ、プレイボーイなどがそれまでとは違う、全く新しい雑誌だったと思います。残念ながら女性向けは知りません。アンアン、ノンノン、読んだこともない。

そんな雑誌の話ではありません。その少年漫画雑誌が創刊される前の貸本漫画の時代に、ベストセラーがありました。忍者武芸帳です。これが引き金になったかどうかは知りませんが、小説の方でも忍者物が流行したこともありました。それはさておき、あのげげの女房でも、ちょっとそれらしいエピソードはあったと思います。この忍者武芸帳を、私は小学生の終わりから中学生の時代に夢中になって読みました。相当大部のシリーズだったと覚えています。しかし今、その内容をおもいだせません。とは言っても、私は大学生になって、映画になった忍者武芸帳を見ています。あのヌーベルバーグといわれた大島渚がつくった、前評判の高い映画でした。そこで、前評判の高さと昔読んだ忍者武芸帳の面白さから、つい見に行っただけですが、その漫画を熟読してきた者にとっては、なんともつまらないものでした。見てきたもの、知っているものをいくらスクリーンに大寫しにされても、何の興も起こりません。映画大画面電気紙芝居であったと思いました。

これは映画の忍者武芸帳の話です。白戸三平氏にはかかわりありません。この、手塚治虫氏とは違った、異色の漫画家に子供の頃、夢中でした。手塚氏のどこか西洋的な感じに比べ、白戸三平は実に日本的でした。扱っていた内容が時代物だったということからでなく、また忍術が印を結んでドロンと言うことではなく、戦国の、しかも土着の民の、歴史の影で生き死にする姿を描いて、訴えかけて来ているように思えたからです。これは後から思うこじつけでした。中学生にやっとなろうかと言う子供に、そんなことが解ろうはずのないことでした。

しかし、微塵がくれの術は新鮮でした。まるで、かくすればかくあろうと納得できる術でした。実は、忍者武芸帳を私はよく覚えていないのですが、そのあとのサスケとかカムイ伝、カムイ外伝はもう何時でも読めるようになっていましたので、覚えています。そういえばアニメになったサスケは見ておりました。調べてみると、サスケは1968年にアニメ化されておりますから、私は大学生です。覚えていて当然です。忍者武芸帳はその前年、1967年でした。微塵がくれの術、猿飛の術、分身の術、サスケの使う術はそれらしく説明されていました。半信半疑の、ちょっと信じてみたいような説明であったと思います。しかし、このあたり、カムイ外伝と混じっている部分がありそうです。カムイの得意技は変移抜刀霞切りと飯綱落としだったはずですが、抜け忍のカムイの懸命に闘う面白さが、実はカムイ伝より好きでした。カムイ伝は漫画じゃなか

った。かくもあろうという、虐げられ、搾取される百姓の抵抗する姿と、さらに過酷な弾圧を加える武家階級の闘争劇でありました。そういった図式はわかるのですが、なかなか解り辛い。それだけに、ちょっと手を離してしまう。確かに全巻読んだとは思いますが、小説の一文ほども覚えていない。それだけ印象は強かったが、記憶には残っていないという皮肉を感じています。しかし、忍者武芸帳の映画を見た翌年、それに続く新宿争乱の中を、正助達のように走ろうとは思ってもおりませんでした。

電車乗り場

もう無人になって久しいことでしたから、いずれは取り壊されると思っていたのですが、ついこの前、電車乗り場であったところに足場と防塵幕がはられているのを見ました。善通寺には路面電車が走っていました。ふつう、切符は電車の中で車掌さんから買っていたのですが、赤門前には待合室と切符売り場のある駐車場がありました。待っている間座っているためのベンチもあり、トイレもありました。ガラス越しに切符を買う売り場があるので、切符を買わなければという追いかけられる気持ちは解消され、安心でした。建物の屋根には大きなタペストリーがのせられたコンクリート造りの洋館仕様でありました。壊すための防塵幕越しにも透けて見えておりました。足場と幕が取り除かれると、もうきれいな更地になって建物の影も形もありませんでした。重機が地面を搔いて、まだダンプに瓦礫を乗せておりました。

この近くに、大きいものではありませんが、善通寺3村の議会場が残っていました。のちに善通寺郵便局となり、あとは民間に払い下げられて、喫茶店になっていました。

善通寺の東に世界館という古くからの映画館がありました。これも以前話題にしましたが、すこしだけ保存運動が言われましたが、それも先細りでいつの間にか取り壊されました。ここは映画館になる前は、芝居小屋だったはずとっておりましたが、まだ私の生まれていない時代の事ですから、どうやら勘違いだったようで、芝居も供していたようだし、歌舞伎もあったし、演芸も見世物のようなものが興行されていたようです。ちょっと検索をかけてみると、世界館の養子だった方の文章がありましたから、これは本当の事だと思います。しかしこれも無くなりました。数えてみれば、あれもこれもと思ひ浮かびます。善通寺市民は、割とこういうことに無関心だと思います。無くなれば、さらっとそうなんだと受け入れ、忘れます。

先だって、魚七という、いまは料亭と言ったほうがいいのでしょうか、以前は料理旅館で、おかみが軍人ばあさんと評判だった和料亭の二階が火事を出しました。いまは突貫工事で改修しているようです。火を出したと聞き、漏電と聞くと、さもあらんと思いました。軍人たちの大宴会場であったのですから。しかし、無くなって欲しくないと思います。

電車の走っていた本郷通りは、田舎の市にしては珍しいほど幅広くなっています。JRの線路をまたいだ高架橋をのぼっていると、赤門の商店街の向こうにおだいっさんが望め、さらに香色山が一番色濃く見えて、その後ろに低い山が重なって立っています。五岳山と呼んでいます。たぶん、見どころとてない善通寺の、一番のところと思っています。

本郷通りが広いのは、電車が走っていたからです。電車通りとも呼んでいました。しかし、電車が走っていたのは私の小学生低学年の頃で、廃線になり、舗装がされ、あった時の景色はかすかなものにすぎなくなっています。それでも雨の日の、赤門のT字に線路が交わっていた所の、油を練ったような泥の詰まった線路と石畳、そしてパンタグラフがこすっていく電線の張り巡らされていた、区切ったような鉛色の空は覚えています。そんな記憶の最後の一かけらがなくなりました。

ひたすら前を向いて、少し早足で庄内線の狭い歩道をおもむきで歩いておりました。信号を渡ってすぐでしたから、スーパーが開いているかどうか解らず、開いていなくとも先に自販機があり、ジュースの一本も手に入ると思いながら横を向くと、道路越しのマルヨシの駐車場に気になる、まさかと思うお尻があったような気がしました。お尻と言っても自動車の後ろの事です。今では見る事のないメッキの複雑な形状の後部バンパーと、リアにエンジンを載せたために、これを冷やす目的でグリルのように隙間の空いたエンジンルーム、リアガラスが普通とは逆に、後ろに沿った形は、日本の自動車史上であの車しかありません。マツダ・キャロル360はなんとも懐かしい車でありました。父の運転する車に乗ったのが、このキャロルでした。小さいけれど4ドアで、母と私を乗せて走りました。まるで魔法のじゅうたんだと子供心に思いました。たぶん10歳になっていなかった時の事だと思います。その時の車がオリジナルのまま、今ここにあると思うと、見とれてしまいました。ところが、中に痩せたお年寄りが乗っています。なんとも不躰なとは思いましたが、好奇心と言うか、見たい気持ちが抑えられず、車の人にちょこっと頭を下げると、怪訝そうな表情を和らげ、車から降りてきてくれました。いやあ、懐かしい車ですねえ、が私の最初に話しかけた言葉でした。すると、頭も眉もむしった様に毛のない痩せた人が、嬉しそうに色々説明してくれました。この車が好きで、40年来乗っていること、乗り出して20年経ったころから部品が無くなってきたのでオリジナルの部品を買い集めたこと、部品取り用に、この車と他にバンタイプの軽の車を合わせて7台持っていたことを話してくれました。外装も年月が経っているので、あちこち傷んではいるが、オリジナルのまま塗り直しはしていないと、ちょっと大変なことを淡々と語ります。昭和40年のモデルだそうで、そうすると40年近くこの車に乗っていることになります。口に出せばそれだけの事です。しかし、この車を維持し、乗り続けて人生を過ごした40年の重みは、今この目の前にあります。見知らぬ私にキャロルの事を楽しそうに話すこの人の思いを、私は十分に共感してあげられたでしょうか。この車の事を解るのは、私ぐらいの年齢まででしょうねと、しみじみボンネットをなでてみました。すこしざらつき、ああ、今私の乗っている車がここまでするには、また40年かかると思いました。まあ無理だろうなあとも思いました。

最近BSでの放送が終わりましたが、グレートトラバース、日本百名山一筆書きという番組をものすごく楽しみに見ておりました。田中陽希君が屋久島の宮之浦岳を第一番にして、海はシーカヤックで渡り、後はひたすら自分の足で道を走破し、百名山を踏破するという番組でした。マラソン選手がマラソンコースを走り抜ける時、そのスピードは一般人が100mを全力で走る速さより早いそうですが、このグレートレースのプロアドベンチャー田中陽希君は全行程7800キロを走破し、日本中の百名山をアルプスや富士山まで踏破するのです。彼にかかれば、山なんかで遭難なんてことがあるのかと言う気さえします。登山口にやってくると、その山での通常登頂にかかる時間は何時間と紹介されます。しかし田中陽希くんにかかると、その時間の大体6割ぐらいで登頂してしまいます。それも平均20キロの装備をリュックサックに背負っての登山です。彼は決して登山家というのではないのですが、山を登るための知識も技術も超一流で、雪渓をピッケルではなくトレッキングポールを両手に持って登ります。靴も短靴、半長靴、登山靴を状況に応じて選び、雪山ではアイゼンも使います。まさに用意周到。山も地図一枚だけで登ります。私だったらGPSを使ったナビを考えてしまいますが、そうではなくて、地図を読み、周りの地形を見て登山道を見つけ、登っていきます。

同じBSでグレートレースと言う番組がありました。全行程450キロを5日間で走破するという内容でした。グレートレースですから平地を走るだけではなく、河を渡り、山を越え、時には水田のあぜ道で足を滑らせながら前進してゆきます。マラソンこそ一番過酷なレースと思っていましたが、その後トライアスロンと言う競技が出てきてびっくりしました。ところが今度はグレートレースです。時には高低差1000メートル、距離450キロなんて行程を5日間で走破します。この前放送されたレースでは、フランスのプロに日本のアマチュア選手が果敢に挑んでおりました。初日に30分以上の差をつけられて2位に甘んじましたが、二日目フランスの選手がコースを間違え、ペナルティを課されて日本選手が少し追いつきます。そして、せめて一日ぐらいは勝ちたいと意気込み、頑張って3、4日と日本の選手が一位になります。しかし初日のリードが縮められず、優勝は矢張りフランスのプロアドベンチャーでした。このアドベンチャーレースに、田中陽希君は何度か優勝しているのだそうです。

実は今日もその百名山一筆書きの総集編がありました。手を伸ばせば、富士がすぐそこにあるように見える南アルプスの7座を縦走してゆきます。カメラマンこそ付いて行っていますが、彼らは手を貸しません。ひたすら田中君の邪魔をしないように追いかけて、追い越して、時にドローンで上空から撮影します。この番組を見ていて、何より気になったのが、この映像をどうやって撮影したのかということでした。それは総集編でちょっと紹介されておりましたが、エベレストに登頂した経験もあるカメラマンとか。ドローンを扱える人、元フルマラソンの選手、登山カメラマン等の体力充分な人材がこれに当たっているそうです。

しかし、平坦な道を目的地まで歩き、走るだけでなく、山を上がりながら、遅くなったのでピッチを上げましょうとカメラに言うと、急登をスピードを上げて登れる体力には驚きます。決して筋肉隆々でもなく、筋骨たくましいとも言えない、普通の体形の若者です。どこにそんな

体力があるのか、不思議なほどです。彼が言います。今の自分の体力よりもうちょっと上を目指して頑張ると、次の段階へ進める。

山岳作家、深田久弥氏のえらんだ日本百名山を踏破した田中君が、今度日本二百名山一筆書きに挑んでいるようです。自転車での心旅もいいのですが、楽しみにしています。

なんででしょう、日本文学全集とか世界文学全集と言ったものが、かつては色々なところから発行されておりました。ですから、あまり知識のなかった若い頃の私でも、その少し高価な本を手に入れば、ちゃあんとした文学をよむことができたし、読んで価値ある文学を読んでいるんだという安心感もありました。それがまったく未知なものであってもです。ですから、外国文学は全集があつてよかったと思つてます。しかし、世界文学全集は選ばれてくる作家が時にまちまちで、それも迷うところでした。

外国文学は、時に肌に合わず、理解の届かないところがありました。それをじっと耐えて読むのですが、つい投げ出してしまい、それではならじとまた読み直すことを繰り返しました。なんでそんなことをしてたのでしょうか。文学全集に選ばれているから、読むだけの価値がある物なんだ、これを理解できないのは自分が未熟だからだと思ひ込んでいました。なにせ必読の書とタイトルにあるのですから。しかし、学生時代の私に、全集全部を買うお金はありませんでしたから、迷いながら選んで買います。それも知らない作家を選んでです。定番の作家はまず置いて、ということです。未知なるものこそ読むべしと、思つてました。

そのなかで、アルベルト・モラヴィアなるイタリア作家の、無関心な人々、軽蔑、倦怠を全集本で読んだ覚えはあるのですが、これが困つた。たぶん、この三作とも、全部読み終えられなかつたと思います。いかにも内省的で退屈だったとしか思い出せません。しかし日本では大人気で、ほとんどの著作が翻訳出版されているそうです。

他に、ギュンター・グラス氏の ガラスの太鼓。これはノーベル賞作家の代表作ですから読み通さないと覚悟して読んだのですが、挫折しました。トーマスマンの魔の山は」読んだのですが。

もっと駄目だったのが、ヘンリーミラー氏の南回帰線、おなじく北回帰線。この、いかにも暴力的な小説は、始めの30ページでノックアウトされました。

しかし、その頃の文学全集にはまだロマンローランとかサマーセットモーム、ディケンズ、大デュマ、小デュマ、ヘミングウェイ、そしてトルストイ、ドストエフスキーといった人たちの作品が主流でしたから、まだ読めました。嵐が丘も夏の夜の夢も読みふけることが出来ました。ところが、最近も世界文学全集は出版されているそうです。筑摩書房、新潮社などの老舗出版社は、私でも知っている人たちの作品群を並べた全集を今でも出しているようです。ですが、河出書房になると、私が挫折したあたりから以降の作家たちの物を並べ、作品名を見ても解りません。時代が進んだと言えは簡単すぎる理由づけかと思ひます。全集も読まれなければ、只持っているだけのつんどく本でしかないのですから、今読まれる文学がこういったものなのでしょう。読む気力のある方、お読みになってみたらどうでしょう。

ご存知の方もおられるかとは思いますが、このアートプロジェクトがまだ続いていることに感動しております。

これは郵便局と言いながら、日本郵政株式会社、所謂郵便局とは関係のない、芸術作品なんです。つまり、2013年度の瀬戸内国際芸術祭の作品の1つとして久保田沙耶さんが制作した現代アートの作品であります。

いつかのどこかのだれか宛が集まる場所。

届け先のわからない手紙を受け付ける漂流郵便局
と言うのがコンセプトです。

この久保田さんと言う人は今も漂流郵便局で局員を務めています。郵便局の庁舎はかつての本物の粟島郵便局で、局長は実際に局長を務めていた中田勝久さんが就任しているそうです。

この漂流郵便局には届けたくても届けられない手紙が、今も各地から届いています。手紙の宛て先は、故人や未来の子孫、思いを伝えることのできなかった初恋の人、自分、長年の愛用品などさまざまです。特に故人宛ての手紙が多いようです。なぜそんなことがお前に解るのかっておっしゃるのですか。行けばその手紙が読めるからです。

それについて、すこし詳しく紹介しましょう。

漂流郵便局に届いた手紙は漂流私書箱に保管されています。漂流私書箱はブリキで出来ており、100個ほどもあります、それがピアノ線で繋がれていて、宙を漂っているようにみえます。まさに漂流私書箱。この私書箱は回すと波の音が聞こえます。

そうでした、この郵便局の所在地を書いておりませんでした。

〒769-1108 香川県 三豊市 詫間町1317-2

漂流郵便局留め

そして、あて先があれば、

○○○○様

とかけばいいし、

あの時のあの人様

でもいいのです。

この郵便局を利用しようと思う人は、このアートを理解しようなんて努める必要はありません。ちょっとした注意事項をまもればいいだけです。

いつかのどこかのだれか宛に手紙を出したい方は

以下をご了承頂き、下記の方法で漂流郵便局までお送り下さい。

1 送って頂いた手紙のご返却は出来ません。

2 手紙の著作権は「漂流郵便局」こと制作者久保田沙耶に譲渡して頂きます。

3 差出人様のご住所は不要です。

以上をご了承頂ける方は、

はがきに切手を貼って

下記住所までお送り下さい。

漂流郵便局にて直接投函することも出来ます。

営業時間内は窓口まで、

営業時間外または局員が在局していない時は

入り口左側の「郵便受け」にお入れ下さい。

この注意書きの中で、制作者久保田沙耶さんは大変重大なことを言っております。

送って頂いた手紙のご返却は出来ません。

手紙の著作権は「漂流郵便局」こと制作者久保田沙耶に譲渡して頂きます。

書いた手紙は、誰宛てかに関わりなく、普通は相手方に渡るものです。帰って来はしません。しかし、漂流郵便局へ届くはがきは、届くはずのないものです。差出人はあなた、でも、受取人はおりません。漂流郵便局は、私書箱に預かるだけ。しかし、返却はできないのです。

また、制作者久保田沙耶さんは、手紙の著作権 といっております。

手紙は極く私的なものです。自分の思いを或る特定の人に伝えるものです。時にはそれは告白ほどのものかもしれません。差出人の心の吐露であることもあるでしょう。伝えきれなかった悲しみかもしれないし、魂の震えかもしれません。でも、それは極私的なもので、もともと外へ発表するつもりなんかありません。ところが、差出人の意図に関わりなく、そのはがきは返却されず、著作権は漂流郵便局のものになり、漂流郵便局を訪れた人によまれます。ああこれは自分あてだと思った人は、もって帰ることもできます。

たぶん、そのはがきは差出人の極私的なもので、発表の意図のない物であるからこそ、それを読む人の共鳴するものと呼び起こし、そのことがアートになるんだとおもいます。

いや、差出人が、受け取られないと解っているはがきを書いて出した時点で、この現代アートは作品として何かを実現できているんだと思います。

届けられたはがきは、もう現代アートの意図する作品になっているのです。

当初、作者は芸術祭の最初の一か月で撤収しようと思っていたらしいです。ところが、芸術祭がおわっても連日200通のはがきが届き、閉められなくなったようです。そしていまは、島外への出張開局となる「漂流郵便局in高松空港」が開催されています。

晴れた空 そよぐ風

港で船のドラの音愉し
別れテープを笑顔で切れば
希望はてない 遥かな塩路
ああ 憧れのハワイ航路

お分かりと思います。オカッパルと呼ばれた岡晴夫の憧れのハワイ航路です。我々にとってもこの歌は懐メロであったと思うのですが、この曲がヒットしたのは何時ごろだったとお思いでしょうか。昭和23年でした。私の生まれた年ということになります。何か意外な気がします。もっと古いもんだと思い込んでおりましたから。たとえば夜来香・イエライシャンとか蘇州夜曲などと一緒にあって、戦前戦中の歌かとさえ思い込んでおりました。ちなみに夜来香は1944年に中国で、李香蘭の歌で発表されております。蘇州夜曲は1940年でありました。

それにしても憧れのハワイ航路は、何か曲想が違います。そのはずでした。この曲は、先ほども記したとおり、戦後でありました。戦後復興の頃の代表的な曲はリンゴの唄であることは周知の通りです。戦後ヒットの第一号、リンゴの唄。そよかぜという映画の挿入曲としてうたわれたのですが、いかにもあかるく、さわやかです。我々が映像で知っている戦後の日本は、こんな歌がふさわしいとはとても思えません。しかし、われわれには思いもつかない何かで、この歌がヒットしたのでしょうか。

そして、憧れのハワイ航路です。

波の背を バラ色に
染めて真赤な 夕陽が沈む
一人デッキで ウクレレ弾けば
歌もなつかし あのアロハオエ
ああ あこがれの ハワイ航路

常夏の 黄金月
夜のキャビンの 小窓を照らす
夢も通うよ あのホノルルの
椰子の並木路 ホワイトホテル
ああ あこがれの ハワイ航路

子供のころに聞いた明るい歌声が、なんとなく今も聞こえます。しかし、何ということでしょう。ハワイは真珠湾のあるところですよ。アメリカは、日本を敗戦に追い込んだ敵国です。昭和23年なら、まだ傷跡から血が流れているころだと思います。その日の食にさえ不自由だったころで

はないかとおもいます。それでもたくましく、いや、それだからこの明るい歌が流行ったのだと思います。

トキワ荘の軌跡

漫画はごく普通の、こどもが見るお楽しみ程度の、いわば正当に行く文化ではないものと思われておりました。少しシュールに言うと、アングラ文化であったり、裏文化だったりしました。今頃のいい方でしたら、サブカルチャーでしょうか。その勃興期に一つの奇跡がありました。後で見返すと、本当に奇跡でした。

昭和28年から29年にかけて、ぼろアパート、トキワ荘に一人の漫画家が住んでおりました。手塚治虫氏です。しかし手塚治虫氏は、1952年新築されたトキワ荘に53年から入居し、54年には退出しております。それでも、トキワ荘に手塚治虫が住んだことは、のちの奇跡の導入部になったと思います。

トキワ荘の中心となったのは、寺田ヒロオという漫画家でありました。この人の漫画を読んだ記憶があります。私は ぼくら が好きでしたが、そこにホープ君、週刊少年サンデーにスポーツマン金太郎を掲載していたと資料にあります。この二つ、私に読んだ覚えがあります。くわえて、1963年ごろの暗闇五段という柔道映画も知っています。しかし、暗闇五段以外は、印象が薄いので、はっきりしません。

それはそれでいいのです。奇跡はこの人が起こします。日本の漫画の中心になる人材が、トキワ荘に集まってきます。手塚、寺田以外に、藤子不二雄、鈴木伸一、守安なおや、石森章太郎、赤塚不二夫、よこたとくお、水野英子、山内ジョージ、向さすけといった人たちがトキワ荘に住んでいたメンバーです。これに、トキワ荘へ通ってきていた人たちが加わります。坂本三郎、しのだひでお、園山俊二、つげ義春、つのだじろう、永田竹丸、長谷邦夫、横山孝雄、と種々多彩な才能がつどっておりました。あのトキワ荘のぼろぼろ加減は自分にもわかります。それと同時期に建てられたであろうぼろアパートに、ただ家賃が安いというだけで2年住みましたから。部屋の入口の戸は引き戸で、目の高さにひし形の摺りガラスの明かり窓が入っておりました。廊下も木を張った廊下で、踏むと鳴るところがあり、部屋をでたところに共同トイレがあって、流しに水道の蛇口が2口。暗い廊下でした。非常階段もあるにはあったのですが、と私の思い出などはどちらでもいいことでした。

トキワ荘の青春と言う映画が先日あって、それを録画予約し、なおかつテレビも同時に見たりもしました。テレビの下で、レコーダーの緑の明かりがついていました。そうまでしてこの映画を見て、かつ残そうとするのは我々世代だけじゃあないかと、頭のどこか先で思いはしましたが、そんな思い込みを我々世代は抱え込んでいるんじゃないかと思いつきました。この年で漫画？とおもうのですが、それでもいいじゃありませんか。彼らの描いた漫画が記憶に残っていて懐かしいというだけでも十分な理由になります。

ぼろアパートで、まだこれからの才能がのたうち回り、苦闘します。漫画の原稿を描いて食べていけるなんて、夢みtainなことということは、NHKの朝ドラ、ゲゲゲの女房でよおくわかりました。水木しげる氏の時代はこのトキワ荘よりも一時代まえで、もっと大変でした。それから言って、このトキワ荘の若手はまだましです。もう次第に漫画家という職業が認知され、新しい才能が物色される時代に突入する前夜になっていたからです。そして漫画雑誌が月刊から週刊

になる時でした。漫画は大量に生産され、大量消費の読み捨てにされる時代になっていったのでした。

映画に、その時その時効果的な曲が流れます。霧島昇って覚えてはいました。曲名は胸の振り子。調べると作詞がサトーハチローで、服部良一作曲でした。ところがこれは昭和22年の曲です。つぎに、東京の屋根の下というのがかかります。これも服部良一。歌っているのは灰田勝彦。年代は昭和23年。そして、寺田ヒロオを家にかえるように兄が説得に来た場面では、別れの一本杉が流れます。子供のころ、聴いた曲ばかり。しかし、皆親の世代の曲とばかり思ってた曲でした。

こうしてその時代の雰囲気を経験的にかもしだす演出手段に、その時代の言い方でいうなら、流行歌が次々と流されます。あきらめましょ、あきらめましょ、わたしはひとりと、君待てどもという曲が、安物のラジオからと分かる音源で流されます。その時代と言っても、これも昭和23年の曲ですから、随分ずれていると思いますが、違和感がないのは私がよく知らないからでしょうか。

漫画なんて日向に出て来て威張れるもんじゃなれないと思われていた時代に、あの若い才能が、こうもつどってひしめいていたなんて、不思議でした。しかし、新漫画党などと大業な名前をつけて必死に漫画を描いて、時に出版社の倒産の憂き目にあい、原稿料も踏み倒され、それでも漫画にしがみついた。たぶん、この人たちは自分が何者かで、頑張ればきっと何者かになれると信じていたんだと思います。トキワ荘の人たちも、のちには大家になる人もいれば、あきらめて出て行く人もありました。あきらめた人を夢破れたというのはいくらでもあります。若さは傲慢にも、自分は何者かだと思い込んでいますから。自分にも覚えのあることです。わたしも自分が何者かだと思っていました。トキワ荘は新漫画党の話。でも、漫画でなくともいいし、若い人は傲慢でいいのです。才能はきっとある。だからどうしろというのではなくて、それこそが青春といたいだけです。こうして振り返るだけの毎日のなると、それが解ります。

いまスーパーヒーローは

私たち以前の世代のヒーローといえば、鞍馬天狗、清水の次郎長、月形半平太、自来也たちだろうとおもうのですが、どうでしょう。そして私たちの世代で初めてのヒーローは、なんと言っても月光仮面でありました。このことは以前にも書きましたが、このヒーローの人物像は、やはり国民性と時代を映していると思います。たとえば鉄腕アトムもヒーローでありましたが、時代が進まなければロボットなどのヒーローが生まれるはずもないのですから。しかし、ここに来て、かつてのヒーローたちとは違ったヒーローが生まれつつあるのではないのでしょうか。特にアメリカではそうであるらしいです。

アメリカのヒーローは先ずスーパーマンであります。私たちもテレビが家に来て、夢中になってみたのが、このスーパーマンでありました。

弾丸よりも速く、力は機関車よりも強く、高いビルディングもひとつ飛び！

空を見ろ、鳥だ、飛行機だわ、あっ、スーパーマン。！

そうです、スーパーマンです。！

遠い星からやってきた奇跡の男……、彼はクラーク・ケントと名のり、

メトロポリスの新聞社デイリープラネットの記者となって、正義と真実を守るため、

日夜闘い続けているのです。

このフレーズは今でも覚えています。調べてみると、当時の日本での視聴率は最高七十三パーセントであったそうです。

そのほかに、アメリカのヒーローというと、バットマン、スパイダーマンですが、いずれも異能の超人であります。さらに、彼らを特徴づけているのはその超絶的な能力だけでなく、超人的な腕力、飛行能力、増強された感覚、ある種のエネルギーを投射する能力等を併せ持っています。しかし、そのことを言いたいではなく、身の危険も厭わない強い倫理観をもって闘い、ときには自分自身が危険に晒されたとしても敵の命を奪う事を拒否します。この倫理性は、非常に特徴的と言えます。また、クラーク・ケントの同僚のロイス・レインを愛し、地球での育ての親を大事にしております。つまり、家庭と家族と恋人を大変尊重しています。これぞアメリカの倫理、価値観であろうと思います。スーパーマンの頭を見てください。きちんと七三に分けられて、髭もちゃんとあたっており、身だしなみは十分です。どんなに闘っても髪は乱れません。これアゾアメリカ最高のヒーローでありました。

ところが、新作のスーパーマンは悪であります。スーパーマンvsバットマン、無駄だ、人間は私に勝てない。これが今度の新作のキャッチコピーであります。

ヒーロー、もしくはスーパーヒーローに対する悪役のことを、ヴィリアンといいます。たとえば、バック・ツー・ザ・フューチャーの憎まれ役もこう呼ばれます。そういえば、現在進行している米大統領選の候補に、このいじめ役にして憎まれ役のモデルになっている人がいるようです。超絶的な能力はまだしも、大財閥で金には困らないことを自慢げに言い、身の危険も厭わない強い倫理観などとは無縁で、抗議する人をつまみだせと言い放ち、自分自身が危険に晒されたとしても敵の命を奪う事を拒否するなんて毛ほども思わず、ひたすら相手をこき下ろして非難中傷

することに終始します。アメリカの倫理観、良識とは全く無縁な人であります。そして、その人が注目され、他候補を圧倒して支持されています。

トランプとは皮肉な名前です。バットマンに登場する敵役、ジョーカーを直感的に連想させます。ただ、trumpは、切り札の意味で、日本でいうトランプは cards ではありませんから、当の本人は全く気づいていないでしょうが。しかし、今回の共和党の指名争いは、連日ニュースをにぎわせています。そして、そのニュースを見るたびに、不快感を感じざるを得ません。しかし、それについての解説にも、なにか違和感を感じます。アメリカの現状への強い不満、所得格差が著しく、1%の富裕層が60%の資産を独占し、大学生の10%が職に就けない現状への不満、既存の政治家への不信感、等々が評論家然とした人たちによってコメントされます。しかし、何か違う気がします。

トランプ氏の言ってることは、明らかな勘違いの類も多々あります。日本に米軍が駐留して、片務的ではあるが、安保条約を結んでいることは事実です。しかし、日本はその駐留費の七割を負担しています。ところがトランプ氏はもっと金を払え、米軍は撤退させるといいます。ところが、このトランプ氏の言ってることは、ほとんどの米国人の認識そのままです。普通の米国人は米軍が日本に駐留していることさえ知りません。他の暴言にしても、彼の言ってることが普通の米国人の認識です。つまり、かれの言ってることは、彼を熱狂的に支持している人たちの本音だということです。本音を声高に言い、人種差別的暴言をまき散らし、出来もしないことを声高に言い立てる。建前のアメリカの良識はもはや通用していません。スーパーマンは見捨てられました。スーパーヒーローに対する敵役であったはずのトランプ氏が、いまやヒーローになりました。彼はダークと冠されてもヒーローなんです。そして私たちは、米国の本音を知らなければならぬ時代になったことを知らなければなりません。

善通寺本堂前の、石の太鼓橋の直ぐ向うに立つ山門の左右に、阿吽二体の仁王様が鎮座しています。今でこそ亀甲型の金網で覆われていますが、子供時分これは日本一の仁王さんだと思い込んでおりました。大きさも姿かたちも一番で、その裏のわらじも日本一大きいのだと信じ込んでいたということです。今もこの仁王さんは、子供にそう思わせるだけの迫力があると思います。ところが、これが井の中の蛙で、これより大きなわらじは沢山あるし、仁王さんの最高傑作は東大寺の仁王様だとわかってしまったことがあります。奈良、東大寺への修学旅行のときでした。その時私はなぜか釈然としない思いで、不承不承認めたのを覚えています。さすがに大迫力の仁王様でした・しかし今でも、善通寺の仁王さんは、

うちの仏さんは小さいけど心がこもってはる

ほんまやったら、国宝なんやけどなあ

という昔のコマーシャル通り、傑作も傑作、大傑作だと思ってます。今はあまり見返りませんが、見ると怖いですよ。

この山門の手前、南大門から這入ったところに大日堂、薬師堂、そして五重塔や鐘突き堂のある広い境内があります。以前にも書いたことがあります。縁日には、ここに見世物小屋が立ちました。その一つが木村大サーカスでした。檻の中での猛獣使い、空中ブランコ、そして父がその迫力を大絶賛していたオートバイの曲乗りなど、びっくりさせられるものばかりでした。ピエロを見たのもこのときが初めてで、ピエロが一番上手な人がやるんだと、これも父に教えられました。ピエロはいつもドジで失敗ばかりして、怒られ追い掛け回され、足を引っ掛けて転倒します。そんなピエロが一番上手なんでしょうかと子供心に思いましたが、そんなピエロの悲しみも何となく解ったりしたような記憶があります。

しかしそんな見世物小屋も、他のところは見せてくれませんでした。それが、小屋の前で盛んに呼び込みます。なんと言ったのか覚えてはおりませんが、喉を絞ったしゃがれ声は、暗くて妖しいものを呼び起こさせるに充分でした。しかし親はあんなインチキなもの見ちゃいけませんと、取り合ってくれません。みたいなあ、どんなだろう、多分そんなかおをしてたんでしょう。ぼん、みたいか、と法被を着た小屋の男衆が声をかけてきて、頭をなでてそっと入れてくれました。ちょっと怯えた気持ちになりながら好奇心が先にたち、男衆の押し込んでくれた小屋の闇の中に立って明るく照らされた先をみると、なにやらおろどおどろしい口上があって明かりが窄められ、首が伸び、日本髪の女の顔が宙を自在に動きます。なにか仕掛けがあったのでしょうか、実は私、この

ころから近眼で、そんなもの解りません。ほんとうに首が伸びたと思い込みました。他人はいても、父も母もおらず、恐ろしくて強張りつきました。出し物はそれが最後だったようで、私はほかの人に付いて小屋をそろそろと出ました。さっきの男衆はもう小屋をたたむ用意をしておりました。その横を気付かれないようにそっと通りぬけ、首の伸びる怖い場面をもう思い出すまいと一目散に家へ逃げ帰りましたが、そんなものみたとはいえませんでした。

すこし大きくなって、小遣いも多少もらえるようになると、好奇心を押さえられず見たのが蛇女でした。

親の因果が子に祟り

と、そうでした、こんな決まり文句で呼び込んでいたと思います。手足の短い小人の人、蛇を食う女の人、なにかそんな奇形なものを見世物にしておりました。今なら考えられないことですが、それはそれで妖しい世界を作っていました。くたびれた背中の刺青男、小人の力自慢、そして、もろ肌脱いで乳首だけ隠した女の人が平気な顔で蛇を掴み、色々な所作のあげく、ぐいと引き伸ばした蛇の首を喰いちぎって血を啜って胴体を飲み込み、また引き出して見せます。私の口の中が蛇の血で一杯になったような気がしてはきそうになりました。それで、途中から逃げ出し、外に出ますと着物の袖に手を通し、口元の血を拭いながら先ほどの蛇女が小屋の前に出てきて、出番になった男に代わって呼び込みをし始めました。口いっぱい溜まっていた唾液をつい吐き出した私は、もう普通に戻った女の人顔に、すたとんと腰を抜かしそうな思いをしました。

見世物小屋なんか入ったらいけません。連れて行かれてひどい目に合わされるんよ。

親にはそういわれました。あの白い乳房を見たとは言いませんでした。

仕事、やめるん？

そうなんよ、やろうと思えばずうっとでもできるけど、何にも出来なくなってやめるってみじめやろ？ぜいたくいってるんかもしれんけど、まだ余力があるうちにやめようとおもったんよ。

で、やめてなににするん。

かんがえてない。**さんは、琴平のスポーツクラブにいきょんやろ？

やめた。

なんでえ？

はじめはおもっしょかったんやけど、ずうっとおんなしことばかりで、機械の上ではしっても、ねずみ、ももんが、いやなんやったかなあ、モルモットが輪っかのなかで走ってるみたいに思えてきて、なにしょんやろっておもってしもたわ。

プールは？

プールは夏、よいかよったけど、なつだけやで、おもっしょいんは。こおんな水着もこうたけど、高かったわあ。キャップも。ほんでもなあ、あんなん、マルナカでこうたら、半額以下やわ。それに冬はよう行かん。さむうて。それに疲れるしなあ。ヨガはいったいし、エヤロなんかは脚が痛とうなるし。ぴっちぴちの衣装なんかよう履かん。スタイルのええ、若い子ばっかし、跳んだりはねたりしてて、付いてけへんわ。

今もいきょん？

やめた、3ヶ月でやめた。わざわざガソリン焚いて20分かけて行くの、大儀いなくて。

ご主人、一緒にいきよったんとちがうん？

あの人是最初から行く気なし。それに、銭かけて太らしたのに、銭かけて痩せるんかっていいよるしなあ。

ほんで、何しようるん？

ちょいちょい魚つりにいきよるわ。あと友達がさそいにくいて、どっかにいきよる。ゴルフの打ちっはばなしやら将棋さしにいきよるんとおもうけど。ほんでも、おったらおったで、ご飯つくらんといかんし、うっとしばかりやわ。おらんほうがたすかる。ほんでもなあシルバーやわには登録しとるんでえ。

ええやん。

ほんだけど、ホテルの掃除やら、ゆうてきて、さっむい冬に長靴はいて、寒風にふきっさらされながら外回りのコンクリート、水かけて棒ずりでごしごしこすらされて

、震え上がったわ。この前なんか、まんのう公園の草抜きゆうてきたけど、前いっぺん行って、えらい目におおた。火に焼けとうないんで、おっきよなひさしの帽子こうて首にタオル巻いて、腕や顔に日焼け止め塗って、完全防備で行ったら、あついあつい。汗だらだらになって、一時間ごとにポカリのんでも目えがまわりよるんよ。ほんでひょっと横見たら、公園の若い姉ちゃんが涼しげなとこでぺちやくちや油うってるんよ。なんや腹立って、このくそ暑いのに、こっちは草抜きやぞお、あんたらがやれ、とっしょり殺す気かあ、おもて、次の日はいかんかった。

そらそうやわなあ。・・・、ほんでも、なんやもったいのうて、いちんち、3時間ぐらいで、週3日ぐらい働きにいけたらええな、おもとんやけど。

あるでえ、マルナカのレジうち、あさ10時から昼1時まで、ゆううのが。

あれは・・・、人と顔あわさんといかんやろう。ちよとつらいわ。

そんな贅沢ゆうたら、なんもないわあ。

ほなけんど、あんた、なんかしょうるん？

いいや、なんもしょうらん。けど、書道教室にはいっきよる。よおけとっしょりが来て、盛況やで。いまは子供より何倍もとっしょりがきて、習ろとる。これはつづっきよるから、ええなあ、おもとんよ。

書道って、ええ趣味やん。うちの子も子供んとき、書道やとったけど、わたしも行こか。

ええでえ。

ほんで、どんなんかつきよるん？

いろいろ。この前は巳、新年おめでとうございます、賀正、元旦。年賀状すんだら、お年玉、と、お年玉やる子の名前。夏は、お中元、冬は、お歳暮、そなん習らうんよ。

へえ、実用的なんやなあ。

こう、細筆もって、手え震えるんを押さえつけて書つきよるんよ。ええでえ。

私も、いこか。

そうしい。月謝、やすいでえ、一ヶ月3千円。琴平のスポーツクラブが4800円。スポーツクラブは風呂代込みやったから、そう高いとは思わんかったけど、お習字は教養やろ？かっこええやん。一緒にいったら、ええわ。

ほんまにやめたら、そうするわあ。

ほんま、なんぞしょうらんと、いちんちが長いでえ。お金もないし。ちびちびと、つましゅう暮らしております。

こっちもこれから、そうなるわあ。

ほんま、これが20年続くんやでえ、なんぞしょうらんと持たんわあ。

そうなんや、二十年つづくんや。つい、わたしも思ってしまいました。

Eテレの勧め

そうです。すこしのんびりした気持ちになりたいと思えば、Eテレをみましょう。Eテレって、NHK教育テレビです。つい熱心に新聞のテレビの番組表を見てしまいました。いま、朝六時のラジオ、基礎英語1、2を楽しみに聞いておりますが、テレビはどうなんだろうと思い、はじめて全時間帯を見てみました。今までは夜の九時からの料理番組を、一そうです、料理番組なんですーときおり見ていたぐらいでしたが、どうでしょう、面白そうな内容の番組が多々あるではありませんか。語学学習なんてことにこだわらず、番組表をつぶさに検討してみると、朝のラジオ体操から英会話、健康相談、幼児向け番組、ニュースを手話で伝える番組、さらには退職中年むけの趣味の講座と多種多彩な番組がごろごろあります。高校講座まであって、一日テレビの前で座りっぱなしでもいいような気がしてきます。第一、非常に便利に感じるのは、録画できることです。予約さえしておけば、ラジオより簡単に残して置けます。新聞を見ると一応ラジオも番組表は載っていますが、半ば手動で録音しなければなりません。ハイテクじゃないですよ。ビデオ録画ならテレビの画面で番組表が見られ、新聞の表のように老眼鏡を、一いやあさびしい響きですが、老眼鏡を使わずとも見えますし、録画予約も簡単に出来ます。ラジオもいいけど、テレビもいいです。内容も多彩。わたしはNHKの回し者ではありませんが、Eテレを再認識しました。

で、どんな風にやっておきましょうか。

短くしといて。横は刈り上げて、上は・・・、もう切るほど無いか。
いえいえ。

だいたいやね、私、散髪って嫌いやねん、わるいけど。こうして、じっと座ってるんて、人生の無駄使いをしているような気がするんよ。

—散髪屋さんに失礼やろ、それは。と私は思う—

そう思ったら、このごろ、もうすぐ散髪屋さんに用がなくなりかけてきたわ。

散髪屋さんも沈黙。落ちをつけたのか。

こうなってみると、案外困るんよね。頭あ、ぶついたら。頭皮に直接当たって、傷だらけや

。

夏は涼しいとおもうやろ。ところがどっこい、直射日光が、直射してきて、じりじり焼いて熱いんよ。日焼けするんのちがうかって思うわ。

冬は寒いし、そっちの人、風邪引かんように、寒むない程度に切ってって言わはってたけど

、

(わたしのことである)

わたしら、横は切り過ぎんようにしてもらえるけど、上は切るもんが始めからのうなってるから(無くなってるから)スースーで、風邪、引きっぱなしや。

つい、わたしは

すんません。

と謝ってしまった。すると、ちらっと私をみるのが、鏡の中で解った。

年、一緒なぐらいやけど、あんた、あってよろしーな。

いやいや。

—あんまり関わりたくなかったので、生返事ですませた。—

わたしら、早ようから薄なってしもうて、嫁はんから詐欺や言うて、えろう責められて、いまでも頭上がりませんわ。そやけど、同級生なんかにあうと、昔は老けた老けたとからかってたやつが、今追いついて来よって、わたしらより老けて見えるやつもおりますよ。ついこの前なんか、お前若いなあ、年なんぼになった？と聞かれよって、肩、どついたりしましたわ。同い年

やろって。

よくしゃべる。みると散髪屋の兄ちゃんが、鋏をもってやりにくそうだ。それでもかの人の自虐ネタはつづく。

頭、洗いますか。

兄ちゃんが訊く。

洗うほど、ある？こわーい嫁はん待たせてるから今日はええわ。

なんか付けましょか。

一緒や、付けるほどあるか？

なんか、むっとした風に聞こえた。店員も一応マニュアル通りに訊いているんだろうが、あの頭では気を悪くするよねと、思ってしまう。

洗いましょか？

と私も聞かれ、軽くうなずく。こちらへどうぞと導かれ、隣の人と離れた。洗髪と言っても、形だけだから早い。元の席に着くと、あの人が、お金を払っていた。

60才以上でしょうか。

この頭が眼に入らぬか、てなもんや。

店員も苦笑いするしかないようだ。

210円お引きして、1260円です。

そう。ありがと。せっかく髪型整えてくれて、きれいにしてくれたのに、帽子かぶったら台無しや。

店員は愛想笑いだ。

そやけど、帽子ぬいたら、やっぱりなあって顔しよる。はい、ありがとさん。

ああ、最後まで自虐ネタだ。続いて、私もお金を払い、外へ出た。すると、先の人が奥さんらしき人と話していた。

えらい短く切って。もうちょっとカッコつけたらよかったのに。やっぱり安いところはあか

んな。

ええんや、60過ぎてたら安してくれるんや。安してくれるんなら、ジジとでもババとでも呼んで、や。

私はつい、吹き出してしまった。奥さんが、もう！と言いながら、かの人腕をぴしゃりと叩いていた。

また春が来ます

不安定な季節模様ですが、この時期私はいつも軽い後悔の念に駆られます。一度は行こうと思っている奈良東大寺のお水取り、修二会に、今年も行けるのに行きませんでした。いつも迷うのです。仕事をしているときから休んでも行こうかと思ったり、結局仕事があるからとあきらめたり。ことしもその癖が出ました。逡巡してる間に一步おくれて、間にあわなかったのです。宿は一杯だし季節は寒いし、とこんなことを言っていたんでは、来年もいきそこねるんでしょうね。だから今から妻に宣言しておくんです。来年はいくぞ。去年もそういてたね。これが答えです。でも、来年は3か月前から奈良ホテルに予約をいれ、切符は1カ月前には購入できるからと計画を立てておこうと思っています。カレンダーに丸して、・・・、来年のお水取りって何日から？妻に訊くと、自分で調べてよと帰ってきました。今度そうしようと思っています。で、また忘れる。繰り返しです。

実は、奈良はもう何回も行ってます。本当は奈良が目的地ではなかったのに、たまたま京都に行って、そちらが何かの都合で具合が悪くなり、仕方がなくて、なら奈良へでも行ってみるかと出かけたのでした。ですから、奈良にはあまり期待しておりませんでした。やはり京都と思い込んでましたから。それに、奈良は行きにくいところです。私達田舎者は、公共交通機関と言えばいまだに、国鉄 と思っていますから。で、まず国鉄と思い、いやいやJRと頭の中を書き換えて、それから経路と乗り換え順をかんがえてしまいます。ところが京都からは私鉄しかない。そう思うと戸惑うのが田舎者です。しかし、近鉄に乗っていきました。そして、JRの駅まで歩き、あたりを見回したのです。もちろん、奈良の観光通りはJR駅前から続きます。店の人もあまり押しつけがましくなく、上品な声のかけ方でこうかんを持てました。しかしそれでも時間を持て余し、見物する予備知識もなかったので駅の案内所で観光バスをさがし、それを頼んだのですが、それでも時間があり、駅の案内所でもらった地図を頼りに行ったのが、お菓子の神様の神社でした。後に何度かニュースでもその神社の話題は見たので、懐かしく思ったことでした。そうした後乗った観光バスが、二階建ての先頭の席に座るということだったので、最高の解放感で観光が出来ました。そして、そういった観光の最中も二人の間で話していたのが奈良女子大の事でした。あんな学校に行ってくれるといいね。日本一小さい大学なんだってね。あの神社のもう少し先にあったみたいだよ。縁がないわ。そう話した学校に実は縁が出来て、娘がそこへ入ったのでした。そんな事情ができ、私も何度か奈良を訪れることになったのです。といっても、私は仕事で無理は出来ず、妻が何かの旅に出かけました。それでも二回ゆくことが出来ました。秋と春の連休でした。妻はもう何回も来ているので、興福寺も春日大社も東大寺も行き飽きて、奈良公園では鹿も珍しがりません。はしゃいでいたのは私だけ・東大寺へは。近いんだから自分で行ってきたらと言い放たれました。ええ、行きました、一人で。行って、参道で立ってる鹿の角をつかみ、突きかかれそうになって、鹿の角を触ると危険ですのアナウンスを後から聞きました。そうなら早く言ってくればいいのかと、独り言を言いながら、土産物売り場でパックに入った草餅風のお餅を買い、娘の下宿に帰ったのです。二月堂は見ておきました。夜の闇の中の、あの火ぶり松明の荘厳さはぜひとも見ておきたいものの一つとっておりましたから、どこで行われ

ているのかを見ておきたかったのです。

親はバカですから、子供が行ったところへ出かけてゆきます。娘が行かなければ奈良には縁がなかったと思います。いくら天平の美少年が素晴らしくとも、興福寺まで、それだけでは出けなかったでしょう。法隆寺も聖徳太子も、奈良の鹿もです。子供が卒業して、もう何年にもなります。すると奈良には足が遠のきました。奈良のお水取りへ行けないのも、多分そのせいだと思っています。

特別な桜

昨年の桜は、2月から仕事の整理にかかって気が付きませんでした。5月の下旬には白内障の手術が決まっておりましたので、気が気でなかったこともありました。たかがこれしきとおもいたかったのですが、やはり自分の事となるとべつものです。しかも長く放っておいた白内障でしたから、難手術になりそうと医者に言われておりましたので余計心配でした。それもあって、そんなことなど役にも立たないかもしれないとは思いましたが、漢方薬だの眼球体操を手術の日までひたすら続けておりました。それかこれか、手術は一応成功しましたが、手術の後遺症の乱視に今も悩まされております。眼鏡は老眼鏡と近眼鏡、この二つをいつもバッグに入れて持ち歩いております。

今はそんな日常に追われ、三寒四温にも追いかけられ、明日は彼岸と思いながら暮らしております。それから、父は今の私の次の年に逝ってしまったと、いつも脳裏に繰り返しています。父が逝ったのは9月でした。台風が吹き荒れ、父の家で家族だけ泣いておりました。その年の5月に病院から入院日が決まったから入院するようにと行ってきました。その連絡を受けたのは私です。それを父に告げると、まるで覚悟の決まった人のように強く、解ったと言っておりました。そんな年でしたから、その年の桜なぞ気も付きませんでした。ですから何も煩わされず見た桜は、今の私の年の桜だったと思います。父は父、私は私の思いでそれぞれに桜見物に行ったと思います。父はまだ現役で働いておりましたから、日程が合わなかったのです。あの年の桜は覚えております。一緒に行けばよかった。

いま、自分に老いを感じ始め、先を思うと、父の事だけでなく、今年の桜は特別の桜と思います。春の嵐に、いざ生きめやも、と思っています。

年取った私の最後の犬

嬉しいことに、もう4時半には外が明るくなるようになりました。夜も10時になると眠くて寝床に入ります。しかし4時には起きてしまいます。ですから4時半に明るくなってくると、5時を待ちかねて犬の散歩に出かけます。その直後、5時10分には、雲さえなければ朝日が差し始めるのですからたまりません。人影も見ることなく、何物にも煩わされず犬を引きずって散歩させます。この犬ももう15歳を超えました。人間でいえば

$$20 + 7 \times 13$$

で、ゆうに100才を超えることになります。犬の金さん銀さんです。ですから、老後を考えてやらなければなりません。金さんの名言通りです。ところがやはり年取ったせいか。散歩させてもリードに引っ張られてしか歩けません。首輪が前へずれて、嫌そうに小走りについてきます。人通りのない、車も心配ないところにくると、犬を前へやって自由にさせてやりますが。とぼとぼ、よろよろしか歩きません。この犬が年取った分だけ、私も年取りました。跳んではねて餌をねだり、遊べと吠え付いたのがついこの前でした。愛情表現で、飛びついてべろべろ顔を嘗め回してくるのがこの犬でした。私はそれをさせませんでした。今もこいつは、私にはそれをしようとしません。学習したことをずうっと覚え続けて、超えては来ません。したいようにさせておけばよかった。老いぼれた犬を見ると、可哀そうになります。柵を超えず、域を守るように躡けたのは私ですから。いま撫で回し、抱き上げて連れて帰ります。怖そうに地面をのぞき込み、不安でたまらなさそうにしますが、足元がおぼつかなくなってますから、帰りは歩くのが辛いのです。

詩の話です

死んだ男の残したものは 一人の妻と一人の子供
他には何も残さなかった 墓石ひとつ残さなかった

死んだ女の残したものは しおれた花と一人の子供
他には何も残さなかった 着物一枚残さなかった

死んだ子供の残したものは ねじれた足とかわいた涙
他には何も残さなかった 思い出ひとつ残さなかった

死んだ兵士の残したものは 壊れた銃とゆがんだ地球
他には何も残さなかった 平和ひとつ残さなかった

死んだ彼らの残したものは 生きてる私生きてるあなた
他には何も残っていない 他には誰も残っていない

死んだ歴史の残したものは 輝く今日とまた来る明日
他には何も残っていない 他には何も残っていない

何も言わなくとも、この詩だけで解ります。詩はすごい。

私の好きなテレビ番組です

NHK好きのJAZZ好きな私が、美の壺のBGMを聞き、そのセンスの良さに気付きながら、なんとなく見逃していたのはちょっとおかしい気がしますが、たぶんそれはそのJAZZ自体がちょっとなじみのない、古いものだったからじゃないかと思っています。アート・ブレーキーのモーニングは知ってます。テイクファイブはリアルタイムで聞いています。これが一九五八年。モーニングはその前の五七年。たった一年違いですが、実はそのころ、あんまりジャズがわからなかった。なにしろ私はそのころ十歳ですから。

一九五〇年代といえばビ・バップからファンキージャズに脱皮してゆく過程だったはずですが、そんなジャズ史を語る口調で語ったところで音楽はわかりません。チャーリーパーカーがモダンジャズ(ビバップ)の父であるならば、彼がなくなったのが一九五五年でしたから、そこからまたジャズに新しい波が起こっていたはずです。黒人の音楽であったジャズが白人のスイングジャズになり、ダンスの伴奏音楽担っていた時代に、次のジャズを担う多彩な才能が萌芽し、新しいものを模索していたのでした。モック、リチャード・チェンバー、アート・ブレーキー、キャノンボール・アダレーなど、なお名をあげればいくらでもあげられる時代でした。

しかしスイングジャズだから古いと、切り捨てるほどのことはありません。ルイ・アームストロングもグレン・ミラーも、カウント・ベーシーも今だって素敵じゃありませんか。

マイルスもこの時代に生きています。死刑台のエレベーターの音楽を担当し、危険な関係にセロニアスモンク、モダンジャズカルテットも何だったかの映画音楽を作っています。危険な関係のブルースは先のアート・ブレーキーとジャズメッセンジャーズのサウンドトラックです。私、なぜかこの映画の予告編を見てるんです。死刑台のエレベーターもです。映像はもう忘れてますが、危険な関係の予告編での、この圧倒的なエネルギーのサウンドは忘れていません。ところが死刑台のエレベーターでは、実にきれいな女優さんの、ささやく声とそれに重なるマイルスのトランペットをおぼえているのです。実に勝手なもんです。そのころから、それをジャズと意識せず、なんとなくカッコいいと思い始めてたようです。話がずれました。

NHK好きの私は、こういったBGMの質の良さから見てるところもあります。特にBSはこころたびのテーマソングが心地いい。ビブラートをかけない、まるで管楽器のような歌い方をするテーマ曲が、朝のさわやかさに合っていて心地いいのです。小さな旅は、私がクラリネットで一番先に練習した曲でした。これは両方の指を全部使う運指を要求されるのですが、難曲ではないという変な曲です。

たとえば大河ドラマは、最初から大曲であることは間違いありません。しかし、見てる分にはあまり覚えていないのがBGMのほうです。東京ラブストーリーは、ここぞという場面になるとテーマ曲が鳴り響きます。こまでされると、すこし食傷気味になります。ところが何気ない番組なのに、NHKではこうした心地よい選曲がされています。そんなところに目をやって、ちょっと聞いてみてください。NHKの回し者でした。

仰々しい表題になりましたが、放送大学が見られるようになったので少し興味を持って見てみると、「方丈記」、「徒然草」、「奥の細道」を、日本人の精神風土を形成した文学として挙げておりました。無常観、自然と連れ添って生きる、隠遁生活、旅の空、と色々な言葉が思い浮かんできます。寂しい諦めとともに生きている色調の随筆ばかりです。

日本三大随筆と言え、枕草子と方丈記、徒然草となって、奥の細道は違った分野のものとされているようです。それにしても文学は、時代の精神を表象したものと思いますので、文学が後の世の精神を作っていくほどの力はないのではないかと思います。方丈記ならば、同時代の、平家琵琶によって語られてきた平家物語の方がより遥かに力を持っていたと思いますし、徒然草も知識階級の人しか知らなかったのではないのでしょうか。奥の細道は庶民が俳諧を愛好するようになっていた時代のものですから、識字率の高かったその当時には、よく読まれたと思います。しかし一般庶民は、

仮名手本 忠臣蔵をよく知っていたはずで、論語を読むよりもっと武士道精神を理解したと思います。しかし、葉隠は、武士道精神の規範のように言われていますが、元々は鍋島藩の中で、それも最初は禁書とされていた危険思想扱いの書でありました。三島由紀夫はなぜ葉隠に心酔していたのでしょうか。自ら葉隠入門という本まで書いております。葉隠が禁書扱いになったのは、その狂信性にあったのではないのでしょうか。そこまでの激しい自己否定をして、なにを主張しようというのかと問いたくなる思想ではあります。そんな狂信性が三島の美学に叶ったのかと思います。武士なんてもとは荘園の武装した自衛集団でしかなかったのだし、応仁の乱の頃の足軽なんかは盗賊よりたちの悪い凶暴な連中で、戦争がなくてあぶれた時は、徒党を組んで好き放題に略奪の限りを尽くし、戦時は胴巻きだけで身を守って武器を振るい、集団で軽快に走り回って殺戮しまくる、源平の頃の闘い方を一変させた凶悪な武力集団でありました。戦国の世も、自己の立身出世のみが中心で、君に忠、なんて鼻先で笑うほどのことにしかすぎず、逆に、山中鹿之助、楠木正成がもてはやされたのも、そのような風潮を否定したかった統治者の思惑があったからにすぎません。統治派の石田三成と武闘派の賤ヶ谷七本槍の対立は、それを実証しております。そのことに気付いていたのが徳川家康で、彼は論語に目をつけ、倫理と礼で武装集団を骨抜きにして官僚化するために、武士道を提唱しました。忠臣蔵はその完成した姿でありました。それゆえ、その完成度を増すためにも、全員切腹させたのです。君主のために命を投げ出して忠を尽くす、その最後の形を整えさせたのが切腹でありました。葉隠はさらに上を行き、陽明学の狂信性を身に

まっています。どちらにしても、江戸の世に平和を維持させた統治思想でありました。

また、神社仏閣は古ぼけた厳めしい建築物でしかないと、今の姿を見て、ついそう思ってしまいましたが、かつてはそうではありませんでした。日光東照宮、平安神宮、金閣寺、中尊寺、厳島神社等を見ればよくわかります。宇治の平等院をCGで再現していた番組がありましたが、そこは極楽の再現でありました。寺々も神社も朱に塗られ、奈良の大仏様は全身金箔で覆われておりました。それが年月を経て、古さびた姿の方が自然で美しいと思うようになったのは、侘び寂びの文化をおこした利休の茶道からだとおもいます。秀吉の茶は、きんきらきんで、成り上がり者の茶は蔑まれるようになりました。残ったものが本当の文化であるならば、侘び寂びの茶が本来の日本人の文化なのでしょう。葉隠ではなく、荻生徂徠、新井白石の武士道も日本人の心の底辺に残り、礼節を重んじる心になりました。これも文化です。

しかし万葉の歌には、色々な思想に捉われない心が歌われておりました。様々な階級の人が、仏教や孔子からも自由で、伸びやかに歌っております。さらに、知識や教養など持ち合わせぬ人が素直に歌った今様が、梁塵秘抄でした。

私は歴史の表舞台に出てこない人たちが歴史を作ってきたと思っています。歴史の表層に花開いた文化の事など何も知らず、ただ黙々と毎日生きて積み重ねて作ってきたもの、それが今の日本の精神風土であると思っています。月を愛でることも知らない、桜の花の下で飲んでもらうことを楽しみにしていた、諸行無常の理をあらわすと聞いて涙を流した、だからこそ何のものにもとらわれていない人たちの積み重ねです。

お父さん、やっぱり右翼？　そういわれました。

いや、世の片隅で、生きててよかったとそう思いたい庶民です。所詮歴史は勝者のものです。捨て台詞でしょうか。

時々自分の思い込みで書き込んで、ひょっと首をかしげたくなるのではと、後で反省することがあります。前回だったかの テープ BASIC なんてもうじゃないでしょうか。これが分かる人は逆に年齢がわかります。ワンボードマイコンのあと、いろいろなマイコンが出てきました。マイクロコンピュータを縮めてマイコンですと、ここでも説明が要るでしょうか。パソコン黎明期には日本の電気メーカーが競っているいろいろなマイコンをつくっておりました。その最初のものがワンボードマイコンで、数年前なにか雑誌の付録形式で復刻版が発売されたことがありましたが、たしかあれでも 8 bit の CPU だったと思います。このワンボードマイコンも多々あったようですが、一般的に普及したのは、当時は日本電子とってたと思います、今の NEC がトレーニングキットとして発売した TK80 が最初でした。高価でした。そのころで八万強のめだんでした。それが欲しくて、仕送りの額を考え、こうしたら買えるかと思ひ悩みました。七個か八個の LED が乗っており、一六進数をテンキーのようなものから直接入力して LED を光らせるだけのコンピュータでした。それでも目覚まし時計のプログラムとか、ストップウォッチのプログラムがあったのではなかったかと思ひます。これは整流器は別売で、これも高かった覚えがありますが違っているでしょうか。

それからほんの少しで 8 ビットコンピュータは百花繚乱になります。その先駆けがシャープの MZ80 でした。そしてそれを動かしたのは、機械語、マシン語、といった記号のような言語、マシン語での開発を容易にしたアセンブラも走ったはずですが、しかしそれよりなにより、BASIC の出現でした。これはは画期的でした。インタプリタでしたから、逐次プログラムが走り、誤りがあるとエラーが表示されてプログラムが止まります。そうするとまた頭を悩ませて修正し、`run**` と行番号を入力すると、そこからまたプログラムを走らせることができました。そのあたりがコンパイラにない利点で、BASIC はコンピュータプログラミングに素人が参加することを容易にした革命でした。そして、これを読み込ませるのが テープ BASIC でした。ピーゴゴと音を立てて読み込んでゆきます。10 分とか 15 分のカセットテープでしたから長らくかかりました。そしてテープは作ったプログラムの記録装置でもありました。気の長い話です。

とにかく私の最初のパソコンは シャープ MZ80B でした。この B はビジネスの B です。グリーンディスプレイが目にはたいがい鮮やかでした。これにスロットマシンのゲームを走らせて遊んでました。どうやったんでしょう。パソコンに付いてきてたんでしたか。それとも何かの雑誌の 16 進数表記のプログラムリストをうちこんだったか。わたしはそのためにプリンターも買いました。セイコウエプソンのドットプリンタでした。ガヤガシャでしたか、ジジジでしたか、何ともうるさい、しかし、横に紙送りのための穴の開いたロール氏になにやら規則正しく印刷されて出てくるのを見ると、それだけで楽しいものでした。ごぞんじでしょうか、その時のメモリーって 64 k しかなかったんです。ギガバイトじゃなく、キロバイトです。これに BASIC を読み込ませ、残り 32 K を作業領域としておりました。そのため環境設定も自分でいじり、CIVFIG、BUFFER なんて言葉がマイコン雑誌に踊ってました。

そのあと ROM BASIC を搭載したマイコンが出てきました。日本電子 PC8001、ゲーム機

として廉価版のPC6001です。それからはNECの独壇場でした。機械自身はシャープとかほかのメーカーのものが早かったのですが、ROMBASICは読み込みが早かった。そうでした、NECはインテルのCPU、シャープはモトローラ だったと思います。あのアップルと一緒に。モトローラは描画が早かったと覚えています、どうでしょう。そしてNECが独走したのは一太郎のお蔭もあったと思います。なかなか優秀なワープロでした。

そういった世の中の流れに逆らって、根がへそ曲がりですから、私はそのころMC用のフロッピーディスクドライバーを高知の人から譲り受けました。月刊雑誌マイコンのゆずります、譲ってくださいという欄で知った人からでした。フロッピーを二枚差すでかいものでした。ご存知でしょうか、5インチです。3.5インチのフロッピーではありません。ペラペラのでかいフロッピーががしゃがしゃいいながら回る様は同じ読み込みでもカセットテープよりは早くて感動したものでした。

その当時、善通寺市は市民活動にマイコンを加えてくれて、市民会館にマイコン講座を開いてくれてました。ところが市の財政がひっ迫してきて、市民講座が開かれなくなり、結局有志だけで同好会を作りました。その会の名称を ゼンマイクラブとしました。善通寺マイコンクラブですが、ゼンマイおもちゃのようなイメージでぎりぎり動くマイコンクラブといったニュアンスを込めました。そのクラブで一応勉強したのがBASICというわけです。しかしそのクラブも長くは続かず、会員がどんどん減って自然消滅しました。なぜだったんでしょう。たぶんプログラミングって地味な作業だったからということと、たとえパソコンって目新しい万能の機械でも、自分の能力以上のことはできないという現実につい気が付かされたからではないでしょうか。コンピュータってものの限界は自分の能力以上のことはできないってことにあると思っています。スーパーコンピュータの計算速度がどれほどであっても、アプリがなければただの箱って言葉が言われてました。今だってそうだと思います。ですから、どうして一番じゃなければだめなんでしょう。二番じゃダメなんだろうかって言葉も一理あるんです。

NECが勃興してきたころからだったと思います。マイコンといういい方からパソコンといういい方に変化していったのは。オフコン、ミニコン、マイコンと呼び名があって、それがパソコンに名前がかわるからって、どういうことなの？と一瞬思ったのですが、そう違和感もなく頭が切り替わりました。こんなことをわざわざ言うのは、今パソコンがコンピュータではなく、別なものに姿を変え、私たちの生活にそうとは意識されずに平気で使われていると思うからです。たとえばタブレット、スマートフォン、。これらは私が言うまでもなく、持って歩くコンピュータです。そして通信機器でミュージックボックスにして、動画再生機器にスティーブ ジョブズはしてしまいました。

パソコン黎明期を知るものとしては 2

pc8001は日本のパソコン史上、画期的なものだことに異論はないと思います。このpcが出てからは、1番じゃなくて、2番もびりも同じことというのが常識になりました。ところがマイコンは日本の電気メーカー全部の会社がこぞって出してきました。もちろん、我が愛機シャープのMZもそうでしたが、ナショナル、三洋、三菱、東芝、そしてなんでしたか会計機器のめーか^までプリンターと一体の、会計庶路に特化したものも出してたと思います。そしてパソコン雑誌はそれらのパソコンの性能比較をよく特集していたと記憶しています。コストパフォーマンスはこれがいちばんとかの比較記事おんオンパレードでした。そして、パソコンの知識もその雑誌からしか得られませんでした。まず解説書がありません。専門書なんて、まったくあてになりません。コンピュータの知識は本としてまとめた途端陳腐化してしまっていましたから。とにかく最新のものは雑誌から知識を得る、そんな感じでした。またざっしが、新機種の紹介と解説記事だけでなく、新しい技術の論文掲載の学術出版のような呈のところまでありました。そんな文章、読んでもわかりません。しかしそんなことからビット、バイト、ROM、RAM、シーケンシャルファイル、ランダムアクセスと思いつくまま並べましたが、コンピュータの用語を覚えたのでした。いま、コンピュータの雑誌など、週刊アス**ぐらいなもので、たしかに新しいものも出てはいますが、当時とはくらべられない内容です。また、紹介されるPCも国内メーカーのものは、あの活況を知る者にはうそのような状況です。いろんなメーカーがてったいしてゆきました。NECでさえ、レノボと提携しなければ生き残れないなんて、想像もしませんでした。DELL,HP,ASUSなんて知りません。今私の使っているのは東芝のダイナブックです。もっとも、MZのあとは私もPC8801をつかい、MACを2台買い換えました。ですから、NECがDOSVに仕様をかえ、そのあと衰退していくさまも見てきています。ガラパゴスという言葉がある時あれば、NECはまさにガラパゴスでした。日本仕様のガラパゴス。もっとも、バンドルソフトの一太郎にして、今落日のジャストシステムに、我が子の同級生が就職していますが。

何年間にわたっているのでしょうか。三十数年ってことでしょうか。その間のことを、むしろ調べなおしたりしないで述べてみました。マイコンの時代はマニアックな、今でいうオタクの趣味のものでした。それがいつの間にか時代の最先端に一気かけあがり、国家の命運さえ握るほどになってIT産業なんてものになり、情報通信に変身してしまいました。めまぐるしかった。しかしコンピュータは進歩した二でしょうか。情報化時代でビッグデータを蓄積し活用してなんてうたい文句が並びます。

コンピュータって、翻訳すると電子計算機ですよね。でも、電子計算機のコンピュータって本当は計算は苦手なんだって知ってました？その苦手な計算も、足し算はまだよくって引き算のほうがもっと苦手で、掛け算は割り算よりちょっと得意だったと思います。コンピュータには経験の蓄積がありませんから、勘が働かないので、まあこんなもんかと思当をたてるってことができないのです。で、ひたすら力わざをくりかえすしかないんです。そんなところから人工知能が考えられては来たのですが、何かに特化したものは開発できても、人間のように突飛な発想はできません。直感ってやつですね。人間はどこからか何かに基づいて、ひらめきます。機

械はひらめいてはいけないのです。確実に、あるべき答えを導くだけです。発想と直感、この二つで人間の勝ちです。たとえ将棋ソフトに名人が負けても、たかがデータの蓄積量と力わざの種類の推測に負けただけです。コンピュータは覚えておくことは大得意ですから。そしてそれに一致したものを抽出するのが得意なんです。とにかくデジタルですから。そして今、そのデジタルをできるだけ細かくして、何とかアナログに近づけようとしてるだけです。変なたとえですが、トランペット奏者はトロンボーン奏者に憧れるらしいです。トランペットはピストンでデジタルに音階を吹分けますが、トロンボーンは管の長さを自由に変えてアナログの音階を出せますから。オン・オフだけで世界はできてるわけじゃありません。

しかしコンピュータは人間の附田物の最高のものであります。ありきたりの結論ですが、うまく活かして使っていきましょう。なんたって、人間が賢くなれば一緒に賢くなってくれる道具ですから。なんて結論はいらなかったかもしれませんが。

そしてタブレット 1

仕方がなかったんです。今使ってるノートパソコンも、いまさらデスクトップはないよと子供にいわれ、いやそうな顔をしてると妻が自分用にと買いました。それを横取りして、こうして使ってますから、妻にタブレットっていいわよと言われると、買ってやらないわけにはいかなかったんです。それも、子供の世話を妻が一人で赴いて、そこで味を占めてしまったという経緯があり、軽くて持ち運びができるし、シュッシュッがかっこいい、こういわれたら借りのある者、気を使わざるを得ないというものです。

機種は最初、子供の待っているMEXUS7と思ってました。先ず思ったより安い。32Gの値札を見直すほどでした。それぐらい予備知識を持たずに、大手家電チェーン店を覗いたわけですが、どうなんだろう、私のような昔人間にはキーボードのあるほうが使いやすいんじゃないかと思ってました。タブレットのシュッシュッはまったく未知のユーザーインターフェースですから。家電ショップに行っても、並べてある機種の種類が入ってないものは。起動すらどうしたらいいかわからない。電源スイッチはあるんだろうなあとは思って見ますが、あの一枚板を手にもって、裏だ表だとひっくり返して、試つ眇めつ見回すのも素人丸出しでカッコ悪い。しかしわからない。だからスイッチの入っている機種を、さも知ってる風を気取って、例のシュッシュッをやるわけです。次いで、よくわからないアイコンを突いてみる。何やら表示されたりされなかったりで、しかし、そこは年の功、さもわかったふりして、平気中を動かなくなったタブレットをそっともとへと返します。すると、にこやかな顔でチョッキ姿の店員が何かお探しいませんかと寄り添ってきます。来ないでと内心は思いながら、タブレットをと思ってるんだけど、NEXUS7ってこれですかとうつむき加減で聞いてみます。何やら色紙を重ねたようなトップ画面です。きれいと聞いてはいたのですが、どうなんでしょう・・・、あっち、のほうがいいみたい。そうです、と答えた後はにこやかな顔からなにやら口元が回り始め、よくわからない言葉と一緒に、シュッシュッではなく、ひらりひらりの指さばきで画面も動き出します。クソオ、さっきはうごかなかったのにと、もうここで気が萎え始めます。それというのも、この指さばきで持って、買えば私とそのタブレットの設定をしなくてはならないからです。このWINDOWS8も私が気を高ぶらせ、いらいらしながら半日かかって設定したのでしたから。すると間もなく今度はWINDOWS8.1のダウンロードでした。もう設定なんかしなくてもいいんだろうと高をくくっておりましたところ、WiFiの設定やらをもう一度せねばなりません。もう慣れっこで、とはいっても設定に慣れたのではなく、解らないところにこんなもんで入力することに慣れ、いらいらするのに慣れただけです。また半日でした。あちらこちらパスワードだのメールアドレスだの6桁ぐらいの数字の入力、そういったメモをかき回し、ひっくり返して間違えながらまた入力しなめます。まあ、こうしてつかえてるので成功してるんだと思いますが、タブレットを買えばまたそれをやらなくっちゃいけません。それを思うと気が重い。私がしなくちゃいけないんです。店員の言うことを聞き、それじゃ*万ぐらい用意しとけばいいんだねと、そこだけは余裕を装って、じゃ用意してくるからと、本当はその日は逃げ出したのでした。

タブレットは最初から10インチは考えてはいませんでした。あの大きさを、ちょっと不恰好ですよ。あれを人前に出すのは、ひけらかすようだし、自慢たらしくってはいけません。と思っ
てはいたのですが、こうして7インチを買ってみると10インチの方がよかった。なんか、液晶テレビの一枚板みたいな10インチが、スマートな7インチより幅広く、使い勝手もよかったと反省
しています。しかし携帯性はないのが10インチ。ましてや人中などで押されたりしたら割れち
やうんじゃないかと心配になります。

ともかく何かを選定しなくてはなりません。子供の使っているネクサス7か、あっち、の
方か。いろいろ迷いましたが、結局ネットでの、GPS機能が不評で、実際自分でやってもあ
のシュッシュュでどこか引っかかる動きになんとなく手が引っ込んで、高いほうのiPad mini
retinaを買いました。もともと私は一台目のパソコンこそシャープでしたが、そのあとはMAC使
いでしたし、子供二人にもMacを買って持たせました。それが、何時からかMacが面白くなく
なり、Windowsに代わったので、もう一度Macとは思っていたこともあります。それと、iPadの
登場の仕方は衝撃的でした。これからは業務用以外はiPadのような形になると、無関心な妻に口
角泡を飛ばしてひんしゅくを買いました。しかし、実際手にしてみて、やはりこれからはこうな
ると思いました。

さて、数日して妻にあれこれ話しかけ、あっちはこうだけどこっちはこんないところがと
迷い、そんなこと言われても私、解れへんから、という言葉に決心して結局上記の通り、iPad
mini retina 16Gを買いました。内臓メモリは32G位あったほうがいいかもしれませんが、なんとも懐
具合の性で16Gになりました。そうでなくてもAPPLE Careで更に出費はかさんだのですから。
値段の上からならsonyのエクスペリアにしてもよかった。画面はsonyの勝ちです。でもアンドロ
イドですよ。しかしネクサス7となら、Appleの方でよかったと思っています。

設定はWindowsで苦しんでいた分、ややこしくはありませんでした。しかし、ネットでも解
説書にも、どこにも書いてくれてなかったのですが、メールアドレスが2個必要です。私も一応
3個取得してはおりますが、通常は一個しか使ってなくて、他を失念してしまっており、あたふ
たしました。もし、iPadを買われるなら、設定にメールアドレスが2個要ります。

さて、これもiPadの使い方と常識と違うと思ったのは、必ず、でもありませんが、電源は切
らないで常にスリープで終わりにしておくということです。これは使い方の本の中で、そんなの
常識だろと言わんばかりに、タブレットは常にスリープさせておくものですが、といった書き方
で一行だけ書いてあり、読み過ごせば気が付かないことでした。しかし、実際使ってみるとスリ
ープからなら素早く立ち上がり、使っていて快適です。

そしてタブレット 2

スマートフォンから有名になりましたが、指で画面を撫でる例のシュッシュュッですが、この操作法は本当はあまり使いません。それより指先でグリグリ画面を動かし、指先を閉じたり開いたりすることのほうが多いです。ほかにも指先でポンと突っついたり、二度つつきとか、長押し、5本の指でつまむなどの動作をよくします。それは慣れですからいいのですが、ソフトウェアキーボードは使えない。こんなもんでブラインドタッチなんか無理です。ですから、最初っからキーボードを買おうと思ってました。しかし、そうすると妻がメールをするときの入力が大変だからiPadと思ったのが何にもなりません。しかしながら、これはソフトウェアキーボードの中のマイクのマークを突くことで大分緩和されました。これをつつき、画面に向かってささやくのでもなく、大声でわめくのでもなく、滑舌よく命令？、いやお願いし、完了をつつくと、わりあい精度よく変換され、文章や検索ワードが入力できます。これが使い勝手がよかった。

それだけじゃありません。音声入力はホームボタンを長押しすると画面下にでてくるマイクのマークのSiriがいいです。iPadを起動し、ホームボタンを長押しして、画面にしゃが掛かります。そしてiPadが何かしゃべりますから、こちらが例えば、今日は何日？とかいうと、今日は2014年2月21日ですと答えてくれます。今日の天気は、といえは時間帯に合わせた天気予報と現在の気温を表示し、今日は一日寒いですねーとか一言付け加えて返事します。iPadに添付されたアプリの連絡先に、携帯の電話帳のようなデーターを入れておくと、**さんに、今から行くとメールしてくださいといった風にいえば、メールの題と本文を聞いてきて、送信しますかと尋ね返し、送信してくれます。それだけでなく、相手がiPhoneなら、電話までかけてくれます。音声だけでなく、facetimeでビデオ電話ができます。もちろんwindowsでもskypeで出来るわけですが、これはこれ単独であれこれ設定し、名簿も入力し、それがskypeのなかだけで終わってしまいます。iPadのほうはメールアプリが連絡先というアプリの中のデーターを参照し、メールならメールアドレスを送り、電話と言われたら電話番号から電話します。この一体性は見事。使い勝手の良さは感心させられます。この機能の優れたところは、もしもですが南海大地震で電話も携帯も機能しなくなった時、インターネットでiPhoneにだけですが、電話できるということです。Facetimeなら顔を見ながらだって、連絡できます。これはちょっと驚きました。インターネット電話は知っていましたが、心強いアイテムと言えます。

まだicloudはよくわかっていません。ipadのシステムのバックアップをしろとせかされました。普通のパソコンなら自分のPCのシステムバックアップは自分の手でCDとかUSBメモリーとかに用意しなければなりません。iPadはクラウドにアップしておけばそこからシステムの修復をすることが出来ます。それこそわかってしまえば心強いし簡単すぎて、windowsはなんだったんだ、DVDやら32GのUSBメモリーを用意したんだぞといたくなりしました。

まるでipad賛歌になりましたが、アンドロイドにはない、心配りのきいた、もうPCとも思えないコミュニケーションツールにして、秘書の役割のツールでもあると思っています。

どこかの家電ショッップでiPadを見かけたら、ホームボタンを長押しし、Siriを起動して話しかけてみてください。

今何時？

今日のお天気は？

そして、こうも言ってみましょう。

歌って！

恥じらいながら断ってくるのを無理強いしましょう。

歌って！

すると何度目かで歌ってくれます。聞くに耐えなくとも拍手してあげましょう。すばらしいアップルの遊び心。

田舎親父の妄想はまだ続いております。

ついこの前、NHKでタイマグラばあちゃんというドキュメント番組を放送しておりました。岩手県の山麓に約十軒の農家が入植してきました。東京オリンピックの時のことです。それが二十年経つと村に起こっているのはタイマグラばあちゃんのご主人だけの一軒になっておます。そこへ若い人が子供を連れて、新しくやってきます。それが昭和六十三年。その年、はじめて電気が通り、テレビが見られるようになります。しかしおじいちゃんはもう相当の高齢で、おばあちゃんもテレビを見る習慣がなく、あまり見ません。一日中、米のできない畑で働き、ジャガイモと蕎麦、大根に大豆を作ります。米のできない畑で一年自分たちが食べて生きて行くためのものを作らなければなりません。おじいちゃんが生きていたときの場面で、おじいちゃんが何か小さいものをコリコリと、これも小さな包丁で何かを掻き取るというか磨くというようなしぐさをし続けています。ほんの指先ほどの大きさのものです。石ころのも見えます。一つ終わるとまた小さなものを拾い上げ、コリコリ寡黙に続けます。おじいちゃんは番組全体でもほとんどしゃべりません。この場面から2年ほどして亡くなります。92才だったか、4才だったか。おじいちゃんの剥いてたものは、小石より小さいジャガイモでした。人にあげるものはきれいなものを、自分で食べるのは指先ほどのものさえ捨てないで大事に手をかける。そうして剥いたものを紐に通し、極寒の外に吊るして水分を抜き、乾かします。寒い時は寒い時の仕事、暑い時は暑い時の仕事、と生きてゆくためにジャガイモを干し、豆腐を干します。夏の仕事で大豆を作り、冬に豆腐を作り、それも干して保存食にするのです。その豆腐を作ったときの最初の汲み上げ豆腐がおじいちゃんの一番好きな食べ物で、相好をくずして食べます。こんな彼らに言葉はありません。極寒の山里に一軒だけ残って自給自足の生活で、何か語ることがあるのかもしれませんが、語りません。おじいちゃんが死ぬ三日まえに、自分で自分の下の事を済ませ、もうこれで終わりだと言ったとだけ、おばあちゃんが語りました。そのあとは一人で何もかもをせねばならず、夏の畑仕事、冬の味噌作り、蕎麦の収穫、粉ひきとこなしていきます。乾したじゃがいもは、これも粉に挽いて団子汁にして食べるのです。美味しいのでしょうか。美味しいと言います。

生活に必要なものは電気だけ通っています。冬に水が出なくなりました。おじいちゃんが自分で引いた給水管を、雪の手も凍る中、おばあちゃん一人で掃除に上ってゆきます。継手継手を点検し、最後の取水の湧き水へは長靴で入ってゆき、取水口を持ち上げ、手入れします。誰もしてくれるものはなく、水は必要だから、杖に頼っても急坂を上がらなければならず、手が切れそうな思いでも、水に手を突っ込まなければなりません。ただ、薪だけは死ぬ数年前から、おじいちゃんが何年分も切って蓄えておいてくれてくれました。自分が死んでも不自由しないようにと、それだけの思いで九十近くの老体が木を切って蓄えたのでした。おかげで冬が越せるとおばあちゃんが言います。

おじいちゃんが死んで二年あと、もともと悪かった心臓病でおばあちゃんはふもとに降り、一年して亡くなりました。

世の隅で、語るべき言葉もなく、人に見られることもなく、輝かしいことなど微塵もなく、

自分が生きることだけで精一杯で一生を終えます。大半の人は皆そうです。世の片隅で、生きることに精一杯で終わります。

伊勢神宮の謎

式年遷宮についてですが、この伊勢神宮、何時建てられたかご存知でしょうか。もし何年とお答えになられる方がいらっしゃれば、それはたぶん違っております。神宮は2000年前に建てられたのだらうと推測されて。そして式年遷宮の制を685年に決めたのが天武天皇で、多分それまでも式年遷宮は行われていたのですが、文献上残っていて確かなことはこのことです。こんなことは単なる雑学で大したことではないのです。日本人はこの式年遷宮を決められた時以来、ずうっと続けてきました。ざっと1350年でしょうか。20年に一度壊しては新しくを繰り返してきたのです。

一方、世界最古の木造建築、法隆寺は1400年前から壊さぬよう、焼かぬよう、じっと大事に守ってきました。屋根裏のごみ、ほこりさえ、国宝かもしれないと言われております。

片方は壊して建て替える、もう片方は壊さぬように守り抜く。これをずうっと続けてきたのは奇跡といえるのではないかと思っています。

そして、神にも仏にも祈る日本人もです。

さらに天皇陛下の即位の礼も、唐の様式で行われているようですが、中国にはもう残っていないのです。

こんな日本が、最先端技術を開発し続けており、またノーベル賞受賞者を何人も出してきました。

古い手仕事の伝統と、最先端技術で作り出されるさまざまなものが混在し、せめぎ合うように見えながら調和して存在するのが日本です。

それやこれやで奇跡の国日本と思うことが出てきました。

マックスウエーバー氏のいう、資本主義の担い手としてのプロテスタントが、正直、儉約、誠実にして有能であるゆえ資本の蓄積が起こったというのなら、これこそ日本人の特性ではないでしょうか。そのうえ他を思いやる心も持っています。それが一億総中流の資本主義を作りました。たぶん一番成功した資本主義ではなかったでしょうか。だがそれを壊したのがグローバリズムという欲望の固まりでした。日本人は自分の手でコツコツと技術と先端科学を築き上げてきました。それでもってバブル後の不毛な20年を生き延びてきました。それは自分の手で作りあげてきた経験が土台にあったからです。それがなければ日本自体がバブルで崩壊していたと思います。日本を模倣して奇跡の繁栄をした国が脆いのは模倣だからで、自分の手で何も作ってこなかったからです。あの国ももう一つの国もその意味で、反映し続けることは無理だと思っています。世界の生産工場には成れても、開発センターにはなれません。しかし日本もグローバリズムのなかで翻弄され、格差社会だ少子化だと問題を抱え込みました。日本の資本も、その欲望はどことも一緒です。資本は人から離れ、資本の原理を貫きます。資本は自立して肥大化を目指します。資本が社会の中のものだからです。出資もしていないのに、ニュースの株価を一般人が見て一喜一憂します。株価が上がれば消費さえ伸びます。一般人が金を買います。バブルの時はNTT1株をどれほど欲しがったか。その要請に応えなければ、資本は衰退し、消えてゆきます

。成長し続けることが生き延びる道だからです。

しかしアングロサクソンが作り出した資本主義は今行き詰まっています。人口構成で多民族国家を統合し、それで人口資源を保つことで資本主義を維持しているのがアメリカだと思っています。あの国は欲望のチャンスが転がっており、それを掴んだものがアメリカンドリームを達成します。しかしそんな人はほんのわずか。だれもがビルゲイツやスティーブジョブズにはなれません。ゴールドラッシュに走る人たちの国です。いまはシェールガスラッシュでしょうか。中国の権力者は鬼の国です。その鬼に怯えて生きてきた餓鬼と亡者の国が韓国です。日本は日いずる国と言い放って、鬼の国に対峙してきました。

その国がいま試されているのではと思っています。福島危機を身内に持ちながら、二度も核に汚染され、バブルの後の停滞の20年で資本主義経済の結末を世界を先駆けて経験し、資本主義のその先を見通すことが出来るか、試されているのではないかと思えます。たぶんできると思います。日本人は貪らないからです。貪らない経済を築けると思えます。それでGDP世界6位ほどに低落しても、そのほうが生きやすい国になるのではないのでしょうか。

ある悲しみと後悔

かつて私自身への言い方として、岩波文化人みたいだと言われたことがありました。私なぞがそんな呼称に当てはまることなど、ありえないのですが、大学時代の仲間内でのふざけっこでした。さらに、岩波書店の本は高価で、手にすることも稀でしたから、その意味するところがよくわかっておりませんでした。しかし、あの混乱の中で、私一人が浮いていた時期があった時、先輩に、やっぱり岩波文化人だわと言い直されたのには、ちょっとむっと致しました。なんとなくわかっちゃいたんですが。

その先輩が、大学闘争のほぼ終息を迎えようとしていた時に、それも後半年で卒業と解っていた時に、退学いたしました。どうして、と訊ねると、俺はやっぱり剃刀だわ、斧にはなれないから、木は切り倒せないと答えました。そうしてさっさと、後腐れなく去ってゆき、長崎から出てこなくなりました。

それを見て、俺は憂鬱なる党派かもしれんといって、それでも共産党コンプレックスを信仰告白のように告白し、なおかつ、党は間違っている！といい、さっさと就職を決めて卒業していった先輩もいました。

先日、当時の同じ女子部員だった子が、半身不随で装具をいれてリハビリしていると電話してきました。遠い、わたしが置いてきた地方で、彼女はまだ生きています。おきざりにしてきたなんて、気障に思い込んでいるのは私だけなのは解っています。でも置いて来てるのは間違いない。私の思い出を置き去りにしてきたのですから。

感傷的になりすぎました。自転車で少し峠を越えると、後は下り坂、まっすぐ伸びた道の先に、大学がありました。誰にでも、同様な思いの場所があるはず。まだ若い人は、そんなことも思い出さないのでしょうか、いまを生きることで精いっぱいでも、思い出すときもあるのではないかと思います。

電話の先の、**君と私を呼ぶ声は、一度で解りました。また、年賀状でも出しましょう、という嬉しそうでした。置いてきたことと、忘れたがっていることがもう一度目の前に現れた思いでした。

そのとき書いた住所のメモ書きがなくなりました。

岩波文化人だね！

なんですか、それ？

博学でジレタントで、斜めに世の中を見て、自分はその場に置かない。

斜に構えた人の事だよ。

ちがいますよ！

朝日・岩波文化人！

加藤周一氏って、そんな人だったかもしれませぬね。空前の知識人と言われた人ですから。でも、薄っぺらい。

自己批判します。住所を失くしました。わたしの住所も失くしました。

私の好きなテレビ番組

テレビは見ます。しかし民間テレビはほとんど午後10時からが多いです。ではそのほかの時間はというと、水戸黄門以外はほとんどNHKの地上波かBSです。ニュースはNHKを追いかけて見ます。ですから、あなたも水戸黄門を見るようになったのねと、妻に言われるようになりました。それだけ水戸黄門には長寿番組になる訳があったんですね。しかし、民間のテレビで、ドラマなんか見ません。その他には、映画を録画して、暇なとき見るくらいです。

ですから、NHKについてはお気に入りがあります。その一つ一つをかたってもいいのですが、何を偉そうにとりそうなので、一番のお気に入りを紹介します。大河ドラマとか朝ドラのような、脚光を浴びるものではありません。むしろ、力が入っているけどさりげなく放送しているといった風情です。番組名を、京都人の密かな愉しみ、といいます。なんだ京都か、ネタに困れば京都を出しときゃなんとかなる、と、例えば旅番組なんかの扱いはそんなもんです。テレビでも旅行情報誌でも、京都は語りつくされました。ですから、番組表で最初、この番組名を見た時は、見もしませんでした。また、テレビからもその内容について、宣伝告知もありません。ですから、余計みませんでした。しかし、あるとき、ひょっと見てしまったんです。途中からでしたので、副題も知らないのですが、初老で着物姿の人がタクシーから降り、京の町屋を改造したと見える引き戸の店に入ってゆきます。手にはきんちゃく袋。店はカウンターのみ、何をやっているのかいきなりは解らない造りで、初老の男は、いつもの、と若い店主に言います。店の者は店主のみ。軽く会釈をすると、店主はちゃりっと音をさせ、何やら計量し、戻ったものの入った皿を何かに入れ、がりがりとして引いてゆきます。ここで、それがコーヒー豆だったことがわかります。少し生地の厚いコーヒーカップをカウンターにおき、それからどうしたんだったか、コーヒーカップのみ湯煎したのか、とにかくドリップポットを傾けて一杯のコーヒーを淹れます。初老の男は黙ってそれを飲み、金を払って帰ってゆきます。その間、二人に会話はありません。最初の、いらっしゃいませ、と、いつもの、という省略した注文の仕方、ありがとうございました、の最後の挨拶だけで終わります。この番組は、こういった風で、筋書きらしい筋書きはなく、普通の日常をさらりとドラマにして見せます。こういった内容ですから、生半可な役者ではこの画面と間を保てません。この着物姿の初老の男は、江本明氏が演じてました。若い店主も、最近朝ドラから出てきた、若手では有望な役者さんでした。何でも内容を見る人に見せてしまうのは、演じる人の演技力だと思います。

そのあと、初老の男が茶の家元だと解ります。初釜の茶席の準備の事で弟子との会話があります。そして、男には若い後継者がいることもわかります。ついで、初釜の茶会があり、家元が茶席を取り仕切った若い後継者に、生まじめな良いお茶でしたと告げます。後継者の若い男は、深く頭を下げます。しかし、これが、一応は合格点だったという評価なんだと、なんとなく解ります。これも演技力。

こんな流れの中で、お茶と言えば水なんですが、京都の密かな秘め事が紹介されます。京都はあちこちに名水が湧いています。それがさりげなく紹介もされますが、同時に初老の男が家元を継ぐことになり、そのお披露目の茶会のための水を求めてあちこちを探して回るところが演じ

られ、これによっても湧水の場所を紹介していきます。この実験的な演出が不自然でなく、すっと腑に落ちて見てしまえます。

さて、そのあと、茶道家元の後継者である若宗匠が着物姿で、くだんのコーヒー屋さんを訪ねてきます。そして、

お兄ちゃん、帰って来て。

と意外なことを話し出します。それからの話では、このコーヒー店のマスターは先の茶道家元の長男で、その茶道家元を継ぐのを嫌って、大学を卒業した途端外国へ6年間もふらりと旅行し、コーヒーソムリエとかマイスターの資格までとって日本に帰ってきたとか。

僕なんか医学部卒業して、医師国家試験まで通って、さあこれからと言うときに医者をやめて家元を告げと言われて、大変なんやで。それにぼくにはお茶の才能はないし。だからお兄ちゃん、帰って。

そんな話をして帰ります。兄はそれを黙って聞いているだけです。

それからどれくらい日が経ったか解りませんが、茶道家元の父が、長男のコーヒー店に入れ物一杯の水を持ってやってきます。それは父が家元を継いだ時の茶会のためにと、やっと探し当てた水でした。それを渡して、それでコーヒーを淹れてくれと頼みます。長男はそれをコックに移して飲んでみます。そして、

この水では、コーヒーは淹れられません。

と言い、背後の桐の箱に入った茶碗一客と茶筌、棗、茶杓一式をカウンターに取り出します。そして、黙ったまま、お茶を一服立てて父の前に差し出します。父も黙ったまま、そのお茶を喫します。そして長男がお茶を点てた茶碗を見つめ、しずかにカウンターに置きます。

時々、自分のために、こうしてお茶を点てます。行き届かぬところがございましたら、よろしくご指導ください。

そうやって、長男は父に頭を下げます。父は黙って帰ってゆきます。

これで終わります。なんのドラマもありません。なんの進展も、所謂、なんの起承転結もありません。静かなもんです。しかし、これは伝統があるからできるドラマです。裏付けがなければ、なりたないドラマだと思います。

こんな小説が書いてみたい。そう思いました。

私は 風車小屋だより とか、絵のない絵本 を理想的な物語だと思っています。京都人の密かな愉しみは、そのなかに敢えて描かない沈黙があり、それを伝統が裏付けております。風車小屋だよりも、ヨーロッパの風土と伝統の先の沈黙があります。この実験的な放送番組を、私は推薦します。

今その面影を残しているのは、高松駅構内の立ち食いうどん店だといわれていますが、ちょっと高級になっていて、食べたことはありません。第一、列車に乗るのにうどんを食う余裕を持っては構内に入りませんし、この車の時代、JR さえあまり利用しませんから。

じゃあ、なんの面影かという、宇高連絡船です。瀬戸大橋ができる前は宇野と高松は連絡船で渡っておりました。一番最初にこれに乗ったのがいつだったかは覚えておりません。しかしがちがちに緊張し、目の前しか見えないようになって乗ったのが大学受験の時、これが一人旅で乗った最初だったと思います。残念ながら私は受験のための目的では2年乗っております。つまり浪人したのでした。そんな緊張した旅では、甲板にうどん屋があるなんて気が付きません。ただがちがちに固まって船室に居続けてました。それが、大学から帰京するようになって少し余裕ができてからでした。宇野棧橋を駆け抜け、船室に飛び込むと、他の客が上に向かいます。座る席もないことだと、一度も上がったことのない上に向かうと男の船客が並んでうどんを求めています。安いもんでした。まるで小学校の運動会のバザー並みの値段で、味もバザー並みだと思ったのが第一印象でした。ぬるい出汁に温もってないうどん、それをプラスチックの鉢で、短めの割りばしですすります。でも、うまかった！夜風にさらされながら、船の甲板で、対岸の小さな町明かりを見ながら食べるうどんは、香川に帰ってきたという思いを一杯にさせました。まだ万博以前で、讃岐うどんが全国区になる前の事です。香川県人自身もうどんをさほど意識していなかった時代です。それでもぼちぼち、この宇高連絡船のうどんのうまさ、他県のひとにも知られるようになってきておりました。

讃岐といえはうどんと言います。うどんは空海さんが持ち帰ったとも言われていますが、無理があるようです。これも今の時代だから言えることです。讃岐の人は昔、米を作って麦を食うといっておりました。昔から水不足の讃岐の農民は、作った米を取り上げられ、麦を食うしかなかったのです。二毛作と気軽にいわれますが、私が子供時分でもまだ冬必死に農作業し、麦を作っておりました。今の時代はもう何も作っておりません。その麦を食べるしかなかったのです。そして、その麦を製粉してうどんに仕立てることができるようになったのは江戸中期、石臼で粉にひくことができるようになってからです。それまで小麦粉は杵と臼で砕いて作る高級品でしたから、一般人には食べられない高価なものでした。。蕎麦も、時に山芋つなぎとか卵を使い、生そば、十割蕎麦を有難がって二八蕎麦とかの小麦粉をつなぎに使ったものを下級品とみる風潮がありますが、高価な小麦粉をつなぎに使った蕎麦は大変な技術革新で、現在の蕎麦文化を形作った立役者だったんです。その小麦粉と瀬戸内、特に伊吹島の煮干し、小豆島の醤油が出合い、今のうどんができました。

伊吹島の煮干しは料理家の辰巳芳子さんがこれしか使わないとまで言ってくれるほどの一品です。今も香川のうどん屋さんには煮干しだけで出汁を作っているところがおおいです。しかし時代でしょうか、昆布とあわせたり、かつお出汁で関西風にしたりしてるところもあります。さらにうどん粉はほとんどがオーストラリア産ですし、中にはツルツル感を出すためにじゃがいもデンプンを加えたりとか、のど越し良くと工夫しているところもあります。ですから私たち讃岐人

も本当の昔風うどんにであったりすると逆に違和感を感じたりします。固いなあ、ざらざらやでえ、うどんが黄色いでえ……。でもいま讃岐の夢2000が新しいうどん粉用麦として栽培されるようになりました。今また冬の田んぼに麦が植えられるようになってきています。

一時期のうどんブームはすんだと思っておりました。しかし連休などにはうどん屋さんの駐車場は県外ナンバーでいっぱいになり、道の路肩にまであふれています。ですから地元の人間は有名店は遠慮して、そのすぐ近くの有名ではない店にゆきます。讃岐のうどん屋は有名店でなくともそれなりにおいしいのです。遠くから来て、有名店がいっぱいなら、ちょっと通り越してほかの店にも行ってみてください。たぶん失望はしないと思います。そうでなかったら、讃岐でうどん屋は生き残れないんですから。

とりとめもなく思うこと

高尚な言葉なんかじゃありません。

笑点の回答。

安部首相が奈良時代にタイムスリップしました。

で、どうなりました。

17条の憲法を改正しようとしています。

ショッピングモールの中の有名な本屋さんの平積みの本の帯に

キリスト教が資本主義を作った。

と大書されていました。ん、何？ 一瞬、マックス・ウエーバーを思い出しました。だが、ウエーバーも、そこまでは言ってない。資本主義の成立と精神は別個に論じています。となると、これを理解する手立てがありません。ネットでこんなテーマは検索できるだろうか。

ウエーバー氏は近代資本主義を定義づけず、一般常識の範囲での概念を前提に、プロテスタントの人たちの勤勉で誠実かつ清貧に甘んじ、職業を天職と思い、つましく暮らす精神が逆説的に資本の蓄積をもたらしたと論じました。あの気品のある、透徹した論証は今でも覚えています。

だが、ネットの解答は、そんなはずがないとか、資本主義はユダヤ教ユダヤ人がもたらしたものだ、これは何か悪意さえ感じられる論が語られていました。

どっちだろ？何なんだろ。わかりません。

地方の（岡山の）禅寺の住職の大智禅尼という人が語ってました。

英語には、心 という言葉はない。

この人はアメリカ人です。

mind heart spirit

と並べてみますが、違うのだそうです。そうですかあ。

住宅会社のコマーシャル。

家は家族を未来へと運ぶ船

航跡は家族の歴史

じゃ、子供たちが巣立ち、親が取り残され、それもいなくなった家は何なんですか。

私が毎朝犬を散歩させてる駅裏のおばあさんの家、最近明かりが点らなくなりました。灯りの点らなくなった家は淋しい。別に何か知り合いとか親戚とかじゃありません。朝晩犬の散歩で出会い、目上の人ですから、こちらから朝晩の挨拶をするようになっただけです。おじいさんが健在だったころ、運動のためとおばあさんの前を杖を付き、やせ細った腕で体を支えて歩いてました。夕暮れ時の挨拶をして犬を脇によけると、ほろにがそうに笑い、すみませんと詫びて通りました。おばあさんが後に続きます。下を向き、そっと頭を下げて、気遣わしそうにゆきました。

今も庭の木や灌木は植木屋さんの手が入っているようです。きっと誰かが世話をしているのでしょう。しかし、灯りは点りません。灯りの点らなくなった家は淋しいと思ってます。

その庭の梅がほころんでます。この13年、今飼ってる犬を散歩させてる間、毎年見てきた梅です。寒風の中、今年も花が咲き誇ろうとしています。

そういえば、もう忘れてましたが、昔路面電車が走ってた通りに、民芸品の店が新規開店してました。そのころ、ちょうど今の時期の毎年の恒例として、ひな人形を買い求めることにしていましたので、それを探す店がまた一軒増えたと思い、その民芸品屋さんにも入ってみたことがありました。

店先のショウケースと、ガラス越しに見える中の陳列品は濃い茶色のものが多いなあと、何とも意味のない感想を抱かせるものでした。入っても同じこと。民芸と言えば焼き物、壺なんですか、とすこしがっかりしながら、狭い店の中品物を一つ一つ品定めして回ります。すると、おかっぱの、白髪が筋になって梳き下ろされた髪型の、地味な作務衣風の服を着た女の人が、いらっしゃいませと声をかけてきました。この時期なんで、お雛様なんか、ないんですかねえと見渡していると、すみません、あんまり仕入れてないんですと頭を下げます。ここにすこし・・・。小さな大内雛が二組あって、それは民芸品の中でも地味なほうになるひな人形で、買ったことがありませんでした。わたしは小ぶりなほうをもらうことにして、包んでくれるのをまち、その間もう一度店の中を見渡してました。昭和の古い雰囲気、暗っぽい明かりの中に浮かんでました。

二年だったでしょうか、その店が表通りにあったのは。こちらもひな人形を探す時期にならないと、そういう店の事は思い出しません。で、探す時期になって、その店があったところが香川の老舗の土産物品店に代わってしまってることに気が付きました。そんなもんです。ですから、つぶれたのかと思ったのも一瞬で、あとは忘れてしまっていました。

ところが、夕暮れ時そのあたりを通りかかると、あの店があったあたりのちょうど真裏の裏通りに、民芸**の看板が点ってます。フラフラといってみると、やはり中は暗っぽくて地味なままでした。その出窓に、立ち雛と三段飾りのお雛様があります。ああ高いと思い、迷いました。どちらも当時のわたしには相当高価でした。しかし、もう日もないことだしと自分に言い訳をして、思い切って入り、それも高いほうの三段飾りを指差しました。そちらのほうがかわいかった、それだけのことです。ありがとうございます、と店主が手を伸ばし、人形を取ってカウンターの上に置き、なにやら探しています。わたしは所在無くあたりを見回すだけでした。結局、すみません、箱が見当たらなくてと言います。いいですよ、自宅用ですから。財布からお金を

出し、そういうと、すいません、***でいいです。申し訳なさそうにいい、それがいかにも商売慣れない、素人っぽさに見えました。やっぱり売れないんだろうなあ、というのが私の思いでした。店の戸を閉め、立ち去ろうとするのに、ありがとうございますと声がかかります。思ったより高い買い物をして、ちょっと得意な気持ちの高揚感がありました。何のために買ったかという、恥ずかしながら、妻へのプレゼントでありました。ですから相当数、お雛様があります。もういいと言いますが、今だって時折探します。で、あの店もお雛様を探す店の一軒としてまた復活したと思ってました。しかし民芸***は、そのあと看板の明かりだけは点り、店の前にシャッターが下りたままになりました。

あのお雛様を買ったの、あの店だったんだけど、今あの看板に明かりがつくだけで、戸が閉まってるんだよね。

そんな会話をしたあと、灯りだけが点る日々が続き、店がもう一度あくことはなく、灯りも点らなくなりました。店の前の大谷焼の大きな壺はそのまま立っています。

出会った言葉

みんな初めての人生を生きてるんだから

わたし、60になってこの先どうなるのか、わくわくしてるの

別に、有名な女流作家などの言葉ではありません。地方局の絵手紙紹介のコーナーで気がついて、頭に留めておいた言葉です。

今日も放送がありました。猫のしっぽ 蛙の手 のベネシアさんの最初のころのエッセイは英語の発音が美しく、しかも見つめていることが澄んでいて、たくさんの言葉を書き留めておりました。ところがその手帳を失くし、書いて安心してたのか、その言葉も覚えていないという事態に、失くしてから気づきました。再放送があるので気が付くと見っていますが、最近、どんな言葉にひかれたのか解らなくなっています。最初の印象というのは大事だと思います。その一言が、考えるヒント になりますから。小林秀夫氏の、本の題名から拾った言葉でした。

なんともおどろおどろしい印象を持ったのが

言霊

という言葉でした。これを最初に知ったのは、三島由紀夫からでした。今はよく知られた言葉ではあるかと思いますが、言葉には霊的な力があると、かの人に言われると、なにか帝都物語風の力を感じ、日本的な呪術とか祝詞の類が武器にな怖さで迫ってくるような気がしてました。なぜなら、あの祝詞ってよくわかりませんから。しかし、それゆえか、何か言い知れぬ力を秘めているような気もします。

ところが、ある番組で、宇宙の始まりに神は必要なく説明でき、それゆえ神はそこに存在しなかったと言います。神はそこにというのがみそですが、ホーキング博士です。ビッグバンと宇宙は137億年前にできた、地球は47億年前に誕生した。まるで何ともない事実の羅列のように語られます。このとてつもない事実の羅列はどうなんでしょう。知識として知ることしかできない事実が、この世を支配しているということになります。まるで無神論の神学のようなのです。

この神学の記述は数学をもってなされます。かのニュートン氏は、確かにそれ以前からあったのですが、微分積分を完成させ、ニュートン力学を確立しました。アインシュタイン氏の $E=MC^2$ はあまりに有名です。他にも数学は様々な記号を描いて、埒外の間人には理解不能にして論証が行われます。しかい、これは私見ですが、数学最大の発見は、というか、発明かもしれませんが、 $A=B$ なるものだと思います。

これは、AはBに等しい。

$$A = B + C$$

意味は、AはBとCを加えたものに等しい。言わずもがなですが、AもBもCも、違う存在であることには間違いない。それが数学者によって、=で結び付けられて、等しいと言われてしまうのです。

なんで？

大学の時、数学科の友人に尋ねたことがありました。うーん、と言ったきりでした。

20世紀最大の物理学者はアインシュタイン氏でしょう。彼の理論は、たった一行の $E = MC^2$ で終わります。ホーキング博士は、重力も電磁気力も光も宇宙のエネルギーだと言います。それを彼らは、普通の人にはとても理解できない記号を並べて証明します。数学はかの神官たちの経典に書かれた神学だと思っています。 = さえ私には理解できないのですから。

拾った言葉

もう僕たちは飛べなくなった

暗いんですかね、ゆきゆきて暗し。空海さんでさえ、そういつてるんですから、凡人中の凡人には、ゆきゆきて暗し、です。でも、まだ飛べると思ってます。いや、飛びたい。

いま手元に古いパンフレットのコピーがあります。それをキャプチャーして掲載しようかと最初は何の気なしに思っていたのですが、ふいに憚られることもあると思い直し、説明文だけでご紹介することとしました。

表紙にあたるページには上下に二カットの写真が使われて、上は複葉機が四機並び、その下を銃を背中に負った兵隊さんが馬に乗って進軍しております。その下に別枠で国防色軍服ト軍需品各種の文字が書かれ、さらにその下に色々な種類の軍服を着たモデルが並んで写っています。四国善通寺**、**商店、電話**番振替大阪**番と書かれています。

裏表紙には行軍の装備を身に着けた歩兵がラッパを吹いており、その上に一番能く鳴る喇叭のご選定 愛国印 忠勇印 特一号 軍装備品何品に限らず品取り揃え御間に合います(この文章のひらがな部分はすべてカタカナ)とあります。またその横に、銃をささげつつの体制で持っている兵隊を載せています。そして 一番強き完全なる三八式五連発銃各訓練所御愛用銃は**銃砲店へ御用命を願います とあります。ページを開けると 三八式五連銃と付属品とあり、処々品名とその説明、そして金額がかいてあります。前盆剣差帯皮剣付き 一挺分 金二十円也、ほか、払い下げの付属品を付けた場合と銃のみの場合の金額が書いてあり、銃のみなら一五円五〇銭、十七円とあります。

この店は軍の装備品はほとんど扱っていたようで、天幕 キャンプ用天幕、軍帽軍服 指揮刀 刀帯 軍用車の整備用続服、防寒チョッキ、セーラズボン防寒用、革製背囊、先ほどの軍式ラッパ、飯盒、水筒、雑囊、さらには銃剣道の面、胴、小手、銃槍肩新品(銃剣で突かれた時の防具で、これがあるから銃剣道用とわかります)、乗馬鞍、そして、尋常小学冬服があって、子供たちのイラストが描いてあるのですが、これが、ランドセルをかつぎ、学生帽に半ズボン、靴をはいております。もちろん、長ズボン付きとありますから、そちらもあったのでしょう。値段は一年生用で、上等製品値段、特製品値段の区別があり、先の値段が一円三十銭、後のほうが一円六十銭、夏服は上等製品値段、六十銭、特製品値段、九十銭であります。

この他のものも事細かに紹介したいのですが、文章で読むとただ疲れるばかりかと思うので、この程度としておきます。しかし、この商店の後継者がかつて自分の父や祖父がなにをどんな風に商っていたかぼんやりとしか覚えておらず、古い家中を探してみるとこのパンフレットが出てきたそうです。

後継者の御方も戦後生まれですから、この人が物心ついたころにはパンフレットの物をもう扱っているはずもなく、それでも母親の日銭稼ぎと表通りの土地の借地料で暮らしていたそうです。父親は世間には出ないで、家に隠れるように暮らしていたとか。進駐軍が何もかも持って行ったからと言っておりました。残ったのは大変な額の借金だけ。しかし如何な進駐軍も土地までは持って行けなかったもので、それで親子ともどもなんとか生きて行けたと振り返っておりました。

おじいさんが、これからは軍人相手の商売がねらい目だと伊予の方から5歳の子供の手を引いて移ってきたのだそうです。この5歳の子供が、現在の後継者さんのお父さんになります。おじいさんがこの地へ来たころは、まだ辺り一面葦が生えていたとか。そういえば家の横を川が流

れています。そう教えてくれたのは**メリヤス店の**さんで、この人も寒冷地用の兵隊さんのメリヤス肌着で儲けたとか。また、その横の酒屋は御用達店になって儲けただけでなく、花街の方でも販路を持っていたので私どもよりよかったですわ、とか、八百屋さんでもご用達になって鼻息荒いところがあったとか。そういえば**ご用達の厳めしそうな看板をつい先ごろまで掲げていた酒屋がありました。そこももう、先達て廃業されたのか、看板は下ろし、家を改築して、店の横の古めかしい洋館造りの家屋もきれいに改修されてました。あまり特定したくないので、町名などは差し控えます。

この、元**商店に観音寺の資料館の人がやってきて、**商店所蔵の印が押された古地図があり、それにはさらに㊦だったか、複写禁止だったかの指定がされていたそうで、ぜひコピーさせてほしいと許諾をもらいに来たそうです。それはどうも、おじいさんが軍から依頼されて、かの地に砲台を作る際の地図を保管していたらしいのです。そうであれば、これは機密です。また、直接軍の施設に寝泊まりさせるわけにはいかない朝鮮人を一度に何人か、頼まれて世話することもあったとか。しかし、同じ人をもう一度お世話するなんてことはなかったそうです。この人たちはなんだったんでしょう。間諜、工作人員？

お聞きした話はこれぐらいのことでした。しかし、当代のご亭主は、このパンフレットや地図その他を資料館に譲ってと言われはしたが、譲らなかったと言っておりました。いくら戦後70年経っているからといって、この町のおそこもここも、息子さんや父親が戦死した家がまだのこっているから、声を上げてこんなこと、言えないんですよ。恨みはまだ残っています。

そうです、恨みはまだ残っています。私の父の話です。もう終戦となり、捕虜収容所に収容されることとなったのですが、あのフィリピン戦のことです、レイテ島で8万人、全体で18万人の日本兵が死にました。増派された日本兵の内、生還したのは5000人ほどでありました。そして、その中の一人が父でありました。

捕虜収容所へ向かうことになって、兵は小隊長の前に整列し、隊列を組んで行進をさせられました。その時父は炸裂した砲弾の破片を背中に残して、傷口は何時までもふさがらず、だらだらといつまでも出血しておりました。生きて虜囚の辱めを受けず、大声で小隊長が叫んだのは、この軍人勅諭でありました。この行進の点検がもう数秒、もう何歩か続いたら父は失神していたらうと言っておりました。そして整列行進のできなかつたものは置いて行かれました。彼らに渡されたのは手りゅう弾でありました。おーい、連れて行ってくれえ、おいていかないでくれえ、という声がまだ耳の奥に残っているとっておりました。もう戦争は終わっているというのに。そこから皆がすこし離れたころ、背後で手りゅう弾の何回か爆発する音を聞いたそうです。

フィリピンの森の中で、餓死したもの、マラリヤで死んだもの、病死、負傷死、それが殆どで在りました。敵に遭遇し、交戦して戦死したものは2万人、合わせて18万人。しかし国家はいまだその実態を明らかにしません。調査もしません。父はその話を一度っきりしただけで、死ぬまでもう一度話すことはありませんでした。どおーん、どおーんと手りゅう弾の破裂する音がした、話したのはそれだけでした。

NHkの朝の連ドラって、どうして女性が主人公で、なぜ戦前戦中戦後が舞台になるんでしょう。いわば、骨董品で、かつ定番みたいな感じに思えます。今までも男が主人公だったものは確かにありました。マッサンがそうでした。しかしこれも外国から連れ帰った奥さんがほとんどヒロインと言っていいほどで、やっぱり女性が中心のドラマでした。そして、話は戦前から始まり、戦時中の困難と終戦の天皇陛下の勅語と、かつ皇居前で泣き伏せる人たちの映像、これなんて何度見たことかと思えます。そのあとは、今放送中のべっぴんさんもそうでしたが、焼け跡闇市の混乱とそこからの勃興です。と姉ちゃんもです。何とかならないのかと思うほど、くり返されます。しかし、それがなぜか共感されます。これって何？と不意に思ってしまいました。この体験は、普通ならあまり思い出したくないことのようにも思えます。今再放送されているごちそうさんでは、戦後の混乱の中、食料を求めて田舎に着物などをもって出かけてゆく場面があります。当地にも、この辺は戦後混乱時期にあくどく立ち回って、少しの食料と物々交換で大きくなったところだとささやかれているところがあります。そこは土讃線の無人駅を降りて、だらだらと長い坂をあがってゆく地形で、そのところどころに漆喰塗に瓦を置いた土塀に囲まれた、大きなお屋敷が点在しています。いまはもう御多分にもれず過疎になり、矢倉門の前も草だらけで、人の出入りのないことが一目瞭然です。しかし、世の中が落ち着いてきたとき、ここの地区の人たちは、こんどは逆にしっぺ返しをされました。たとえば町の人への嫁に行けないとか、他から嫁に来る人がいないとか。そんなことも聞きました。ここの子供たちはほかに就職することができず、やむなく家の農業を継いだといった具合です。これも同じ恨み事。

朝ドラのことでした。とにかく、そんな混乱と無秩序の中から日本は立ち上がったのでした。そんなこと今更言わずもがなですが、そこから復興してきたのは間違いのないことでした。考えてみますと、戦後のカオスの中からたった五年で朝鮮戦争がはじまり、日本は朝鮮戦争特需で勃興を果たしたといわれています。しかし、日本はその特需に答えるだけの工業力を、その時持っていたということです。立った5年です。そんな中からたちあがった、それって、今でも日本人全体が共感できる成功体験なんじゃないでしょうか。その時はどんなに悲惨で、どんなに苦しいことであったか。皆が一応に貧乏で、その時期育った子供たちは、アメリカの家畜用の脱脂粉乳を給食に飲み、パンを食べて大きくなりました。そして企業戦士となって、日本を世界第二位の経済大国に押し上げたのでした。苦しければ苦しいかったほど、あとの成功は甘美なものになります。今の朝ドラも、これを繰り返しているのだと思っています。だからといって、それが悪い

というわけではありません。しかし、そこにしかドラマはないのかとは思いますが。冬になれば忠臣蔵。朝ドラは昭和二十年。もう何か気付いてもいいころだと思います。COOLジャパンか、和風総本家、このごろまるで自分褒めばかりでもありますから。ドラマは今、始まっています。どのはずです。

いや、実際にはあと2軒ほどあるのはあるのですが、老舗の喫茶店が次々廃業したり、不幸なことがあってなくなりました。現在ある店は、ごく最近できたもので、店の在り方もまるでマックのようなやりようをとって、これが新しいやり方だと言わんばかりです。私たちにとっては、普通、喫茶店といえば、まず席に座るとお水とおしぼりを持ってきてくれて、その時コーヒーとかモーニングとかと注文するものとおもっています。ところが、商店街の中の新しい喫茶店は、椅子に座っていると、こちらでご注文をお願いしますと迷惑そうに言われます。讃岐うどんのセルフに慣れている我々ですから、レジの前に立って注文し、お金を払うことにはそれなりに対処できます。しかし、あまりなじみのない店で何を注文すればいいのか分からないうちに、品目を選べと言われても戸惑うばかりです。それでも一応これなら大丈夫と思うものを選び、一言、コーヒーというと、レギュラーでしょうか、何とかでしょうか、ホットにしますか、アイスでしょうかと畳み込まれ、呆然として立ち尽くすのみです。そして、私の視界の先には、少しお太りになったご婦人二人が、濃い目の口紅のお口を開けて、モーニングのパンをお召し上がりになって、かつお連れのご婦人と何やら声大きくお話になり、無遠慮に声上げて笑っておられます。朝です。もうすこし心穏やかでありたいものと思うのですが、店員の鼻歌と、朝の出来事をしゃべりになっている声まで聞こえ、脳に響きます。ああ、昔はもう少し品があった。そうおもいます。

それでも、ショッピングモールにいくと、スタバはスタバでこういうものかと、自然と対せるのは自分自身、不思議というものです。場所によって気持ちが切り替わっているのかもしれませんが。しかし、先日、閉店した喫茶店は、40年来の行き着けでした。内装もその間変わることなく、壁の絵も同じものが掛かっており、それでいて手入れが行き届き、居心地は良かったんです。コーヒーの味も変わらず、でも、少し値段は上がりましたかね。それも時代の流れと、店主のおばさんが恐縮するほどではありませんでした。閉店の少し前にたまたま行き合わせたのですが、店を閉めるとは気づきませんでした。また行けば、同じように迎えてくれるものと思っていたのに、店主高齢のため、閉店しますとあって、いまでも同じ張り紙がガラスの向こうに張られています。

私と、私の最後の犬

夏至を過ぎると、また一日一日少しづつ日が短くなってゆきます。今は、朝4時過ぎに起きると次第に明るくなってゆき、ついには窓に日が差して犬の散歩に出かけなくちゃと、毎日の習慣で体が動きますが、夜の開けるのが遅くなって、しかも寒かったりすると、もう体がこわばります。しかも、気だけ若い前期高齢者は余計にそうです。ですから、まだ夏にもなっていないのに早や気が重い。

私の飼ってる洋犬も、今年満15才になりました。一日家の回りを、涼しい所、快適なところを求めて、まるでよろけるように歩いて移動しています。15年前と言えば、私もまだ50代前半でありました。うちの犬の方も幼年期でやんちゃそのものでした。今振り返ってみると、そんな時期はほんの一瞬でありました。可哀そうなことをしたと思っています。今はもう動くことさえままならない様子ですから。それと同時に、私も同じだけ年を取ったのでした。まだよろついてはいませんが、先は同じこと。しかしまだやることがあると思っています。ですから、まだ一人で歩けます。なにしろ15年、雨の日も雪の日も、毎日、どんな天候の日でもじっと耐えて、犬を散歩させてきたのです。

すこし寒さもやわらいだのでしょうか

四国はこれから最高気温が10度の二ケタになるようです。最低気温の方も週後半には5度を超えそうで、いまだ雪に埋もれ、被害に苦しんでいる人たちのいることに心苦しさを感ぜながら、すこしほっとしているところもあります。

朝の日の出の時刻が大分早まり、6時半ごろ出かけられるようになりました。ほの明い中をでかけ、帰るころに日が昇り始めます。その曙光の影に、山の溶け残りの雪が白く見えます。こんなに雪が残った年はめずらしい。この雪がとければ春になるような気がします。そんななか、硬い枝振りのさきに、白い花が今日はたくさん咲いておりました。白い梅が咲いておられます。ついこの前まで蕾のままだったのに、咲きました。数こそ今年は少ないのですが、毎年見てきた梅です。しかし、去年もこんなだったかと忘れてしまっており、それでもその木に梅が咲くと嬉しくなってきました。そこは、私が犬を飼って散歩に連れてくるようになって知ったところですから15年目ということになるのでしょうか。散歩させている犬が、15歳になるのですから。そのことから、わたしも15才年を取ったということになります。犬の散歩用のジャンパーは最初の時から変わっていませんのに。しかし考えてみると、私の身の上も大きく変化しました。毎日毎日の積み重ねですから改めて振り返らなければ、そんな感慨も起こってきません。

手作りのお弁当を明るいブルーのリュックに入れて、妻と少し遠い花公園まで歩きました。片道1時間半。ゆっくりしか歩けない妻の足取りに付き合いながら、山の辺の道をゆくと、あんなに贅沢な、と思ってしまう。こんな贅沢をしていいのかと、すこしわが身を見直してしまいます。いいじゃありませんかと妻は言います。もうあくせくしなくてもいいじゃありませんか。田舎暮らしは最初からです。田舎で暮らして、少しのものを食べ、少しぜいたくして、時々昼寝して本を読み、好きなコーヒーを嗜む。こう考えると悩みなどないように見えますが、これはこれで担いきれないほどの悩みがあります。その重さに潰されそうになりながらも、この日は歩いておりました。

歩きます

歩くって体にいいはずですよ。そう思い込んで、この1年月水金は一日2時間ほど歩いています。あとでMAPIONのキヨリ測なんかを使って歩数、距離、消費カロリーを調べたりします。しかしたいていは行き当たりばったりで歩いていますので、正確なことなんてわかりません。別に解らなくていいんです。大体、信号に来ると、すぐ渡れる側の方に方向を決め、曲がってみたりわたりたりです。すると、よく知った土地なのに今どこを歩いているのか解らなくなったりします。まあそれが楽しくてわざと知らないところを歩いてみたりしているのですが、ときどきは山を見ます。いわば、山だてってことをしてみます。漁師の人が漁場を見極めるのに山を見るそうですが、それと同じです。あの山がこの角度で見えてるから、こんなところを歩いてるんだろうと見当をつけられます。そんなことしなくても大体はわかっているのですが。

歩いていると、何か考えるのかと以前は思っていました。四国八十八カ所巡りをする人は必ず真言宗だとは限りません。いろんな宗派の僧侶が修行のため、歩いているそうです。たまたま見たニュースですが、九州の禅宗の修行僧が歩いてました。それに、八十八カ所自身、全部が真言宗というわけではありません。金蔵寺は天台宗ですし、浄土宗の寺もあったと思います。禅宗もあったはず。緑の国四国は寛容なんです。そう思いながら、八十八カ所巡りではありませんが、立禅、歩き禅のつもりで歩いています。すると、八十八カ所巡りをしていると昔亡くなった人に会えるという言い伝えのように、誰かに会えるかと思ったりしますが、会えたためしがありません。しかし、脳裏に何かしらの影が走ります。昔かかわりのあった人の事や、一瞬の出来事が浮かびます。それがあまり楽しいことじゃないことばかりです。私だけの事でしょうか。一瞬のフラッシュバックってやつは結構つらいものがあります。吉行淳之介氏が、首がすくむといったのでしょうか、伸びるといったのでしょうか、そんな思いがするとかいておりました。私も思い出したくないことまで思い出し、首がすくみます。もう遠い昔の事なのにです。そしていつも慚愧の念に駆られます。取り返しのつかない年になっていますから。悔んだり詫びたり、自分のおっちょこちょいな言動を後悔したり、歩いていて思い出すことは碌なことじゃありません。でも、不意打を食らわしたフラッシュバックも、ひらめく時と一緒に、一瞬に消えます。消すんです。思い出した人とはもう一緒に生きてはいないので。しかし、彼らも同時代人。

しかしまた違った思いも去来します。遠くのものには愛せるのに近くの者は愛せない。カラマーゾフの兄弟の中の一節でした。人は身勝手です。

しかし、私は、彼らも同時代を生きている人たちだと思えることにしています。きゃっと首の伸びる思いは吉行氏にまかせ、もう何も思うことなく、歩きます。

春待つ気配

もう春がきます。ニュースでは、桜の開花宣言がありました。しかも今年は花冷えで、花が長持ちしそうです。山に他の種の桜は満開でした。しかし、この辺りはまだ開花宣言はありません。栗林公園の標本木は、まだ咲いてないのでしょうか。

今年は、どこかに花見に行くつもりです。それも、地元ではなく、ちょっと遠くへ。

花見は、かつて秀吉の醍醐の花見から始まったというような俗説があります。庶民が花見をするようになったきっかけとしては、その通り。しかし宮中では嵯峨天皇の御代に花宴の節が催されたと記録されており、それが八一二年のことですから、日本人はかくも長く花見を愛してきたのでした。

花といえば桜を意味するようになったのも、平安時代からでした。奈良時代は中国文化の影響が強くて、花といえば梅をさしていました。それが平安時代に国風文化が育ち始め、徐々に花といえば桜となっていきました。そんな具合ですから、今さらながら紀貫之がとか、西行法師がと言わなくとも、まるで生まれる前から桜をめでて来たような気である日本人は、春ともなると、花の気配を心待ちに待つようです。全国ニュースでこの時期は、桜の開花宣言を毎日追いつけて報じます。まさに国民的話題、関心事と言えます。

そういえば、尾道の千光寺公園の桜、松山城の桜、姫路城、京都の桜、奈良の桜、ほかにもいろいろ見てきてます。でも、この時期、つぎはどこへ行こうと、つい考えます。地元はもう、この年になれば行きつくしましたから。

ついこの前、庭の植木の手入れに植木屋さんが来たと思いますのに、早や今年もそんな季節が来てしまいました。今来てくれている植木屋さんは、それまで来てくれていた人の代わりです。何か急なことがあって、あとを引き継いだのだと二年前、言っておりました。ですから、新しい植木屋さんにお世話になるのは今回で三回目です。やはり手が変わると、やり方が違っているものです。松が今までになく生き生きとなりました。それがどんなもんかわかりませんが、三十年来の松ですので、喜んでいきます。そしてこの押し迫ってきた時期ですので、松飾も考えねばなりません。昨年来より、これを自分で作っております。といっても、松のみどりと竹を山から刈ってきます。この竹を加工して筒にし、松を差す窓を開けます。そうして門に飾ります。紅白の折り紙サイズの紙と紙縫りが、なんと百円ショップで売っていますので、これで松を二本ずつ括って、これを竹筒に入れると、竹の新緑が正月を迎えるのに似つかわしくなります。ここ三年、注連縄を飾るとともに、これを私どもの年越しの行事にしています。

さて、ところがこれの材料となる竹をどこかから手に入れなくてはなりません。しかし、これも幸いのこと、寺領や神領である山からは、植物を根こそぎ取ってはいけません。正月ならば松の緑とウラジロなどはもらっても怒られることはないそうです。ですから五月の節句のカシワの葉、秋のススキ、いまなら一重の椿、梅雨のアジサイなど、枝と枝に生る花一輪、食べられるものならアケビに栗、野イチゴ、春先のナツメ、時に嫌われ者のギンナンなどは頂いてきても大丈夫なんです。すいません、これは善通寺さんと金毘羅さんだけかもしれないので、一応お断りしておきます。

で、今日、竹を頂いてきました。山の頂上近くまで登るとキャンプ場の上が生い茂った大きな竹藪です。そこまで登るのは大変ですが、これとても健康のため、新しい年を迎えるためとそう思って、リュックを背負い、なかに折り畳みの鋸をいれて上がって行きました。暮れもまじかいので、ひともいません。野田古墳が修復されていました。そこから少し行くと竹藪です。枯れた笹の葉を踏んで中に入り、適当な太さの竹を選び、根本ではなく、少し高いところで切ります。そして、適当な太さのところで竹筒にできるようにカットし、ありがたくいただいてきました、残りは適当に小さく切り、ばらまいておきます。そうするとまた土にかえりやすくなるからです。竹は殺菌作用がありますから、なかなか腐らないんですが、ちょっとの気遣いです。

これを持ち帰り、節の上下を切り、節の中ほどに窓を開けて竹筒は完成です。これに松の緑を差すと門柱に括り付け、注連縄も玄関に飾り付けて、今年も正月飾りは整いました。

香川の人だったのです 1

香川県は住むと一目瞭然にわかることですが、災害がすくない、気候が温暖と、自然にめぐまれております。ゆえもってか、今流行りの七難八苦を乗り越えて偉業をなしとげたなんて人物はそうおりません。しかしながら、その一番にあげるとしたら、空海さん、つまり弘法大師さんでしょう。それはもうことあげする必要もない人物です。ところが、あの安部清明さんが、この讃岐のお生まれだという伝承があります。大日本史料、讃岐国大日記という史料によれば、讃岐国香東郡井原庄で、また丸亀藩の公選地誌「西讃府志」によれば讃岐国香川郡由佐がその生まれだとされています。「井原」という地名は古代讃岐の郷の一つで、現在の高松市香南町辺りです。「由佐」という地名は現在も香南町にあり、そこは室町時代に由佐氏という武将が領有していたところだそうです。

もちろんこれほどの興味深い人物ですから、他の場所でもいろいろと名乗りをあげております。大阪市阿倍野区であったり、茨城県茨西市などがそうです。その大阪には清明さんの母狐をまつた信太森葛葉稻荷神社が和泉市葛の葉町にあります。以前ご紹介した、恋しくば 尋ねきてみよ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉の歌もここに由来しております。そして、大阪市阿倍野区の清明神社が清明さんの生誕地で、産湯井の跡もあるそうです。そんなことからでしょうか、京都清明神社では、清明さんは稲荷伸の分霊であるとして、稲荷社が末社として一緒に祀られております。そして、清明さんの判紋で晴明桔梗と呼ばれる五芒星がいたるところに飾られております。

香川の人だったのです 2

安部清明さんの出自については、以前にも記したことがあり、おいておきます。いま考えてみたいのは陰陽道なるもののことです。

夢枕獏さんの陰陽師では、安部清明さんが宙を飛び、呪をとなえて結界をはり、敵や物の怪と戦います。まるで平安朝のハリーポッターみたいです。では陰陽道は魔法使いの魔法だったのでしょうか。魔法のステッキを構えて、なんとかあ、と呪文を唱えるとなんかになるのです。その魔法のステッキは、USJのお土産売り場でも買えますから心強いです。敵が現れれば、杖を構えてベルクラールとなえましょう。敵は吹っ飛ばすはずですよ。

しかし陰陽道はそれとは違っているみたいです。元は古代中国において、過酷な自然を知り、将来のことを予測できるようにしようと始まったことのように思えます。そのためには、自然が何から成り立っているのかを知らなければなりません。それを古代中国の人は陰陽と五行からなると考え、災害やら吉凶を説明しようとしたのでした。そのために天文、暦を考案し、占いとしての卜噬、つまり易などを考えだしたのでした。つまりこれは、将来を予測する最新科学であったわけです。これが日本には六世紀ごろ伝えられ、大変重要視されたのですが、平安時代からはこれが持つ神秘的な面が強調され、方術化してゆきます。どうも、中国の道教とか神仙思想が混じって、神秘化していったようなのです。それというのも、もともと日本には山岳信仰があって、山伏さんのように屋まで修行すれば特殊能力者になれるというふうな俗信がありましたから。そういえば気功法を体得すれば、気を発して相手を吹っ飛ばすことができるようになるなんてことも喧伝されたことがありました。まるで、カメハメ波みたいです。ゴクウになれるのならなってみてほしいです。

しかし、そうだからといって陰陽道を馬鹿にしてはいけません。紀元前二千年まえの人が自然とその脅威を解明しようと、この世界は陰陽の二つと、全ての事象が木、火、金、土、水の五要素の組み合わせから成り立っていると考える自然科学思想を作り出し、そこからさらに天文学、暦学、時計などの学問をうみだしたのですからすごいことだと言わなければなりません。我々はその地点からどれほど踏み出しているのでしょうか。

陰陽道は学問でありました。その中に暦、天文学があり、秋分春分の日を既に知っておりました。ご存知でしょうか。伊勢神宮の宇治橋と大鳥居、春分の日には橋を渡り切って、太陽の昇るのを待ち受けていると、橋の向こうの大鳥居の真ん中を陽が昇ります。あの時代、早やそれを知って、この橋と大鳥居は作られていたのです。